

回
顧
追
想
錄

座談会(二)

(開校当時の思い出)

日時 昭和三十七年十月二十六日

会場 母校内同窓会館

出席者

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|-----------------|---------------|----------------|----------------|---------------|---------------|----------------|----------------|---------------|----------------|------------------|-----------------|----------------|----------|----------------|
| 寺尾 豊 (第一回機械科) | 橋本 亀一郎 (第一回電気科) | 常石 猛 (第二回電気科) | 堀川 幸家 (第四回電気科) | 小川 楠水 (第四回電気科) | 清水 明 (第一回化学科) | 高橋 享 (第五回化学科) | 榎谷 隆茂 (第五回電気科) | 大西 賢吉 (第二回化学科) | 北村 正 (第四回化学科) | 田村 正夫 (第九回機械科) | 川久保 友一 (第一〇回電気科) | 戸梶 校長 (第一一回電気科) | 沢本 豊 (第一三回機械科) | 録音、再生、編集 | 沢本 豊 (第十三回機械科) |
|---------------|-----------------|---------------|----------------|----------------|---------------|---------------|----------------|----------------|---------------|----------------|------------------|-----------------|----------------|----------|----------------|

「戸梶」諸先輩をはじめ同窓各位の御尽力によりまして、開校五十周年の記念事業としての図書館も先程御覧いただきました通り立派に竣工いたしました。生徒はもとよりのこと職員一同大変感謝申し上げます。

記念式典は御承知の通り五月四日に盛大にとり行なわれましたが、開校五十周年記念事業の一つとして「記念誌」を発行することになっておりまして、目下その準備をすすめておる次第でございます。

その原稿につきまして皆様方にも係より御無理を御願いしておることと存じますが、先頃って橋本さんよりいっそ座談会を開いてはどうかという、御指示をいただきましたしまして、川久保さんや、大西さんとも御相談の上この会を開く段取りとなった次第でございます。



各氏の
本川、橋本、尾村、寺北、方前、方前、左側

から、橋本先輩には遠く鹿児島から、御出席いただきまして、本当に感謝にたえませぬ。私共の知らない学校創立当時の思い出話や、裏話、或いは、当時の生徒としての思い出などをお聞かせいただきまして、この記念誌をより有意義な立派なものにしたいと存じます。何卒宜敷しく御願ひ申し上げます。……誰方が司会の方をお願いした方がよいと思っておりますので、誠に勝手ですが、同工会の会長である川久保先輩にお願いしたいと存じます。

拍手

「川久保」要領を得ないと存じますが、御指名でございますので、暫時司会の役を引受けさせていただきます。ただいま校長先生からお話のあったようないきさつで、この会が開かれた訳でございますが、できればこの会に引き続きまして、年代を分けてもお二回位この会のような座談会を開いては……ということになっております。もう余り期日も残されていないようでございますので、実現しないかも知れませんが今のところそのように予定しております。

早速でございますが寺尾先輩に口火をきっていただきまして、昔の御話を承りたいと存じます……。

「寺尾」 御指名をいただき戸惑っておる次第でございますが……今日のこの……学校の五十年の昔を偲ぶという、誠に意義深い記念すべき催に御招きいただきまして、誠に有難く感謝しております。丁度帰省する用件（県庁々舎落成式参列のため……編者註）もございましたので喜んで馳せ参じた次第であります。この懐しい母校で皆様方とほんとに水入らずで、昔を語り又お話を承る機会を得ましたことに心から感謝しております。

ただこの席に前校長の森岡先生の御姿をお見受けすることの出来ないのは何んにしても淋しい限りであります。去月初め先生の卦報を東京で受けとったときは間違いではあるまいかと……と暫らくは信じることも出来ない程でありました。先生の高潔な御人格や卓抜した識見や学識については今更ここで私の口から申し上げるまでもなく、皆様方が身を以て御存知の通りであります。全生涯を工業教育に捧げられ幾多の人材を世に送った偉大な御功績は云うまでもないところであります。今日工業教育の重要性が強く叫ばれておる折柄今にわかに先生を失なったことはただに高知県のみならず、国家的にみても大きな損失だと惜まれてなりません。私などの個人的な感情から申しますと、単に惜しいとか、残念だとかいった言葉では云い表せない……なんと申しますか、ほんとうに……痛恨……という言葉でしか表し得ない心地がいたします。御指名をいただきお話をはじめますまに心から追悼申し上げる次第でございます。

私は母校の第一回の生徒募集に応募したのでありますが、私は須崎の高等の二年（編者註：当時は小学校六年、高等小学校が二年と三年の処があって実業学校や中学校は小学校卒が入学資格で師範学校だけ高等小学校二年卒が入学資格となっていた）から入学した。私は至って不出来、全く出来ない、ここに居る橋本さん、この人は非常によく出来たネ。確か矢野が一番で橋本さん、アンタが二番だったネ、私はズット下で三六番で入学した。

「橋本」 そうだったかね、確か定員七〇名のところへ二九〇人位志願者があって、結局九〇人採用したことは憶えています……

「寺尾」 その九〇名中の三十六番だった訳だから、まあまあ中頃というところかね、ハハハ

Ⅱ 笑 声 Ⅱ

それで開校式は公会堂でやったが……あれはどこだったかね。

「橋本、その他」 帯屋町／＼

「寺尾」 その公会堂で開校式を行なった時に竹内綱先生が御話の中で「倅明太郎」「倅、明太郎」という言葉を度々入れられたことが強く印象に残っております。そうして我々にジュン、ジュンとして工業学校設立の精神……それを私共は竹内精神として今までも、遵奉して参りましたし将来もまたかわることはないと思えますが……その精神をお説きになった、その時に云われたお話の要旨は、私の記憶に誤りがなければ「我国は農業を以て国を養ない、工業を以て国を富まさなければならぬ」ということを強くいわれた。これが竹内先生御父子の工業学校創設の基本的なお考えだったことは間違いないと思えます。

「農業は国民の糧としてその健康を保持してゆく上にも或る程度振興させなくてはならないが、終局的には工業を以て国を興し、富ましめなくては、世界の先進国に伍して行くことはできない」というお考えだったですネ……また現にその通りになった訳ですネエ。

そうして、その席には——ここに写真がありますが（開校式の記念写真を指さしながら）……当時の蔵前高工（東京高等工業学校の意で、今の東京工大の前身）の校長であった手島精一先生も列席しておられました、この先生がまた、実にお偉い方で、人格といい、学識、識見といい何に一つ非の打ち所のない、実に有名な先生でしたが、——尤もこれは後になって知ったことで、当時まだ子供であった私はその時そんなお偉い方とは知らなかった——この手島先生が私立高知工業学校の教育課程とか、教育方針とか設備とかいった創立当時の極めて重要な仕事を一切おやりになつたようですネエ。

竹内先生は早稲田大学に理工科をつくって寄付されました、後に理工学部となった次第ですが、そのような関係で、早稲田から、中村先生や、山本先生がお越しになって、手島先生をお助けしたわけです……まあそういうこと

で……普通の工業学校ではいけない、もっと程度の高いものをつくろうということになり、高等工業と工業学校との中間を目標とした学校が出来た。然も単なる学問だけではなく実務も十分出来る技術者の卵を養成しようとする目論みだけではありません。

全国的にみても五年制の工業学校は外になく、大部分の学校は後に「乙種工業」となった三年制だった当時、五年制として然も学問だけでなく現場へ挺身して実際に、知識を物に換えることの出来る技術者を養成する、ということに、竹内先生や手島先生の非常な卓見が表われておったと思います。そういうことで、私共も子供心にも竹内先生の御精神に心を打たれ非常に感激しまして、奮起しなくてはならないと心に誓ったことでした。

ここに居る橋本君などその手本で、最優秀生、タカで帽子へ金モールをまいて（当時優等生は帽子へ金モールを巻いた）私ら大いにアラキを取られたものですよ。ネ君（橋本氏を顧みる） 笑しきり

当時は回顧してほんとうに懐しく、また強い感銘を覚える次第であります。私がいづらか仕事をして少しばかりの財をなした時に、郷里の須崎へ中学校を寄付せんかという話がありました。中学校は嫌だ、将来の日本は工業立国でなくてはいけないから工業学校ならお手伝をしよう、と申しましてお手伝した次第ですが、これも竹内先生の御精神を遵奉し、先生にあやかりたいという私の気持と、先生からお受けした、御恩の万分の一でもおむくいしたいという考えからでたことあります。ここにお集りの皆様方にも、竹内精神というものは十分とけこんでおることと思えます。そうして、この精神が皆様の過去に強く影響してきた。また将来にも強い影響を及ぼすことと思えます。このような意味におきまして今日この催しは極めて意義深いところであり、この会に列席さしていただき、昔を語る機会を得ましたことを心から感謝しておる次第であります。

「橋本」 実はこういう必要の起ることを予想しまして、学校創立当時の模様……私共は当時子供で詳しいことを知らないから……正しい経緯を記録して残しておきたいと思って……皆様も御記憶だと思いが、前の図書館が焼けない前に、ここで吉崎先生の同窓会葬をしましたネ あのとで、森沢先生、

村井先生、それに溝淵先生、このお三人をお迎えし創立当時を偲ぶ座談会をしました。専門の速記者を雇うてきて、速記にとつて、そしてそれをまとめることを中島三流に頼のんであります。ところが残念なことに戦災で焼けて仕舞いましてネ本当に惜しいことをしました。

先程寺尾さんからお話のあったように、開校式は五月四日に公会堂でやりましたが、その翌日だったか、翌々日だったか、吉崎先生が全部の生徒を集めて、竹内綱先生を壇上へ御案内せられた、その時綱先生の云われたことを聞き、私は子供心にも実にお偉い方だと思った。

先生はただ一言おほいことを云われた「私は学校のことは全部校長にまかせてあります」ただこの一言だけであとは何んにも云われなかった。私は強く印象に残っております。実にお偉い方だと感じましたネ。

これは直接先生から承ったことではなく、吉崎先生を通じて聞いたことです。先生はこおほいことを云われていたそうです。「人間というものは世の中を渡るのに、世の流れに平行してはいけない。そうかといって逆でもない世の流れに直角に渡らなくてはいけない」……とこういわれていたようです。一つの処世訓だったでしょうネ。

それから先程の寺尾さんのお話の中に、学校の教育方針として実技に重きをおいたということを申されましたが、その一つの表れとして実習の先生は夏休みにはみんな会社へ実習に行かれましたネ。実習に行かないような先生は辞めてもらう……まあ、これ位強い方針だったように記憶しております。明太郎先生については寺尾さんアンタから一つお話しして下さい。

「寺尾」……私共だけの話でなく外の方々もどうぞ……

（一同異口同音にどうぞお願いします……）
「寺尾」……それでは……明太郎先生は全然といってよい程ものを云われないう方でした。演説というものをしたことがない。大正四年を最初にして衆議院に三回当選されたわけですが、議会の演壇に立つたことがない、ものを云わないから立つ必要がない、一切演説をしない、それでいて全院委員長という重要な地位に推されていきました。それでもいうことは全部副委員長が云って、明太郎先生は一言も云われぬ。何んと申しますか一つの無言の雄弁と

でも申し上げますかネ、それでいて国会でも非常に重きをなしていました。吉田先生（元首相吉田茂氏）も長兄（明太郎先生）だけには頭が上らんとよくお話になっていました。

私が竹内家で書生をしていた当時の思い出ですが、明太郎先生は毎朝五時には起床されて応接間へでてこられる。それまでに冬なら応接間へ火鉢を入れておくといったようなことが私の役目だったわけですが、或る時その応接間で吉田さんが明太郎先生からウンと叱られておる。コッピドク叱られておるですネエ、何事だろうと思いましたが書生の私から聞く訳にはゆかない。ずっと後で吉田先生から聞いた処によると何んでも「小遣い」を無心に行ったときのことだったようですネ。

とにかく実にお偉い方でしたネ、全院委員長をやり、然も演説などしたこともない、選挙の時でも郷里へ帰らない、演説をしないから帰る必要もないわけですネエ。

それを今、吉田さんが羨らやましがりましてネ「寺尾君、一度でよいから、私を土佐へ帰さないで、長兄のように当選するようにして呉れんか」と冗談まじりにいわれたことがあります。

長く先先のお側に仕えていまして、私がキャッチした先生の口癖がただ一つだけあります。それは気に入らない人に対しては「アンな奴は死んぢまえ」とこおいう激しい言葉を口にせられる、アノ寡黙なものを云われぬ方が悪るい人に対しては「アンナ奴は死んぢまえ」と云われたですネエ、寡黙な方ではありましたが、内には非常に固い信念と申しますか、主義をもっておられて、いい加減な権謀、術策をもてあそんで、政治を落させ、世を毒し国民を不幸にするような政治家に対しては非常な義憤を抱かれて、今申し上げたような激しい言葉となって表れたでしょうネエ。

先生は六十何才かで茅ヶ崎の別荘で肺炎でお亡くなりになりました。私も東京に居りましたので直ちに馳せ参じましたが……奥様は女子師範学校を卒業された方で九四才か九五才の高令で先年亡くなられました。

私知事に会うことになっておりますのでチョット失礼しますイヤ直ぐ帰ります、実に懐しい得難機会ですので、ぢき帰つてきます。



右より 清水、大西、櫻谷、戸梶、川久保、高橋、小川各氏

（寺尾氏中座す）

「橋本」それでは寺尾さんのおられない間に先生の余り関係なかつた、学校の移転問題について御話し合ひしてみましようか。昭和十二年でしたか十三年でしたか、校舎が狭くなつてどおしても広い敷地のとれる場所へ移転しなくてはならないという問題が起つた訳ですが、移転につきましては、同窓会は非常に大きな働きをしました。以下この移転に関連して約四〇分思出話しに花が咲きました。別項「母校の移転改築当時……」に詳しく載っておりますのでこ

こでは省略します。

「川久保」大分長くなりそうでございますので、召し上りながら……の用意ができておりますので、召し上りながら……

……寺尾氏県庁より帰られる……

「川久保」私共十回程度の卒業生も竹内先生の御精神は、十分とは申せな いまでも、或る程度は身につけておると考へていたのでございますが、先程 寺尾先生の御話を承りましたは、まだまだ不十分で御恥しいような心地が 致します。そのような意味におきまして、開校当時の生徒の気質とか学校の 空気とかを想い出されまして、今の生徒諸君のあり方などにつき、私共は勿 論、後輩の人々の参考になるような、御話を承ることができましたら大変 幸いでございますが……

「寺尾」難かしい御注文ですネエ……これは……なにせ私しにてもここに居

る橋本さんにして悪戯、坊主の大将で二度も三度も停学を喰うった、曰く付きの生徒ですからネエ……何時だったか「吉田のぢいさん」が総理大臣で高知へ来られた時、工業学校の生徒に話をしやってくれとのこと、私が「ぢいさん」に御願をして、承諾を得たところが生徒が承知しない、総理大臣などの話しは聞きたくない、ソナ偉い人の話など聞く必要はないといって肯じない……そこで大いそぎで同窓生の連中を狩り集めて、吉田さんには事情は伏せて、一切云わないで、同窓生だけで先生のお話しを聞いたことがあるぢやないかね……生徒だとばかり思っ話をしてるうちに、じいつと「吉田のぢいさん」がよく見ると白髪頭が見える禿頭が光つておるといふわけで……コリヤアイコンと吉田さんが急に話の内容を変えたということがあったネエ。「戸梶」……何時でしたか、中庭で全生徒、職員にお話いただきました、後で同窓の方々も入つて一同で記念写真を撮ったことはございます。……アレは昭和二八年であつたと記憶しております、今の寺尾先生のお話しは何時でしたか……

一同ザワザワと暫し雑談II

「北村」 ア、そうそう思い出した、昭和二五年だった。丁度野球問題の後で生徒の間に普通でない空気の流れていた時だった。間違いない、私が校長室で字を書いて貰ったから覚えておる。

「寺尾」 マア……そういつたような具合で「吉田のぢいさん」も生徒からポイコットされたワケですネエ……こう云つては御無礼になるかも知れないが……戦後一時そういった権威に対して反抗する、それも深い根拠のない反抗を示す、といった時機がこの学校にもあつたようですネエ……アノ時は後で吉田さんから事情を問われて、私もいさゝか困つたことでしたよ。

「橋本」 昔は「バンカラ」というか身なりや服装を飾るといふようなことはしなかつたネ海南中学（今の小津高校の前身）などよくその下級生をキタウ（鉄拳制裁の意）という話を聞いたが工業ではそのようなことはなかつた、下級生を可愛がつたネ。

「寺尾」 そうよく可愛がつた。私共は第一回生だったので高等二年や三年から入つた者が多く中には亡くなつた森岡さんのように廃校になつた第二中

学から再入学した人もあつて、下級生とは大分年も違つて「オンチャン」でしたからね、本当に弟のような気がして可愛いがりましたネエ……そのよく「くんできさま」へ連れていって「名探偵」の話などして聞かせたことでしたよ。

「北村」 創立当時はそうぢやつたか知らんがワシ等の時分は相当「キタワレタ」帽子が曲がつちゆうといつては「キタワレ」、敬礼せんといつては叩かれたことぢやつた。

「橋本」 私共は「ワリコトシ」の大将でしたからね……勉強もソコソコやる代りにワリコトもうんとやりました。先生（寺尾氏の意）としても私にしても二、三回停学を喰らっていますよ、然し先生と一緒に風呂へ入つたりした時は先生の背中も流しましたし、お家が引越のときは手伝に行たりしましたネ。これはずっと後の話ですが、吉崎先生が御退任後、先生に御在取中一番お困りになつたことは何にですか……と御聞したことがあります。すると先生は「生徒の処分問題のとき若い先生が理論的にまくし立ててくるのを上手に納得させて出来るだけ処分を軽くするようにするのが骨だった」……と話されました。

先生の御考えでは「ワリコト」をする奴はそれだけ余力がある、こんなのは特に悪質ないたづらでない限り余り処分すべきではない……という御方針だつたようですネエ。

「田村」 当時の校風と云へばどんな点が特に他の中学校と変つていましたか
「寺尾」 とくにこれといつて指摘することは難しいが他の中学校とは異なつた何かがありました。

何んと云つても全国で最初の五年制の工業学校ではあつたし、先程もお話した竹内先生の開校の御精神を我々なりに受け入れ理想としていましたので、みんながプライドを持つておりましてネエ。

「北村」 これも竹内先生の進歩的な教育方針の一つの表れでしょうが、当時の県下の中等学校で映画を見に行くことを許していたのは、工業だけでした。他の中学校も商業もどこも許可して無かつたが、うちだけは土曜日の午

後と日曜日の昼間は映画見物を許していた。

それだけ我々は信頼されていた訳で今の言葉で云えば紳士として待遇されていたともいえるワケで自然自覚の念も強かったではないでしょうか。

編者註……私も在校時代吉崎校長先生から次のようなお話を承った記憶があります……それは竹内先生が工業学校の創設を決意され敷地を旧校地（現女子大）に予定した時、南隣りには高坂高女があったため、女学校のある近くへ男子の学校を建てることはよくないと理由で県の一部に反対があつたそうです。ところが、竹内先生は「馬鹿なことをいうな、欧米へ行つて見よ、全部男女共学だ、日本も遠からず共学になる」、と云われて押切られたということです。

「大西」 うちも開校の当時は、映画は禁じていました。たしか機械科の科長だった島田先生が洋行して来てこられてから変つた様に記憶しております。

「橋本」 竹内先生の力で洋行なすつた方は沢山あります。今お話の島田先生もその一例ですが、他にも沢山あります。然も全つたくの無条件で、帰国したら自分の会社へ入れる……などというヒモ付ではなかった。当時としては他に例をみないことで全くお偉らかつたですネ。

「寺尾」 今学校はスポーツはどうですか……矢張り相撲は強いでしょう。

「戸梶」 相撲も以前程ではございません、今年の県体では相撲は県下で第二位でしたがこれも予想外の好成績でした。県下的にみて今一番強いのは「バレーボール」でございます、これは今年国体に県代表として参加しました。

「橋本」 ここで皆様方に詳しく事情をご説明して、御意見を承りたいことがあります。それは吉崎先生の御分骨の件ですが……

先生は昭和十八年三月二五日にお亡くなりになりました。当時の同窓会の理事の方々が御遺族の方にお願ひしまして、先生の御分骨をいたゞき、同窓会でもお祭りをすることになりました、前の図書館の中へ安置してあります。ところが御承知の通りの戦災で図書館が焼けて仕舞ひまして、誠に申訳ないことに御分骨も共に焼失して仕舞つたのであります。

私は戦災の後の焼跡の土を持ち帰りまして御分骨として、自宅にお祭りをし、毎朝お詣りをしております。私もこの年になってはじめて信仰の有難さ……信仰などと云へる程のものではないかも知れませんが……というものが判るようになりまして、こおして手を合せておりますと吉崎先生の温顔がまぶたアクアクと浮んで参ります。たゞ私の憂えますことはこれから行く先々、或は私の亡き後、御無礼になつては相済まない次第ですので、今後の処置について心を痛めております。

この際同窓会として何か、良い案はないものだろうかと思ひ皆様方の御意見を承りたいと思ふ次第ですが……

「川久保」 ただ今の橋本先輩のお話につきまして……実は先頃橋本さんより唯今のお話しの通りの御手紙をいたゞきまして、関係者がよりより話し合つたことでございますが、私共学校内の事情はよく判らないのでございますが、今の教育界全般の姿を横目でみた感じでは、「学校の中でお祭りをする」ということは現状では非常にやり難いのではないかと感じるように感じます。

橋本先輩が長い間に一人でなし遂げられたことを、我々がお引受けしない……というようなことは勿論いえないワケですが簡単にお引受けして我々の時代はよいとして、行く先々粗末となるようなことがあつては誠に申訳ない、このような次第でございます、引続いて橋本さんにお祭していただくか或は改めて吉崎家へ「みたま」を鎮めていたゞいて御分骨もお返し申し上げる……これは誠に申し上げ難いことですが私共の話合の結果は、そのようにお願ひするものが最も妥当ではないかということになっております。御分骨の方はそのようにしまして、吉崎先生の胸像を有志の手でおつくり申して、図書館内に安置して、在校生の精神面の生きた教育史料としては……とまあこんな話し合をしたことでございます。

「寺尾」 時代の移り変りに伴う人々の思想の変遷の極めて激しい今日では、吉崎先生の「みたま」を学校内でお祭りするということは困難ではないでしょうかネエ。

殊に校長というものゝ立場が非常に「デリケート」になつて、時には苦しい立

場に陥ることさえないではないそれについて私は実にながら経験をそれも最近なめた。||中略||ここで須崎工業高校における寺尾氏御自身の胸像問題につき御話がありました。詳細は省略します。||まあこおいつたような次第で私は今小松校長に申訳ないと思っております。何故あの時自分の考えを押し通して、辞退し通さなかったらどう……と思つて残念でなりません。尤も私の場合と吉崎先生の場合では比較にもなりません、吉崎先生はすでに神様となられた方で、先生を知る人が皆すべて偉大な教育者、人格者として尊敬しておる方だし、私は、現にこおして、社会党とも喧嘩したり、憎れ口も叩いたりしている人間ですから、比べものにはなりません、それでも或る時代には粗略になって、かえて申訳ないような状態になる恐れがあると思ひます。そこで私の考へでは吉崎先生の御分骨それはすでに焼けてなくなり焼跡の土だそうですが―その方は、橋本さん……橋本さんでなくてはできないことだから……橋本さんに引続いてお願することにして、この二階の図書館の中に、吉崎先生の胸像をつくつて安置する先程川久保さんは、有志の力でつくりたいと云われましたが私も同感です。そうして、すでに神様となられた、先生の教育者としての偉大な御人格を偲んで、後々の生徒のためにまた、学校の史料として永久に安置する、そのようにした方がよいと思ひます。

「小川」 その胸像をつくつて校内へ安置することについて、反対意見の方はないでしょうか……学校内で……。

「戸梶」 その心配は全くないと思ひます。私考えますのにこの学校の卒業生を時代によって、大きく三つに分類できると思ひます。その第一は今日お集りの皆様方を頂点にしまして私達の年代まで……私達まで私立高知工業の息がかゝつておりますが……と私共以後終戦当時までの卒業生、それに今一つ終戦後今日までの卒業生、と、この三つに大別できると思ひます。それぞれの時代により考へ方や物事に対する判断の仕方も異なり、私共が善なりと判断したことでも必ずしも同調しない場合があります。それ〴〵異なつた意見をもっております。その間を調整しながら全体の和を保つてゆかなくてはならないのが現状でございます。

「田村」 吉崎先生をお慕いする。卒業生が力を合せて、先生の胸像をつく

つて、図書館へ安置することは一向に差支ないでしょう。

「寺尾」 結局のところ、「みたま」の御祭りは橋本さんにお願する外はないようですね。

「橋本」 エ、結構です、そのように皆様の御話しがきまれば、私しにできるだけのことはさしていただきます。

―暫く雑談つづく―

「北村」 ……突然大声で……常石さんが実に珍らしいものをもつておられるので、ご披露します。これは、その大正六年の在校生全部の成績表です。ここにお見えの皆さんはみんな良い成績でワシだけが悪い。一年から五年まで全部の生徒の成績が点数でのつております。

―一同珍らしそうに手から手へ受け渡し見入る―

「寺尾」 大正六年だから私達の卒業したあとだね……こりやどうした……堀川君、君は点数が無いぢやないか、試験を受けちよらんぢやないか。

「堀川」 イヤこれは面白い話があるんですよ。試験の前の日だったと思ひますが、今日は午後は授業がないということで弁当を持つて行かなかつた、行つてみると午後も授業するという。それがどおなりや俺等弁当を持つちよらん、ワイ〴〵云つておるうちに早い奴が二三人裏門を出て餅を買いに行きよる、よし俺等も行くとぞというワケで村山等二三人で餅を買いに行つてみると先きに来た奴は座つて喰いよる、ワシ等は餅をかうて、紙袋へ入れて貰つてノコ〴〵戻つてきた、戻つて来て門を入つたところで捕つて、即決で停学三日喰らいましたよ、それで試験うけなしますワ。

―笑声しきり―

「高橋」 餅を買いにいて停学とは非道いノウそりや、誰に押えられた？

「堀川」 宮地先生、宮地先生（今でいう生徒部長のような地位の方）に裏門のところまでピツシヤリ押えられて、監督室へ連れて行かれて、即決停学三日……それで村山等も点がついてないでしょう……。

「寺尾」 私にしても橋本さんにしても停学は二、三回喰らっていますよ、特くに私は「流言を放つ不届な奴」というワケで放校処分（今で云へば無期停学のようなもの）まで受けています、訳を申しますとね、学校の創立に非

常な功勞のあつた、織田信福先生この方は県会で非常に重きをなしていた政治家で、先程お話をした明太郎先生とも肝胆相照らし合つた仲で、明太郎先生が郷里へ御帰えりになる時はよく来られておりました。私は当時白石と申しまして織田さんの家で書生をしながら学校へ通つていました。そんな関係で織田さんは私立高知工業の理事であり、明太郎先生の御不在中は実質上の校主とも云えるような立場で、毎晩のように、校長先生か、教頭先生が来られて、いろんなお話しをする、その話を隣の部屋で聞いておいては翌日学校へ行って「今度はコオなるぞ、ア、なるぞ……」といった具合に、ラツパを吹いて廻つた。それが先生方の逆鱗にふれたワケですネエ。流言を放つ不届者というワケで放校処分になりました。

暫く家で謹慎しておりましたが、織田さんの御骨折で高知教会で洗練を受けましてネ「洗練まで受けて謹慎しておる生徒を何故何時までも登校させないのか、アンナ悪い奴は長く学校へおいてはイカン早く卒業させて仕舞え」……とまあこんな具合に織田先生が学校へ談じこんで下さつて、やつと復校を許された。という訳ですよ、だから本来ならば橋本さん達とは一緒に卒業できないところを織田先生のお蔭でやつと第一回卒業生の中に入れて貰うことができた次第です。

「橋本」 吉崎先生は「ワリコトシ」を余り憎まなかつたですネ、勿論今とは時代も違いますし、いたづらの種類も自然異なりますが「イタヅラ」者は体力が余つて持て余しておるからそれをなんとかして良い方へ向けてやらなくてはいられない……と御心配されておつたようです。実に立派な先生でした。「寺尾」 全く偉大な教育者で、ほんとうに神様のような方でした。この吉崎先生の御人格を多分に受けついで方が森岡先生でしたネ惜しい方を失なつて、ほんとうに残念でなりません。

「戸梶」 皆様方御存知の方もおありでしょうが森岡先生は正四位勲四等を追贈されることになりましたして近く県で伝達式が行なわれることとなつております。

「寺尾」 歴代の校長先生では……なんでしょう……その位権勲等では一番上でしょう。

「戸梶」 そうです、一番だと存じております。

「橋本」 吉崎先生は私達の当時は、位七位だったネ、その後どう御上りになつたか知りませんが、卒業証書へ書いてあつたネ

「北村」 そう／＼「從七位吉崎七次郎」と書いてあつた。

|| 壤旧の笑い声、暫し ||

「橋本」 然しなんだネ、工業学校から大臣が出るとは思わなかつたネ。

「大西」 本当ですよ、私らよその商業出の人達と会つて話すことがありますが……「野球ではいつもおまんに負けるけれど、おまんに負ける大臣はおらんきーノウ」というてやりますよ。

|| 一同大いに笑う、寺尾氏静にはゝえむ ||

「川久保」 まだ／＼お話は尽きないと思ひますが、大分夜も更けて参りましたので、こゝあたりで、北村副会長さんとしめくゝりのお言葉をいたゞきたいと存じます。

「北村」 それでは潜越でございますが……

本夕は遠く鹿児島から橋本先輩が御出席下され、その上寺尾先輩には、寸暇もない貴重な時間をこの会のために長時間おさきいただきまして誠に感激にたえません。その他多数の同窓の方々が御忙しい時間をこの会のためにおさき下さいましたことに対して心より御礼申し上げます。

私共は何時までも、母校を忘れず、竹内先生や吉崎先生をはじめとし、御指導いただきまして、先生方の、御精神や、お訓じを何時／＼までも身の掟とし心の糧ともしまして、お互に助け合ひ、励まし合つてお互の向上のためにまた母校のこの上ながらの発展のために微力を尽して参りたいと思ひます。ほんとうに今夜は有難う存じました。

なほ、今夕の座談会の結果は、事務局の方には大変御苦勞でございますが、出来るだけ忠実に、正しく、粉飾することなく、編集していただきます。「五十年史」と申しますが「開校五十年記念誌」と申しますか。その誌上を飾るように御願ひ申し上げます。

ほんとうに今夜は有難うございました。

|| 一同拍手 ||

座談会(二)

||開校にいたる裏話し||

一、日時 昭和三七年十一月二八日
二、場所 校長室
三、出席者 織田正敏氏
橋本亀一郎氏
戸梶校長

(録音と編集 沢本 豊)

「橋本」 織田さん、今日はお忙しいところわざわざ御足労いただきまして本当に有難うございました。

実は今年がこの学校の創立五十周年にあたりますので、その五十年間の歩みを物語る。記念誌を発行する計画がございます。そのため一昨日も古い卒業生が集りまして、想い出話をしたことでございますが、何分私どもには開校に至るまでの経緯というものがよく判りません。直接関係された方々は殆ど全部亡くなられておたづねすることもできません。

貴男の御尊父が本校の開校には大層御尽し下さいましたので、お側におられて貴男が見聞されたところを、承ることができましたら非常に幸いだが、と存じまして御無理を御願ひ申したような次第でございます。

「織田」 私も直接関係していたワケではございませんが、全く追想的なお話しかできませんので正しく真相をつかんだことは申し上げられないと思いますが……。

当時私の父は県会議員をやっておりましたが、夕食時などに、「工業学校を作らにゃあいかん」とよく話していました。高知県には市商があっただけで技術の学校はなかったですからネ。県庁でもその必要性は認めていました。県にはそんな金がないという実情だ、たようです。私の家は宿毛時代から林さん……林有三さんですネ、林さん御一家や竹内さんの御家とは親しく願

ておりまして、私の母の姉も竹内家で御世話になっておる……とまあこおいう関係で、父も竹内先生には大変可愛がっていただいていたようです。

当時竹内先生は唐津に工場(唐津鉄工所)をもっていたし、宇都宮にも鉱山を持っておられて、私の母の姉は宇都宮に居りました。

竹内先生は大変進んだお考を持っておられて、何か郷里のために尽したいというお気持ちをいだいておられたようですネ。そこへ乗じて是非工業学校をつくって下れと、父が強く進言したことは事実のようです。

それではやろうということになりましたが、竹内先生御自身は忙しくて、直接自分でやることはできない。金は出すから、お前がやれ、お前に一切まかすから、万全を期してやってもらいたいと親父が托された形のようにです。

実行にうつってからは、町田さんや、その他の有力者の御支援とか、御忠言もいただいたことですが、発端は今お話したようなことだったと記憶しております。

父はそんな関係で開校してから後も学校のことは強くタッチしておりました、アレ程やかましく云っては校長先生がやり難うはなかるるか?と思われる程でしたよ、それで毎晩のように吉崎校長か教頭の森沢先生が相談にきていたことを記憶しております。

第一回の生徒募集のときのことですよ……寺尾もたしか橋本さんと同じ第一回でしたネ。寺尾の兄に白石末秀という人がありました。……寺尾も、もとは白石姓でしたからね……

この人は宇都宮におりまして、竹内家の世話になっておりましたが、高知へ工業学校が出来たというので、入学すべく試験を受けにきたワケです。兄弟二人が一緒に試験を受けたことになりました。試験の成績は非常によくて抜群だったようですが、残念なことに「年」が一つ多いという理由で合格にならない、そのときは末秀氏が泣いて残念がりましたがネ吉崎校長なども、同情して父に、竹内先生のお家に居るものだし、それ位のことは大目に見ては……と可成り強くとりなしましたが親父が頑としてきかない、出発早々からそんな規則を曲げるようなことをしては先々が思いやられる。そんなことではお前達学校をようおさめて行かんぞとい……ついに許可しませんでした

よ。末秀氏は結局宇津宮の商業学校へ入りまして卒業後三井へ入り、三十年か三十五年勤めて今はお退いておりますがネ。こんな具合で父は学校に対しては相当強い発言権をもっていたようです。

「戸梶」 つまり織田先生と竹内先生の郷土的或いは政治的な結びつきの関係から、織田先生が平素おもちになっていた、工業学校設立の御希望と竹内先生の何か郷土に貢献したいというお気持が、自然に具体化され実を結んだという形でございますネ。

「織田」 おおだと思えます。話が具体化してからは、町田さんを初め沢山の方々の御力添をいただいておりますが、最初の出発は親父だったことは間違いないと思えます。

「橋本」 私どもの知らない大変有意義なお話を承わりまして本当に有難う存じました。

これでこの度の記念誌も一段と光彩を加え、更に意義深いものになることと思えます。どうも有難うございました。

……編者註……織田氏よりは、このほかに、綱先生、明太郎先生、或いは寺尾先生などについての逸話や、想い出話を承りましたが、割愛します。

高知県立高知工業高等学校

在職中の思い出

森 本 長 太 郎

動機は自然に沸きでるものである。或日当時学校教職にある友人が神戸の私の自宅を訪れ民間転務に転出する斡旋を依頼されたが幸に私は某会社の建築課長の職にあったので本人の希望を容れてあげるのは容易であった然し教職の重要性を説き翻意することを求めた。

其後友人の行動を知ることができなかった。此の時私は初めて教職につき意欲が自然にこみあげてきたのである。

昭和四年初代校長吉崎七次郎先生の知遇を得て高知工業学校の教職につき爾

来民間育ちであった私が約二十年間子弟の指導にたづさわることを得たのを思うと感無量である。私の教育方針は創立者竹内先生の基本方針に基き実社会に役立つことを念願したのは勿論であったが就任直後に感じたことは北与力町の校地は将来生徒数の増加に対処するためには如何にも手狭であり拡張の余地に乏しいことであった。このことは吉崎先生も御同感のように見受けられたが周囲の環境と高知県の経済面から直ちに許されない事情にあった。二代校長松本政良先生の時代に当時県会議員をされていた山本義孝先生その他の方々が陰になり日向になって高知県当局に御尽力をいただいた結果実現の気運に向った。学校移転改築の議案が橋本亀郎、中島竜吉、其他の学校卒業生先輩の間でまとめられていたので創立者竹内先生の知友野村茂久馬先生を未明に訪問して議案に対する御意見を求めたが即時に学校発祥の地を確保し計画の再検討をせよとの御返事であった。早速現地に高層校舎の計画を立案して見たが校舎と運動場の関連から検討した結果将来発展の見通しがつかないので再度野村先生を訪問事情を具申し漸く移転改築の同意と援助の御言葉を得た。当時移転先の候補地としては江の口川附近と現在の棧橋通二丁目と二箇所が話題にのぼっており、卒業生先輩の活動は将来発展性のある場所をとる目標で現在の校地に移転改築案に邁進された。当時一面の野原で一部に畜産小屋のあった土地の買収には潮江地区在住の池知速水先生その他の有志の御尽力で獲得出来たのが現在の校地である。

当時非常な感銘を受けたのは卒業生先輩の母校愛と根強い誠意であった。敷地の造成高知県との折衝等が順調に進捗したのは皆卒業生先輩の母校愛と誠意の賜である。改築工事も順次完成昭和十七年北与力町の校舎から現在地に移転する運びとなるまでには新しき校舎への生徒のあこがれと希望とが自然努力奉仕となったことを今日でも記憶している。

折角各位の御尽力により移転改築完成された新校舎も戦時中の空襲による生徒の災害保護になやまされつつ科学兵器の研究のため軍人の駐在機械工場での軍関係の精密機械の製作に日夜精励した状況が探知されていたのか一千個にあまる焼夷弾の雨下のため一夜で校舎の全焼の災害に見舞われ学ぶべき校舎を失った時が本校教育の最悪の時であった。戦災により分散した生徒を集

め相互の無事であったことを喜びつつも分散教育をよぎなくされた時の教職員生徒の苦勞は並大抵ではなかった。人間の時運に処する逞ましき精神力のたのはその時の実感である。終戦後軍部使用のブラック建物の配分を受け風雪にさらされ放題の急造校舎での集合教育はよく我慢できたものである。各位の援助で建設された校舎実習工場も教育に必要な教科書もなく完焼された実習工場の設備も漸進補修の止むなき状況であったが幸にも当時国会議員長野長広先生の御尽力で軍部保有の機械器具の無償払下げを受け不完全ながら一時の急場教育に満足しなければならぬ場面に追い込まれた。かような場合でも教育の根本原理は教育者と子弟と卒業生の心のつながりである。在職中職員生徒は竹内両先生の胸像の前では拝礼をする習慣であった。

過日汽車通学中の某高校生徒兩名と雑談中直接の恩師以外の先生の姓名を記憶していないのを知った時師弟の心のつながりに乏しいのに意外の感にうたれた。

戦後不十分な環境のもとに教育を続けられた高知工業高校も県当局と父兄会の厚意により次第に校舎の増築設備の充実の一途をたどりつつあるが、昭和二十四年三月迄約二十年間教職を勤め得られたことを感謝する次第である。省みると私の学校在任は建設に始まり建設に終つたことを今日でも痛感しているのである。

(元校長)

わかば会のこと

小 松 六 居

工業学校わかば会のことを書いておきたい。

「わかば会」という名がいつ生れたのか知らない。もう誰も知っていないかも知れない。知っている人はこの世にいなくなつたかも知れない。記録にも残っていないであろう。もとより記録に留めるといふほどの会でもなく、何となく「わかば会」と呼んだのであつたかも知れない。

俳句の会がその名の起りである。だからその頃、その頃と云つても確かな年代がわかつているわけではないが、昭和の初め頃といつてもよい。昭和も三十八年を数えるようになってみると、昭和の初めと云つても、十年頃までの中があつてもよいであろう。その頃に、俳句の好きな先生が居た、と思う。その先生達が、何と云ふことなしに俳句の会を始めた。それに手取早く「わかば会」と名付けたものであろう。

その頃の工業学校は、現在の高知女子大学のところにあつて、西側正門の附近と、南側土手下に大きな楠の大木が何本も枝を張っていた。春先きになると、その若葉が見事であつた。ある年の新学期の初めに、俳句好きの先生が集つて句会に興された。そして、窓外の楠若葉の美しさに、「わかば会」という名が誕生した。ということにしても決しておかしくはないと思う。

その頃の、俳句好きの先生とは誰であつたであろうか。岡林九敏、木鶏先生が居たことに間違いない。森岡貞篤、右京先生も居た、植野豊治、桃林先生もいた。筒井鶴寿、三嶺子先生もいた。平岡盛数先生も、新傾向俳句の雄であつた筈である。森光喜先生も器用な俳人であつた。それに、多少野次馬的な存在——と云つては叱られるかも知れないが——仙頭隆・宮地格馬・中内智章などの先生達もちよいちよい顔を出しては句座を大いに賑やわしていたことであらう。

釣り戻る鮎の少なし妻走る

ある時の句会に、こういうメイ句が問題になつた。上の方はわかるが、妻走る、とは何ぜよ。それがわからいどうすらあ。鮎喰いの客を呼んじあうきに、女房を買い足しに走らさにあいかなあよ。という具合である。まことになごやかな「わかば会」であつた。然し、このメイ句が「わかば会」を代表しているのでは決してなかつた。木鶏先生は、青木月斗主宰「同人」の有力な誌友であつた。また森岡右京・植野桃林・筒井三嶺子・平岡盛数などといえ、中央俳誌にも収録される俳人であつた。高知県の俳人としては当時名を知られた方である。これらの先生達を中心になつて、工業わかば会が存在していたのであつた。工業学校と云えば、何だか無風流な、野暮ったい技

術者の寄合いのように考えられ勝ちなところへ、どうしてどうして、こんなすばらしい風雅の花が開いていることを大いに誇りたいのである。星霜を経ると共に、「わかば会」の顔ぶれも変っていくことは当然である。転出する先生もあれば転入する先生もある。俳句の好きな先生が来て加わり、また、出ていく方もあった。そして「わかば会」は、細々と、または太々と、決して絶えることはなかった。

岡林木鶏先生は他界した。森岡右京先生も亡くなられた。筒井三嶺子先生も若くて逝った。仙頭隆・宮地格馬の先生方も既にこの世にいない。「わかば会」草創の頃を知る先生は次第に失なわれていく。高知県内では、恐らく森光喜先生を残すのみではあるまいか。先生は、高知県展工芸部審査員としていつまでも若々しい。この話術のすぐれた先生に、「わかば会」草創の頃の内緒話を聞いてみたいものである。

その頃の「わかば会」へは生徒は加入していなかったようである。当時の卒業生の中には、現在すぐれた俳人がいくらもいる。だからその頃の生徒達の中にも、こつこつと文芸の道を歩んでいた者が居た筈である。

ゆたかな教養を身につける、ということは、高知工業学校創立の精神であった。だから、実業科目をきびしく鍛練するのはもとよりであるが、それに平行的に、普通教養科目の指導には、他の工業学校に比べて、ずっとずっと意を用いられていた。それが高知工業学校の特徴であり、創立者竹内綱先生の精神でもあった。この特徴はいつも生きた実を結んでいた。上級学校を志望する卒業生は、殆どその目的を達していた。上級学校の進学者が多かった、というのではない。創立者の精神はまた、中堅技術者の養成にあった。謙虚な職場技術者を仕上げるのが目標であった。だから、卒業生は直ちに職場に飛び込むべきであった。また多くの卒業生はそのようにして技術を認められて高知工業学校優秀の名を高くしたのであった。然し、上級学校を志望する者は、例外なしに、当時の官立高校にパスしたのである。それだけの学力を養なわれていたのであった。

支那事変が激しくなると、工業学校卒業生は殆ど強制的に、内地はもとより満洲までも、軍需工場に就職せねばならなかった。その昭和十五年の卒業生

百五十名の中で、上級学校志望者が、それでも二十八名あった。そのすべてが一様に官立高校に入学した。

先生達は「わかば会」などと風雅の道にあそびながらも、そのように心ゆたかにあったればこそ、生徒達にはきびしく教養を身につけさせたのであった。それがこのようなムードを高知工業学校全体にかもし出させたのであると思う。

日本全土に軍艦マーチが鳴りわたって、あつと云う間に国土全体が戦争の形に固められてしまった。昭和十六年の歳晩には、工業技術者の不足を補なうために、五年生は学業途中で繰上げ卒業する、という事態になってしまった。工業学校に非常態制がひしひしと感ぜられた。そんな世の中になった。軍艦マーチは二六時中鳴っていた。その騒々しい中で、昭和十七年の春、現在のところへ引越した。

北与力町の旧校舎から帯田の新校舎まで、約一千の生徒が人間コンベアとなつて、一つ一つの物を運んだ。二、三日続いたこの作業は、戦争にわき立つ市民の眼には、悠長な絵巻物とも見えたであろう。新しい校庭は広々としていたが、楠の大木などはもとよりなかった。眼を楽しませてくれる若葉の美しさもなかった。然し「わかば会」は、勿論新しい学校に引越していた。けれども、生徒勤労働員などに、学校全体が西に東に動いて、一番落着いていなければならぬ時期に、「わかば会」も落着いた活動が出来なくなっていた。第一先生も生徒も、学校に籍を置いたままで、殆ど学校には居ることが出来なかったのである。もはや学校ではなかった。学校もまた戦場の一端であったのである。

学校が焼かれて、跡形もなく灰になって、戦争は終わった。学校がまた学校に戻ったのである。建物一つもなかったが、学校があった。先生も、生徒も一つの学校に戻っていたのである。真先に、高知工業学校の精神を取戻したかった。ゆたかな教養を身につけた工業技術者の姿をビジョンとして浮びあがらせたかった。「わかば会」はきつと地下水となって流れていた筈である。

その地下水が、とんでもないところへ噴出した。とんでもないところという

のは、未だ予想もしなかった時期に、意外なところから開花した、ということである。

それは、昭和二十三、四、五年の頃である。昭和二十三年に高等学校というものが再編成されて、高知工業高校という名が生れたばかりの頃からである。戦争の後片付けがようやく進んで、どうやら大きな戦いの後に生れた学校が、新しい学校としての機能を思い出した頃のことである。「わかば会」という名の俳句の会が、或日の放課後、バラック建ての教室で持たれた。生徒が十名ばかりと、それに招かれた先生が二三人居た。「わかば会」は生徒のものになって生れたのであった。意外と云えば意外であるが、草創の頃の「わかば会」が、無風流で野暮ったい技術者の寄合いと考えられ勝ちの工業学校に咲いた風雅の花として、先ず先生達の間で咲いたままで、生徒の間にとけこんでいく余裕のなかったのが、今度は生徒の中から生れ変わって現われたのであって、これこそ本流であり、文化教養を身につけたすぐれた技術者としての姿が実際に実を結んだものであった。意外ではなくて、今迄がびつこの姿であり、地下水であったものが、ほんとの満足な姿となり、本流となって流れ出たものであった。意外と云えば、寧ろ、こんなにも早く、工業高校の生徒の間に、どうしてこのような文化の泉が湧き出たものか、という驚きである。

「わかば会」の生徒は、初めはたどたどしいものであった。然し、その速い成長には神がかりのようなものが感ぜられた。溜りに溜った水が、どっと堰を切って流れ出る勢いであった。彼等は、一年も経ないうちに、高知県の大人の俳人に伍して一步もゆずらない力倆を示した。そしてもう工業わかば会は、高知俳壇に進出して、工業高校の文化を誇っていたのである。

ところが面白いことに、「わかば会」という俳句のグループが生徒の間に生れると同時に、まるで春の花が咲き競うように、高知工業高校の文化にぱつと灯がついた。それは「わかば会」に刺激されたというのではなくて、同時に噴出した才能であった。映画に演劇に美術に文芸に、まるで狂ったように開花したのである。然もその才能は、高知県の大人のグループに堂々と対抗出来るものであった。映画部は「幻影」という雑誌を出した。その内容は、当

時の映画誌の評論を圧倒するものがあつた。文芸部は「マーキュリーの杖」を発行した。それには美術部にも協力して、当時の大人の文芸誌に一步もゆずらなかつた。どうしてこのような驚くべき才能が一度に開花したのか。高知工業高校のルネッサンスともいふべき時期が、どうしてここにあつたのか。それは一つの不思議でもある。然してその不思議は、無から有が生れた不思議ではなくて、「わかば会」を草創した先生達の、何ということなしに身につけて、何ということなしに始めた風雅の道が、この学校の創立精神に沿って流れつづけていたものが、才能ゆたかな生徒達を得て、ぱつと明るみに出たものであろう。

その後、「マーキュリーの杖」は「文芸鉅脈」と改題して、次々の生徒に引つがれている。「わかば会」もまた細々と、また太々と、いつまでも続くであらう。そしてまたいつかルネッサンスが来ないとも限らない。

(元校長、県教育委員)

母校の移転改築の当時を顧みて

(大・6・3電) 橋本 亀一郎

国運の隆昌は工業教育の必要性を世論までに発展せしめた、加ふるに世界の風雲が急を告ぐるに及んで更に拍車がかかったので、母校としては定員の増加、科の増設等拡張は必至の状態であつた。然るに県当局としては当時未だ具体案を樹てて居なかつたので、この際母校としては一日も早く具体案を作製して与論を喚起して県当局に陣情してリーダーシップの立場となること賢明であると確信したので松本校長と相談の上母校主脳部と同工会理事の合同懇談会を催すことにした。開催すること数回遂に左の結論に到達したのである。

第一の課題は現在地(旧校地)で如何にして拡張するかであつた。お互に北門には愛着が深いので何とかしてこのままで居坐り度いと云う気持ちは皆一緒で有ったから色々頭をひねったが、北側の道路を廢道にして川迄の土地

を買収する以外に方法が無い。しかし人家は一杯に建て居るので、地面は高いし、莫大の立退料は要る、又若し買収が出来たとしても校舎を鉄筋三階建としなければ運動場が出来ないことを考えると益々不可能なことが明らかになったので残念ながら他に移転することは止むを得ないということになった。

次は第二の問題、移転先であった。候補地として八反町、比島、丑之助、下地、新田、北百石町が選ばれた。そして全員が実地視察して八反町、比島、丑之助、北百石町にわたって四班に分れて必要事項を詳細に調査した。

是に呼応して野村茂久馬氏を会長に高知工業学校後援会を結成して母校移転改築の運動を開始したのである。時は昭和十一年十一月であった。吾々の運動は酬いられた。昭和十三年に到り県当局も立案することになり、調査に取りかかったが、すでに吾々と度々折衝もし、検討もして居たので案外早く北百石町（現在地）に決まり、愈々十二月の通常県会に提案する運びとなった。しかるに時恰も国際情勢が非常に悪化したので国の方針として、新規事業は一先ず一切停止となり、母校移転改築も無期延期と報道せられる運命となったのである。

しかるに翌十四年三月に小林光政知事の大英断により臨時県会に母校移転改築は提案せられ可決確定したことは洵に同慶に堪えず、小林知事に深甚の敬意を表す。

前述の通り同工会としてはすでに十分な調査をし資料も調べて居たので、ただちに土地の買収に着手した。そして地元の最有力者池知速水氏、服部久太郎氏、成岡楠弥氏、熊沢忠次郎氏、山脇国馬太氏を土地買収委員として県から依頼して貰った。ところがここに思わざる難題が惹起した。土地の値上りである。十四年になって急騰した。県の予算では坪当り四円であったし、吾々も大体その見当であったのが、買収に着手した時はすでに棧橋道路沿いでは十五円、奥の方でも七、八円と云う呼び声になったからである。

委員各位の御心労は筆舌に尽くせぬものがあった。浅井家は買収用地の約半分を所有せられて居たので、浅井家に承諾して頂くことが先決問題であった。幸なことに池知、服部、成岡の三氏は浅井家に精通せられて居たので、

手を代え品を代えて折衝せられたがなかなか拂らない何しろ買収価格が時価の半分であるから無理もない。決裂寸前にまで追い込まれた。最後の会谈の日である、私は決死の覚悟で委員各位のお伴をした。そして改めて縷々経過と顛末を述べ血涙を流して哀訴嘆願したことであったが、至誠天に通じてかその翌日浅井家から承諾の報に接した時の喜びは終生忘るることが出来ないが、同時に浅井家の大家としての襟度に対し、衷心より感謝申し上げる。浅井家の御承諾によってお蔭様で峠を越した思いはしたが、その後がなかなか口数が多くて大変であった。一地主に折衝十八回と云う者もあって買収完了迄に丸六カ月を要したので、この稿を書きながら当時の委員各位の御活動と御心労を思い浮べて只頭の下るのみである。

その後県に於てはこの難事業を完遂せられた委員各位に多額の記念品贈呈の予算案迄作成して居たが、戦争が苛烈になったのでその時機を失し遂に空襲によって全焼してしまつたので立ち消えになったまま今日となって居る。

委員の中で現存者は服部先輩一人となった。せめて服部先輩の御存命中に機会を得て、委員各位に母校から感謝の意を表され度く切望する。

さて当時の県の慣例として学校の施設又は改築の場合には関係者から相当額の寄付金を要請して居たので、母校に対する寄付金の要求額は一万五千円であった。この当時の一万五千円は大金であったし、この上に吉崎記念図書館の建築にも四五千円はかかるので、当時の同窓会としては負担に堪えず県に対しては九千円の寄付の申込みをしたのであったが、県が仲々承知しない。粘りに粘らばって膠着状態となった。丁度その時救いの神として現われたのが故永野民也君であった。永野君は当時土木請負業を開始したばかりであったから、県の土木工事の履歴が欲しいからは非埋立工事をやらして呉れることであつた。永野君の申し入れは県のレールとトロッコを無償で借りること、埋立用土代を極めて安く入手すること、この二つの要件が叶うなれば九千円で請合つて呉れることに相談が纏まつた。処が県の埋立予算は一万五千円であつたから、ここで六千円浮いたので差引勘定一万五千円の寄付と同じ形になったので、円満に解決することが出来た。レール、トロッコの借入れと土代の交渉は順調に出来たがいざレールの敷設に取りかかると里道の路

面が狭くなって農業に支障を来すと云って猛烈な反対運動が起った。幸なことに服部久吉先輩池上美太郎君が市会で同僚の關係もあって市当局とうまく折衝が出来て埋立完了後直ちに里道拡張の口約が出来てやっとな解決出来た。埋立工事が進む中に側溝の問題、暗渠の問題が起った終りには三方の路面の拡張問題が起って折角永い間苦心して造った敷地を割愛しなければならぬ様な破目にさへ陥ったこともあったが皆様方の御支援によってやっとな昭和十六年六月二十一日付で埋立工完了届を提出することが出来た。思うに土地の買収に着手してから埋立工完了迄丸二カ年苦難の連続であったが、大方諸兄の特別の御援助によって曲りなりにも完成出来たことを厚く御礼申し上げる。

特に永野君の功績は偉大なものであって永野君が居なかつたなら寄附の問題も埋立の問題もどうなつて居ただろうと思うと、在りし日「心配しなや、何とかすらあよ」と小生を慰めて呉れた言葉に感激の迫るものがある。

この間同窓各位におかれては多分の寄附金に応募下され昭和十六年十二月二十八日に県へ寄附金を完納した。

そしてその間に吉崎記念図書館の建設も本校舎の建築も進み、昭和十七年三月二十日北門の旧校舎と惜別式をして新校舎に移転を開始したのであった。

昭和十一年移転改築の運動を始めてから今日迄足掛七年吾等同窓の努力の結果によって完成した校舎も昭和二十年七月四日一瞬にして灰燼に帰した。私には焼跡に立って茫然自失した。暫くして吉崎先生の御遺骨を焼失したことに気付いて早速に図書館の焼跡に跪びいて先生にお詫び申し上げたが、その瞬間に私の脳裡に浮んだのは母校の復旧であった。

当時私は県造船株式会社に勤めて居たが、幸なことに県造船の長浜工場の一部疎開が内定して居たので時の社長寺尾豊氏専務取締役武政敏雄氏の快諾を得て直ちに一棟移転して実習工場に充当し復旧工場の第一歩に着手したのであった。

顧るに足掛七年同窓諸兄は申す迄もなく大方各位の格別の御援助と御協力を仰いで母校の移転改築は完了したが戦争が苛烈になつたため母校として又同窓会として是等御恩を頂いた各位に対し感謝の意を表することが出来ないま

まに全焼してその機を失し誠に遺憾の極である。しかしお蔭様で母校も完全に復興し同窓会館も立派に出来上つたが其の悉くが皆様に御協力頂いた敷地の上に建つて居る。

即ち母校の移転当時に皆様方から頂いた御協力の賜が母校復興の基礎となつて居るので何卒御慶びの程をお願い申し上げますと同時に当時の責任者であつた私の不行届の点を平に御容赦の程をお願いする。

尚同窓諸兄の本事業に多大の功績を残された故人永野民也兄、中島龍吉君、松井正保君、山中勝亀君、武内宏君に御礼を申し述べ御冥福を祈る。

昭和三十七年十二月

松川内市

吉崎先生の御言葉

私は竹内先生の御意志を継承して、学校を経営したのみである。図書館の建設も竹内先生の御意志であつた。従つて吉崎と云う名は取り除いて貰い度い悪いことをする生徒は余力がある為だ。従つて善導しなければならぬが、処分問題で若い先生が理論的に捲し立てる時は校長は困る。

やじ馬閑談

旧職員 森

光 喜

昭和四年から廿二年までの長い在任中思えば明暗様々の思出は尽きず殊に戦争苛烈の頃は実に暗い思いのあけくれであつた。茲では暗い思出をしばらく忘れて専ら私のヤジ馬性がかもし出したむだ話を綴つて見ることにする。色々な文章の中へ登場する先生方には失礼かも知れないが切にご容赦を乞う次第である。私のように多分にヤジ馬根性を持つ者には珍らしいものの面白さや呆れかえる事の楽しさが心の慰安ともなり眠気さましの妙薬となるのである。入学考査の口答試問に「春分の日について」というのを出したことがあり昼夜の時間の關係について述べなかつた子に「昼と夜との關係はどうなつている？」と誘導質問をするのに対していとも明快に「ハイ昼は明るうございまして夜は暗うございます」又「ハイ昼はめしを食いますが夜はめしを

食いません」などと答える。思はず笑って今までの疲れがとれたような気になる。重ねて「特に春分の日の昼と夜との関係は」と問い直して正しい答えを得たという次第。

訥弁の雄弁

初代の名校長吉崎先生は訥弁であった。論談風発という型とは凡そ対蹠的で訥々としたお話のうちに自づからにじみ出る暖い人間味にふれて生徒達は慈父のように慕い敬っていた。開校以来初めての第一回運動会が高知公園北側で開かれた朝先づ壇に上られた吉崎先生、開口一番「菊かおる秋の空あくまで高く」とこれは又めづらしい美文調、勝手ちがいに戸惑いながら次のお言葉待つ職員生徒をにこやかにやゝしばらく見渡された校長先生、ひときわ大声に「晴れとーる」といつもの吉崎調に戻られた。あと私共は心安らいで親しみ深く身近いおやぢの開会の辞を承ることが出来た。

造林山

昭和十四年の春と記憶するが男子中等学校の造林という行事があった。現在の伊野町大内南谷がその植樹地である。本校に当てられた所は山裾で平坦地が多く美しい谷川や風景のよい大きな岩などがあって最も恵まれた場所であった。それだけに樹木はよく育ち土地の人々からも「工業学校の木が一番よう太ちよる」と度々聞かされて来たがあの材木は結局どうなることかと時々思つて見ることもある。植樹後苗の手入れや草刈りなどと山へ行く機会が多く私は好んで山に入り快適な山仕事の時を過した。生徒達は休憩時間中も茂みの間を活潑にかけ廻って楽しそうである。どこから見付けて来るか野鳥の卵らしいものを持ち寄って「まだらのガはうづらの卵」「桃色はうぐいすの卵」「そりや蛇の卵ぢやないか」などと評定様々の中へ又一人が白い大形の卵を持ち出したので「太いネヤ」「そりや何の卵なら」「きじか何ぞ大きな鳥の卵ぢやろう」とひとしきりその研究熱が高まったところへ今まで弁当を開いて風呂敷や包紙の下をガサゴソ何かを捜していた近くの生徒が入って来て「おらのがを早や取ちよる、さがし廻りよったに」という「おんしのがか、こりや何の卵ナラ」と気負い込んで尋ねる友達に向つてその生徒ケロリとして「鶏の卵よや、おらがうちから茹でて持って来たがぢや」に一同啞然。

X先生は都会人で山についてはあまりご存じがなかったが山行きの番に当たったのもう真夏「何ぞこわいものが居やせんか」と盛んに気にせられる。「まさか天狗が出るわけでもなしこわいものというたら熊ン蜂かハメぢやろうか」「ハメとは何ぢや」「ハメというたらハミともいうて学名では蝮という毒蛇のことよ」にX先生仰天して「そんなもんが居たらかなわんなー」とタジタジの態。「マア足拵えを嚴重にしていたら大丈夫、そんなものめったに居るもんじゃないキニ」と親切に教える同僚の傍から「うちの近所に道を教えるのに指さした手の上の枝にハメが居ってカツチり喰い付かれた人がある」とか「心臓に近い所を咬まれたら助からん」とか先生があんまり怖がるのを面白半分におどかさずヤジ馬も登場する職員室の一幕があつて数日後いよいよ山の場の開幕、濃縁の山々を背景に正面大きな岩、谷川の音、小鳥の声先着の職員生徒大勢が岩蔭の下草に腰を下してにぎやかに談笑中、上手雑木林を抜けて爪先上りの山道からX先生の登場となったがたまげたのはそのいでたち、皮靴にゲートルは普通でも真夏というにレインコートの襟を深々と立て帽子の上から襟巻の如き布であごまでスツポリ包んで露出部といったら両眼のあたりの一部だけ、「まあ早う脱いで一ぺん裸になりなさい、そのままではハメに当らいで暑さに当るわ」というわけで茹でたように汗だくのX先生やと薄着になってホツとひと息。気の毒なやらおかしやら。何も知らぬ生徒達は風邪でも引かれたかといわんばかりに先生の顔をジーツと見守つて目をパチクリ。

山の宿

山岳部と水泳部とのお世話をしていた頃私は水陸両棲天狗なる愛称をもらつて夏は存外忙しかつた。夏休中石鎚登山は必ず二つのコースが計画せられ面河溪からの往復コースには下級生徒が多く参加したものである。面河では関門旅館というのが常宿で長年のなじみからいつも行届いたサービスを受けたが戦時中廃業、土佐人の経営者も一昨年の夏物故せられた。初めて泊った時は生徒一人の宿賃が只の十銭、尤も米や副食物の材料はこちら持ちで大部屋で上ぶとんを掛けて寝るのであるがそれにしても今から思えば偽のような話、その後だんだん高くはなったが三十銭以上は払ったことがない。時には

途中で怪我をしたり病気になる生徒もあったがその都度手厚い養護を受けたことを今でも忘れない。この登山隊は毎年その宿へのお土産として茄子、胡瓜、トマトなどを少量つつ荷があまり重くならない程度にして持って行くことが前年からの申し送りによる慣例になっていた。田舎へ野菜類を何もわざわざ持って行かなくともと思われる人もあろうが面河溪ほどの幽境ともなれば田舎というものを通り越して畑など殆んどないものである。宿に落着いて座敷の真ん中にその土産品を積んで見ると中には相当大きな南瓜や多量の野菜類を背負って来た者もあって思いの外のかさ高となり宿の人々から此の上もなく喜ばれたものである。このように単に旅館と行きずりの旅客との仲ではなく本校と此の宿との間にはお互いに心の通うものがあり生徒達も自宅にいますように打解けて登山を楽しむことが出来、私共もこの如才なさに心が安まり落着いて生徒達を見守ることが出来たわけである。私個人としても自分の別荘へでも行く気で一人で或いは家族をつれて登ったことも数度、炎暑を逃れて面倒なデザインの計画を立てるために一週間以上も滞在したこともあり他からのコースも入れて石鎚山には十九回も登ったことになる。面河溪經由の往復コースには初登山希望の先生方が二、三人同行せられることがあり引率者の私どもは殊の外助かった。只一人で三十人の生徒をつれて登った時のことを思えば多くの先生方が参加して下さることはありがたい限りであった。先生方は大部屋でなく普通旅客として客室で泊ったが夕餉の膳に「あめご」の料理が乗ることが多かった。めづらしく鮎よりも更に高いその風味を賞翫したものであるが中には誠にお口のきれいな先生がほん少し箸をつけたままに残されたのを私が始末して骨の一部を皿に置いて膳を下げてもらったが後になって旅館の主人から「さすが工業学校の先生方は通人で「あめご」の食へ方もご存じか皆きれいに召上って下さった、料理番も喜んでいゝ」とさまで満足そうに礼をいわれ思わず微笑。

ポタ落ちやまぬ雫を見て雨と感ちがいするのである。谷間では流れに添うて小さな蛇が無数に出て所かまわず咬み付くことがありタオルや木の枝などを体みなく振り廻しながら歩かねばならなくなる。咬まれても毒はなく腫れもせず心配はないがただピリツと痛いので閉口する。それに敵は大勢で攻めかかって来るので始末が悪い。ひと夏下山道でその蛇どもがどうやら出始めた気配に大急ぎで宿へ帰ったがやがて元気な数人の生徒が泳ぐという、「行っても泳ぐことにはならん、すんぐに戻って来ることにする」と私がいうと「そんなにヒヤい水でもない」と大威張りで谷へかけ下りて行ったが忽ちワツと算を乱して逃げ帰り家の中へ足も拭かず飛び上って来て「蛇に喰いすえられた」という。宿に残っていた学友が「先生がいうた通りちゃった、わけは聞かざったけんどうすんぐに戻って来るといいよ」に水泳組不平そうな顔を並べて「シヨウ意地がわるいネヤ、いうてくれちよきゃええに」と恨むこと、恨むこと。

一週間の入営

戦時中学校取員は一週間管内生治をして軍事訓練を受けねばならぬというきつい命令が出て本校からは第一回目に私も交って七人が入隊した。燈火管制下のくらがりの中で支給された軍服を手さぐりして着たものであるが翌朝になつて見ると大一番の軍服を最も小柄で瘦せた先生が着ていて襟の間からどこからあばらの上まで丸見えて肩がずっこけて指先まで袖の中にスツポリかくれてしまつて何とも珍妙な恰好に皆が呆れてクスクス笑いながらもお互いでゆづり合つて着直し兎に角服装を整えて俄か兵士が出来上つた。幸に軍隊生活に経験のあるS先生がいられたので管内での大切な注意事項を教えてくださいました。例えば銃剣を預つた時その番号を手帳につけて置いて決して間違ひなく管理せねばならぬことなどがそれである。立撃ちの構えで「据銃」「下ろせ」「据銃」「下ろせ」とやっているうちに手が疲れて勝手に銃を下ろしている。「据銃だ、据銃だ！」とハッパをかけられ又銃をあげているうちにいよいよ腕がなえてしまいあちこちでゲラゲラ笑い声も聞えるが随分手心を加えたお扱いでこれが本当の兵隊さんであつたらさぞ叱られることであろうと思つた。

折柄陽春の季節、宮庭には時々花吹雪が舞い長時間の教練にも別に大した疲労もおぼえず殊に実包射撃はこでなければ出来ないことであり興味が深く愉快であった。今思っても人生のよい経験を得たものと信じている。まだ戦争も敗色の見えない頃の事、宮内には相当ゆとりのある空気が漂っていた。あの一週間お世話になった人々はその後どうなったことや、戦後已に十七年、今もなお健在であることを切に念願している。満期?の前日には部隊長同席で夕食の饗応を受け大いに語り大いに歌って楽しかった。私が第一回の入隊に参加したのは気候の良いうちに行った方が苦労が少く夏に入ったからでは炎天干して不動の姿勢をとるだけでも苦しいだろうとの狡い考えもあってその時あまり希望者が無いのを幸に率先して参加したわけである。果たし真夏に参加した組はまっ黒に日焼けして帰校、入隊前の長髪がイガクリ坊主になっていたのはオドロキであった。その時私は中学時代の歴史の教科書で見た北条早雲の挿絵を思い出していた。

五十年の思い出

大・6・6治 吉 村 重 隆

私立高知工業学校が北与力町に誕生してから本年をもって五十年を数へるに至ったのであります。過ぐる昭和三十三年の同窓会総会に於て母校創立五十周年の記念事業として戦災で焼失した吉崎記念図書館再建の計画が決議せられ爾来建設資金の造成につとめました。が会員其他関係各方面の絶大なる御協力により昨秋漸く着工の運びとなり本年二月完工を見、去る五月四日の開校記念日を期して五十周年祝賀式に引続き落成式を挙行了次第であります。この大業遂行について終始御協力下さいました各位に対しこの誌上を拜借して改めて厚く御礼を申し上げます。

五十年と云へば戦前は人生の平均寿命とせられておつたことを考へますとかなり長い年月であります。この長い歩みの中に歴代校長先生はじめ学校関係者は幾多の困難を克服されて工業第一線の技術者の養成にあたられ今や一人に垂んとする同窓生を送り出しておりますことは御同慶に存じますと共

に諸先生方に満腔の敬意を払う次第であります。

今回の慶事にあたり同窓生中の最高年令層にある私共も参加することが出来更に創立以来の思い出を筆にすることが出来ますことを無上の喜びとするところであります。

私の専攻致しました採鉱冶金科は大正五年に旧制中学校卒業者を対象として設置された別科制度でありまして北与力町の校地(現女子大)の北西隅にあった化学実験室の隣室が私共の教室にあてられ、その隣は電気実習室で工場の中の一室が教室という今から考へればずいぶんお粗末な教室でありました。当時第一回の別科生は十一名で採鉱、選鉱、冶金は中野、立川、吉川の諸先生、電気は長岡、機械は島田、化学は中村の諸先生、何れも今は故人となられて思出多い先生方に御会いする術もありません。私共別科生は僅か一ケ年間の母校生活ではありましたがそれまでの五ケ年間の中学校時代に比べて非常に思出が多いのであります。これというのも故吉崎校長先生以下諸先生方の高潔なる御人格に教へられて本科、別科の別なく非常に睦まじくやがては社会人として活躍せんとする精気に満ちておつたせいであろうかと存じます。雪中の白滝鉱山の見学、真夏の別子鉱山の実習、卒業前の遊泉寺鉱山のレポート取り等思出はなかなかつきません。卒業後既に四十五年も経ちましたので十一人の同期生もぼつぼつ欠けております。採鉱関係の本取に残っておるものは私と南部、北山の両氏位になっておると思ひます。

在学中は先生方にずいぶん御厄介をかけたのですが中でも級友二、三の者と映画館(昔は活動写真館と云った)に映画見に行き先生に見付かって問題となり諸先生方に御心配をかけました。結局停学三日間位の処分を受けたと記憶しておりますが今から考へるとうそのような事実であります。そのとき吉崎校長先生に呼ばれ順々とさとされ処分の言渡しを受けた時の感じは今でもはつきり覚えており思出す度に吉崎先生の人となりを感じ懐かしい思ひが致します。

夏休中の別子鉱山行は北山越えの三日行程途中病人が出て交代で背負って行ったこと雪中の白滝鉱山行で途を踏みはづし滑り落ちたこと等思出はつきりませんが紙数に限りがありますので残念乍ら省略致します。

樂しかりし昔

(大・15・電)

今 村 幸 喜

高知ハーモニカ ソサエチ

前にも一寸触れましたが当時の工業専門科の研究には邦文の良書の無い所からは是非とも原書に依らなければならぬので、それ等の原書を読破するための必要から英語の素養を身につける事が要求され英語の学習時間を多くしてありました。こんな訳でブリタニカの様な大部の書物迄も備えられるに至ったものであります。ブリタニカは例えば造船の項を見ますと造船技術に関する一冊の本の様に詳細に亘って記述してあり積分子の項でも矢張り積分に関する一冊の書物が出来る程に詳しくその他何れも各科専門の原書を綜合した様になっています。又三十六巻目は詳密な世界地図になっていて世界各地の有名町村等実に細かに明示されています。二三の例を拾いますと、灯台守の娘で名高いロングストーン灯台の小島やスコットの「湖上の美人」で有名なカトリン湖なども出ていますし私共が学生時代に習った齋藤秀三郎先生の世界リーダーに出ていく多くの地名は全部示されています。或る社会科の先生が「一国の文化の水準は其の国で発行する地図書を見れば判る」と言われましたが正に至言であります。その発行当時には世界的に殆んど存在を認められかねていた日本の部を開いて見ましても当時は小さな港町に過ぎなかった須崎や宿毛等も載っています。但し宿毛は当時の調査が不十分であったためYadoga となっていました。これも同書の改訂版では Sukumo と改訂されていますので、矢張り研究進歩の跡が伺えます。今は日本でも可成り立派な大きい世界地図が発行されていますが、精密さの点では矢張り英米のそれが優れています。地図は単に社会科の勉強のため許りでなく日常新聞雑誌等の記事や紀行記等の読物に出て来る地名その他を参照するには無ければならないものであります。

大正時代の中頃からだと思いが、高知市大橋通り電停東に「マカラズ屋」と呼ぶ起小型百貨店があった。正札販売だから、値切ってもまかりませんというのでつけた店名だと考えられたが、実際には心臓強く粘って値切れば多少の勉強はしてくれたものだ。この店の中に筒井楽器店があった。前田正郎氏(大・二三・化卒)も私も大のハーモニカ好きで、この楽器店へ出入りしていたが、主人のすすめで高知にハーモニカソサエチ作ることになり、前田氏宅を結成本部として広く同好の士を募ったところ、母校の生徒を中心として、旧制高知高校、高知商業、高知一中その他からたちまち十四、五人が馳せ参じてくれた。今日とちがって当時の母校にはクラブとしての音楽部が無かった。資本金は皆無だった。会員が少額乍ら小使銭を醸出し合ひ、後は主として前田氏が楽器や楽譜の費用を負担してくれ、且つ又筒井店主が長期借金に応じてくれるなどの援助もあって、難産乍らも無事誕生することが出来た。練習場を借りようにも金がないので、会員諸君は学校の放課を待ちかねて、通町の前田氏邸へ集合し、合奏や独奏の練習に励んだ。やっている方は一生懸命で無我夢中だから、良い気なもので別に何とも思わないが、御迷惑なのは前田氏邸の家族の方々だ。下手な歌うたいは味噌を腐らすたとえもさる事乍ら、十四、五人が一齊にピーピー、ブカブカやるものだから騒々しいことこの上なしだ。いくら好意的な御家族でも一寸驚かれたことであろう。遂に苦情が出て練習場変更の止むなきに立到った。苦勞してさがし廻った末、地の利を考えて大橋通り第三小学校、現在の追手前小学校西側の或る長屋の二階に移し、益々張り切って練習したものであった。演奏に一応の自信が出来る、弘く世間の真価を問う度くなるのは人情であろう。

中央公民館の前身である高知公会堂を借用し、春秋二回の定期演奏会を開

いた。主催高知ハーモニカソサエティー、後援高知新聞社といった場合、入場料も至極割安にして赤字を出さない程度にしたが、何しろ女学生間に大変な人気があり、いつも超満員の盛況だった。夏体みには度々郡部の小学校へ慰問演奏旅行に出掛けた。ドサ廻りの旅芸人みたいなものだが、ずい分感謝せられた。

たしか日下小学校での演奏会で御土産にいくつかの花輪を項戴し、意気揚々の帰り路田舎道で激しい夕立に出合い、雨を避ける農家とでもなく、致し方なく花輪で雨を防ぎ乍ら、やっと伊野町へたどり着いた時には花輪の塗料の為、ずぶ濡れの赤鬼、青鬼が出来ていたことを、何となつかしく思い出すことか。我々が卒業した後、このソサエティーは消滅した様である。

(東工業高校校長)

中内知章先生の思い出

(昭・四機)

沢 本 豊

「アシの名はナカウチ、トモアキという」こおいて「中内知章」と綺麗な楷書で板書された。

キラリと光る目鏡がよく似合う、白色の女にもしたいような、きれいな顔である。

二年生甲組(だったと記憶する(五十人)当時は二年生まで合併授業で三年から科別に分れた)の瞳が一点に集中する! 私共が中内先生にお習した、代数の最初の時間である。

「知章という名にはアンマリ偉い人はない、一ノ谷の源平戦で討死した、若い公達の中に平知章という人があって、神戸の長田の近くに墓があるが、今、アシが憶えているのはそんなもんぢゃ」と云ってニッコリ笑われた。これが、先生と私の師弟としての初対面である。

先生はこの数日前着任されて、朝の礼で吉崎校長先生より、全校生徒に御紹介があった。

「先生は本校機械科第三回の御卒業で、大阪高等工業学校の教員養生所を本年三月御卒業……」

その後で壇上にあがった先生は「ただ今御紹介にあづかった中内です。よろしく……」と云って軽く頭を下げられた。それから数日たった今日、先生にはすでに「坊っちゃん」なる愛称が捧げられていた。

二年生のときの代数は、はじめ中内先生に、のち門田清春先生にお習らしたように記憶しておるが確でない或いはあと安並楠親先生だったかも知れないが、中内先生に「因数分解」をお習らしたことだけは間違ない。

「因数分解ではまづ共通因数を探してみ、共通因数があったら、それを括弧の外へククリ出すことが大切ぢゃ、ただ公式を使うことばかり考えてはいかん……先生のジュン／＼とした講義がつづく……この式をよく見ると $P^2 + 2pab + Pb^2$ ぢゃから全部の項に P という共通因数がある。それでまづ共通因数の P を括弧の外へククリだす……」とたんにドツという哄笑が教室内に爆発する。

一瞬茫然とした。先生もハッと気付いたらしく、白い顔をほんのり桜色にして暫く講義も中断の形……「 P 」とは当時の中学生間の隠語で男性の象徴だったからだ。

今は使はないか、或は年令が高くなったためか、私が先生の真似をしてみても誰一人笑う生徒はいない。

先生には三年、四年と機械製図や機械設計をお習らした。設計の方は勉強さえすればどうにかなるが、製図ときは、不器用な私には全くもって苦手だった。当時は今とは違い、まづ鉛筆書きした上へ、烏口で墨入れをして更に断面を材料の種類に応じて色分けして塗りつぶすのである。上手が書く、まるで芸術作品のように綺麗な図面に仕上がるが、下手な私が書くと、目とは見られないようなできで、我ながら親をうらみみたいような、情ない思いである。それでも我慢をしてイヤ／＼書いてみると、心地よいポマードの香りをかすかにただよわせながら先生が廻ってきて、ジツト見入られる。こっちはますます固くなって、コチ／＼、ちょうど通学電車の中で、両側に

女学生に坐られた時のように、胸がどき／＼して「早くアッチへ行つて呉れ

って、時々病床に伏せられていたようである。

翌三十三年二月中旬から、約十日間、県外支部の協力を要請するために、私は吉村会長、戸梶校長の御供をして、東京、名古屋、大阪、神戸の各支部を歴訪して二月二十日過ぎに帰校したがその直後二十五日朝戸梶校長先生より「オ、沢本さん、きのう中内先生が亡くなられた」とのお言葉を聞き、全く茫然自失……ただ戸梶先生のお顔を見つめるばかりだった。

「驚愕」といい「自失」というのはあのような時を指すのだろうと、今でも時々思い出すことがある。……今先生を失なって、この大事業が成就するだろうかと前途を危うんだことだった。それ程私には先生の同窓会並びにこの事業に対する熱意が大きく、強く印象づけられておった。

何時の理事会にも、余程の事情のない限り必ず出席されていた、先生のお姿を、その後の会合では再びお見受けすることができず（これは云うも愚かな当然のことだが）先生の欠けた会議を淋しく物足りなく感じた人は決して私一人ではないと思う。

同窓会の総力と、県並に実業界、各位の御援助とによって、宿願の図書館も立派に竣工した今日、先生も地下で嘸かし満足しておられることだろう。昨年五月四日の落成式当日、森岡先生の工事報告を聞きながら……「先生、御覧下さい御蔭様で立派にでき上りました……」私は心の中で静に先生に御報告申し上げた。

ここにつつしんで、先生の御冥福を御祈り申し上げる次第である。

（昭和三八年一月十日）

取 員 葉 取 勉

高知工業高等学校定時制の歩みを顧みて、本校定時制は昭和二十三年六月一日戦後の日本の教育制度改革による新制高等学校令によって全日制の併設として設置された。

創設当時は土木建築（定員各二十名位）の両科を昼間授業四ヶ年の課程として、戦災に焼失した焼跡に応急に建てられた木造バラック建の一部を利用して、週三日の隔日時間割で極めて不完全ながら初めて其の母体が生まれた。

当時の校長は森本長太郎先生で一部の全日制取員が授業に当った。

教室といっても冷々しい土間で薄寒い風が破損した窓を通して絶えず吹き込み満足な机とても極めて少なかった。

昭和二十四年一月現在の第二棟二階建（東半分延二九〇坪）の校舎が落成し其の機会に県教育委員会並びに地域社会の指導と要望により定時制の昼間授業を夜間授業に切り替えることに決定し、同年四月新校長森岡良篤先生を迎え春末だ膚寒い四月の夕方、午後六時より現在の電気科、実習室の土間（二十坪）で正式の始業式並びに入学式が行なわれ、土木、建築の外、新規に機械、電気、応用化学、の三科が設置され、入学式は各科定員四〇名実入学生は一八〇名であった。

当時の専任取員は築取（主事兼建築）石川（土木）田口（機械）永野（電気）田所（化学）塩田（理科）森本（国語）東元（社会）坪井（数学）の計九名の先生で、他は講師数名であった。

校長代理小松生幹先生より「働きつゝ学ぶという、この定時制こそ新生日本の教育の本道である。その故に学校としては少壮有為の青年取員を選定し配置した。」との御挨拶があった。実の所我々取員の平均年齢は三十有二三才ですこぶる健康で働き盛りであったがこれからの本務を昼と夜とを入れ替えた夜間勤務は初めてであり、最も楽しい一家団欒の夕げの生活を犠牲にすることは何となく不安もあった。

然しながら目前に居並ぶ年令十五六才の高等小学校も満足に出ていない者より三十才位の家庭持ち、または旧制中学校卒業者等服装も一部の着古した「ホワイトカラー族」より「ゲートル」着用の人夫姿等雑多な生徒達を見て吃驚したが反面何ともいわれぬ責任感に打たれ、毎日取場で実際の仕事をしながら学ばんとする彼等に深く頭の下がる思いがした。

とにかく定時制教育は教師にも生徒にも初めてであったがお互いに将来に対する希望と興味があった。

当時は教科書は勿論のこと戦災校として教具もなく実験実習等も一方ならぬ苦勞があつた。我々は早速電気科取員室を定時制取員室と定め教取員も本当にその使命の重大な事を痛感し団結心を固め一身同体となり午前あるいは午後より弁当持参で出勤し校長先生並びに全日制との連絡を保ちつゝ定時制発展のための会議を通してその立案と積極的実行に全精神全肉体を捧げた。今から考えると苦痛の中にも一つの朗らかな暖かい障壁のない家族的生活の雰囲気があつた。

生徒達も毎日時間の関係上、大半が夕食もとらずまた取場の関係で一時間(午後五時半より)に遅刻する者も多く、授業も学力差もありすこぶる苦勞があつた。特に英語において甚だしいので会議の結果はじめての試みとしてこの時間は科別を排し能力に応じたクラスを編成し授業を実施した。

又喫煙する者に厳禁することはかえって火災の心配もあつたので廊下に水入れ「バケツ」を置き指導した。特に土間の一隅にピンポン台を据え放課後生徒達に慰安と不足勝ちな運動を補いその利用者もすこぶる多く取員と生徒の融和が生れた。

我々の最も心配したのは生徒の保健の問題特に夜間の照明度の不足のための身体に及ぼす影響また教師の不慣れ不手際、教材の不足、生徒自体の学習時間の不足かつは経済的圧迫または給食設備の皆無照明設備無きための体育時間の完全履行が不可能等のため年次毎に生徒数の減少することであつた。事実当初は最高学年において生徒がいつの間にもやう消失の悲劇に直面したこともあつた。

年度別生徒数表

	一年	二年	三年	四年	計
昭和二十四年度	一八〇	二二	—	—	二〇一
二十五年度	一七七	八三	一八	—	二七八
二十六年度	一八九	一一二	六四	一三	三七八
二十七年度	二〇〇	一三三	七九	五五	四六七

二十八年度	二〇五	一三九	九二	六三	四九八
二十九年度	二二五	一三五	九三	七六	五一九

我々はこのような不運の生徒に対し全取員あげて直接職場あるいは家庭を訪問し何とか一人でも多く無事四ヶ年の課程を修了させ新生平和日本の技術的建設のため、立派な人間として働いて貰いたいものと努力に努力を重ねた。また当時は年次により募集定員に満たない状態もあつたのであらゆる機会を通じ生徒獲得のPRに努めた。

その結果職員の努力が実を結び年次毎に別表の如く生徒数の増加を見ることになつた。

昭和二十四年九月には第二棟二階建西側半分(普通教室四、製図室一、延二七〇坪)

昭和二十五年五月第一棟本館二階建西半分(一〇教室、二五〇坪)

昭和二十六年六月第一棟本館二階建東半分(延三五〇坪)

竣工、昭和二十五年七月機械工場の大修理完成、同年九月工業化学実験室竣工。

同時に取員も大分増加し狭小になつたので現在の本館二階に職員室を移し全取員ますます団結の上大定時制への発展の理想図を描きつゝ努力した。

先づ生徒の実力をより多くつけることを考え色々批判はあつたが従来の三学期制度を排し二学期制度を確立し実施した。

また、年次毎に取員数生徒数の増加に伴い授業以外に事務方面、渉外方面生徒指導面取員組織の面より見て従来の単純な運営に支障を来たす恐れあることを考え昭和二十六年より種々の制度組織を作らざるを得ない状態となつた。

即ち庶務会計の充実教務部、生徒部(生徒指導)指導部(学力進学等)文化部(図書学校新聞)厚生部(学用品販売、生徒用食堂経営)保健委員会、就取委員会、照明委員会を設けた。

またホームルーム、クラブ活動の時間の設置、取員会議の議長制(任期半年)を採用する等其の発展にいよいよ積極的努力を加えた。

当時は生徒在籍数五〇〇人専任教員十八人、全授業の四分の一以上は時間講師であったが種々の事故により正常な授業運営には相当苦心があった。

また一部職員の健康的理由による全定交流問題もこれからいよいよ頭痛の種子の一つではあったが我々職員は内には生徒に対し純粋な勤労学徒であり且つ偏見的思想を持たず学力の面でも全日制に劣らないことを「モットー」とし定時制課程の本来の姿を正しく理解し其の中で勤労と学問を両立させることに努めた。

即ち教育の機会均等の場で人間がもまれもまれして行く過程の中で中庸的に物事を判断し身を処して行けるよう、社会を恨まず自分を、あわれに、はじめに思わず現在の環境に感謝し、自己を大切にし、いつかは来るであろう「チャンス」を見逃さない努力を要求した。

外には高知県定時制主事会を県教育委員会の肝入りで結成し県内では中村高岡、仁淀、本校、市商、追手前、の各校において定時制教育研究会並びに生徒発表会を、善通寺において四国四県定時制研究会大会京都、東京において全国定時制大会を開催、引続き県下定時制高等学校連合体育会を高知市で、また県下定時制生徒会連合会の母体を作り、かつは県下の定時制弁論大会を追手前高校で開き定時制生徒の苦斗を社会にうったえた。

また、全国組織の一環として県下定時制高等学校振興会が関係方面の代表者により結成され県下定時制の発展と財政的援助をその方面に請願した。同時に校長並びに主事は度々県教育委員会に出頭し、文部省基準による教員の適正人員確保身分保証、予算の獲得等々交渉による努力を重ねた。

学校もようやく軌道に乗り学校、生徒会共催によるスポーツ校内対抗、運動会、文化祭を開き、文化面においては学校新聞の発行、社会科の研究等々生徒会の活動も盛んになり、放課後種々のクラブを通じておそくまで居残る姿が多くなった。

第一回生の卒業を目前に控え世にその真価を問うため学校もますます多忙を極め有名人を招きその心をみがき、また、映画観賞によりその心を和げまた在校生一同と共に寒い冬の夜製図室において、さゝやかな茶菓で卒業を送る会を開き、色々の即興や歌の中で、送る者、送られる者、教師も生徒も誇

高い定時制発展のため心と心を固く結んだ。

また彼等の在学中度々の停電に大変迷惑を掛けたことを思い出す。幸いに昭和二十七年三月三日第一回卒業式が全日制と合同で行われた。当時、全職員は本当に感激すると同時に三分の二以上の生徒が途中挫折した事を思う時ますます定時制教育のあり方について深く反省させられた点が多々あった。特に就取運動を通じて感じた事は社会の認識を高め真に愛され親まれ、尊敬され実力のある技術を身につけた辛抱強い中庸的な人間の育成ではあるまいか。

昭和二十八年三月土木建築の製図室完成。

卒業生一覽表

年次	機械	電気	化学	土木	建築	計
昭二十七年	1	1	1	6	9	11
二十八年	1	20	1	10	8	49
二十九年	1	26	2	5	9	58
三十年	22	20	6	10	13	71
三十一年	16	16	8	12	14	66
三十二年	24	31	6	13	19	93
三十三年	22	17	7	15	18	79
三十四年	27	18	8	10	15	78
三十五年	29	27	11	12	16	95
三十六年	38	28	12	18	22	118
三十七年	45	38	15	15	22	125

さて、定時制の夜間授業の照明問題は、前記の如く完全授業の面より特に保健上の立場から考えて発足当時よりの我々の懸案である最も重大なる事と

恩師、同窓を想う

(大・十五・電) 川久保友一

して転員も生徒も其の早急な解決を叫び続けて来た。特に実験実習場の照明施設の不完全は云うに及ばず普通教室においてさえ照明学会学校基準の半分にも達しない状況であった。かゝる事情のためついに昭和二十八年七月正式に照明委員会を作り種々調査研究の上具体的計画を立案し、小松校長を先頭に全職員、生徒代表打って一丸となり県教育委員会、県議会並びに県庁にその実現のため猛運動を開始した。引続き我々は数回にわたり関係方面に陳情を行ないようやくその意のある所を認められ昭和二十九年に普通教室全体の改善に必要な予算の獲得を見たのである。

かくて月日は人を変え昭和二十九年よりおいおい入学者の九五%までは新制中学出身者となり年令的にも統一され教授上指導上昔旧の如き無理はだんだん無くなって来た。

昭和三十六年三月生徒在籍数六六四名 専任教職員四十四名 講師二十名

昭和三十七年五月在籍数表

機電化土建	289名
械氣学木築	155
	92
	90
	118
計	744名
専任教職員	46名
講 師	26名

現在まで卒業生も八四一名の多数を数え何れも県内外の産業界の第一線に活躍している状態である。

今や定時制も創設当時の苗木も幾多の風雪に堪え巨木となり現校長戸梶先生の統率の下一糸乱れず県下有数技術校として脚光をあびますますその内容も充実の一途をたどり発展に発展を続けている。

我々は現下直接、間接を問わず、勤労生徒に対する工業教育の重要性に積極的理解と協力を持ち一日も早くその完成された理想的姿の実現を祈るものである。

回想というものは、楽しいものである。苦しかったことも、悲しいことも総てが変じて、ホホえましく、愉快になる、有り難いものに見える。五十年の歩み、に投稿すべく、回想して在校時の五年間に及ぶと、何にも彼も楽しく、心の暖たたまる、ものが満ちて居るのは不思議な位である。よい先生ばかりであった。有り難い先輩ばかりである。同期生も又、皆んな立派な人達であったし、在るのである。停年の年に達した所以か、恵まれた自分であったことを感謝せずには居られない。随分とお世話様になっている。今にして尚然りである。少しでもお礼を言いたい。したい。と思う。

回想して残念な淋しいことは、恩師は殆んど皆んな亡くなられて仕舞ったこと、この頃先輩の死を聞くことが多くなったことである。切に御冥福を祈る。

中村惣太郎先生は校長代理であられ、化学科長をしていられたので、科の違う私には、何れかと言えば御縁が少ない筈であるの一番思い出される恩師の一人である。以下述べる様に之れが修身をお習いしたことに拠るとすれば修身教育も又必要でないかと思う。

社会に出、折に触れ、時に臨み、私達の口にする言葉に、求めよ、さらば与えられん、というのがあつた。これはマタイ伝か何にかにあるものだが中村先生に洋紙一杯に、ガリ版ずりとして戴いたものの中に在るもので今までどれだけ勇気づけられたり、行い得たことか、その都度中村先生のお顔を思い出す。シリ戸を閉めること、履物をキチンと揃へることも先生に教えられ行じている。子供達の、下駄等揃へないとき(いつもである)注意しながら子供達の先生でもあつて戴いたらと、先生のお顔を思い浮かべている。先生の御経営せられた中村女学校が土佐女子高校の所から土佐校の隣りに移り、その後衣料工場に転じ現在或る土建会社になったあたりを通る度び、又中村先生を想う。

松本政良先生は当時私共の野球部長であられた。そして先生のお宅に合宿してお世話様になっていた。今の丸の内高校の北側にお住いになり、近くに島田比楽先生のお屋敷があった。誠に申訳のないことであるがその折の様子は殆んど思い出せない。しかしスキ焼を御馳走になったことがある。喰ひ盛りの少年が思い切り腹を減らして大勢ドン／＼戴いた筈でその食慾は随分に盛んで、大変の御迷惑をかけている。にも不拘ず、あのニコ／＼した先生、先生にもましてニコ／＼していられた奥様の御顔しか思い出せない。先生が校長となられ全国校長会で、その高名を広くせられてる由を聞き心から満足したことであった。私は先生のニック、ネームを書くことも言うことも好まない。然し私はウシになりたいと思う。

細川藤右衛門先生のこと、島崎盛義先生のこと、中村第実先生のこと等々この際書きたいと思うが余祐がないので、在校五年間下手な野球選手として苦案を共にし、相共に進学した則岡、島崎、島内、公文の優秀生が何れも惜しまれて世を去り、身体的には長生きの出来ない筈の東工高の今村校長と二人が残されて仕舞ったが彼等を想い四君の霊を慰めたい。

少年野球時代である。大阪天玉寺に遠征したことがある。チーム、ワークのよい、よく練習したチームであった。最初四国の代表権試合として徳島勢と今宮中学かで対戦した。二十何対零という大勝で、誠に素晴らしい当りであり、守備であった。仙頭先生が相好を崩してエライもんぢゃ、あの当りは相手のドギモを抜いたと大喜こびの姿が思い起こされる。然し明日の試合を忘れ、お調子に乗った田舎チームの不慣れから、力を出し切って仕舞ったことになり、翌日の全国大会には優勝したチームに二点差位で惜負した。吾軍は故障続出で半分位しか力が出せなかった。思へば惜しい一戦であった。この試合にもましてこれ等親しい仲間のいないことが惜しまれる。

放屁談義

(大・7・3・電)

渡

辺

栄

放屁談義と云ってもその生理的或は医学的研究などと云う大それた事を書

く積りは毛頭ないが私が母校在校当時それに関連した面白い思い出があるの
でそれを御披露して投稿の責を果し度いと思う、それは私が母校に入学した
翌年即ち大正三年紀元節の当日のこと、式は来賓多数臨席のもとにいと
厳肅に行われ最後に織田さんと云う顎鬚の長い理事さんの訓示があったがそ
の最中に私の真ん前にいたのが突然大きなおならを一発、現在の私ならおな
ら一つ位それこそ文字通り屁でもないが当時はまだ十五才の小坊主、可笑
しさがこみ上げて来て我慢しきれずとうとう一度に吹き出してしまった。さ
あ大変みんながじろじろ見るし、まるで自分がおならした様な格好になって
引込みがつかなくなつたが、少したつとまた元の静寂に戻って、式は間もな
く終了したが謹厳なる可き式場で笑つたとあつてはそのまま済む筈がない、
果せるかな翌朝登校すると主任の先生から放課後に校長室に行く様に申し渡
しがあった。屠所の羊さながらに恐る／＼校長室に這入って行くと吉崎校長
先生いつもより一層おっかない顔をして曰く、最も静肅でなければならぬ
大切な式場で笑うとは何事だ、織田さんがお前の様な不真面目な生徒はやめ
させてしまえと云われたら校長としての責任上退学処分も止むを得ないでは
ないか、後より何分の沙汰がある迄謹慎して居れとのこと、これは誠に困
った事に成つたものだ、一番納得の行かない事は自分だつて間違ひではあるま
いし大切な式場で何の原因もなしに笑う程馬鹿ではない、寧ろこちらは無理
に笑わせられた被害者であつて、真犯人たる放屁者に何の御咎めもなく被害
者たる自分だけが退学させられて一生を棒に振らなければならぬとすれば
こんな不公平極まる裁きが許されてよいものであるうか、云い度い事は沢山
あるが此処は一つ低姿勢で行くにはなしと覚悟をきめ低頭平身平謝りに
謝つてその場は引き下がつたが不思議なことに其後本件につき別段に何のお
咎めもなく大正七年三月無事卒業させてもらった。

爾来星移り月変つて四十三年の歳月が夢の様に流れ往年の小坊主も今では
五人の孫からお爺ちゃん／＼と呼ばれる身となり、社会の表裏も一通り見聞
し尽した今でも一件を思い出す度に微笑を禁じ得ないと共にこの一笑話の
中にも矢張り或る処世訓に通ずるものがある様に思われてならない。即ち複
雑怪奇な人生行路で人は往々にして問題の中心を忘れ派生的事象のみにこだ

わって誤った判断を下し自他共に毒することがある。蓋し戒心すべき一事ではあるまいか。終りに諸先生並に校友諸兄の御多幸を心から御祈り致します。

昭和三十七年九月十六日記

追記

本文を書き終った所で母校同窓会庶務の方から前校長森岡貞篤先生御逝去の御知らせに接し驚きました氏は佐川私は越知の出身、在校当時故郷への行き帰りに馬の原から伊野までの間一緒に歩いた記憶も昨日の様に思い出され一入感慨深いものがあります。謹而哀悼の意を表すると共に其の御冥福を心より御祈り致します。

思い出の記

(大・8・3・電) 高村美茂

私が入学した頃は、上級生の頭は角刈や五分刈。もみ上げも短くくっきりと剃上げて、オッサンのように思えて恐かった。又挙手の礼をウツカリしていると後日呼び出されて「キタワレタ」ものである。そして現代の学生からみれば何とも不思議に思われるであろうが、夜間外出は父兄同伴。映画は禁止であり、発見されると謹慎か、或は停学、プロマイドを持ってさえ停学を喰う時代であったから恋愛は思いもよらずラブレターは無期停学か退学させられてしまう。比べると現代の学生生活は実に恵まれていて羨ましい限りである。人間は抑圧されると反対に破ってみたくなるのが人情で又若気の至りでもある。枳形に出雲館という映画館があって、余り先生方の目の届かなかったせいか、よくモグリ込むのが評判となり、或る寒い夜、先生による急襲が行なわれた。一寸した捕物である。百姓あり紳士あり、出口は全部固められて居たから皆網にかかり、明るい電燈の下で整列させられたのは壮観であった。翌朝こん／＼と説諭の上一週間の停学を受けた。この方面を担当された先生方はさぞ御苦労であった事と思われる。私には何か忘れ物をしたような気のするこの頃である。先生にも色々なアダム名を奉った。チャッチ

ヤツ(村井先生) インキン(大沢先生) ゴリ(宮地先生) ウシ(松本先生) テツテイ(中村先生) アンタ(浜田先生) トンチン(渋谷先生) リコー(溝淵先生) 等々、皆故人になられたが色々なエピソードを思う時微笑を禁じ得ない。

溝淵先生は、いつも目をパチ／＼させて言葉尻にネ、ネを必ずつける人なつこい人柄で皆をよく可感がつてくれた。非常に謡曲がお好きで国語の「鉢の木」の講義になると教室ぢゃきにあんまり太い声でやられん／＼と云って謡いながら講義を下さったものである。十数年経って大西時計店がまだ新京橋にあった頃、同窓生五六人で四方山話しをしている所へ丁度来合わされ在校当時の話に花が咲いた。誰かが「先生の試験の採点はいつも六〇―七〇点しかくれなかったですが、どういふもんですか」と云った時、先生曰く「試験というもんは、皆に勉強させるが目的ぢゃきに、わしは皆の答案を見た事はないぜよ。マアおまんはそればーの値うちぢゃったきのー、落第さざざたらそれでええわよ」とニコ／＼云われた。なか／＼のサムライである。今更の如く先生の人徳に頭の下がる思いがした。笑えば目がなくなり、リキユウを履いて小さきみに歩いて行かれる姿がなつかしく思われる。

予備少尉であった宮地先生の体操には、教練があつて号令の練習をさせられたものである。オイチニ／＼の号令で足並揃えて行進するのだが、上級生の中には「オイチヨニチヨ／＼」とやる者や「廻れ右まいへーおの」「おい」が少しでもおそいと杉垣へ真直に突込んでしまったり「右向けまいへー」の時はワザ／＼左向にドン／＼行ってしまふ者があつたりで、随分ヤンチャをしたものである。良き時代のノンビリした授業風景である。

昨年亡くなられた中島三流君は、私の最も尊敬している友人の一人である。天下に名議長と謳われた頭の切れ味と弁説のさわやかさは右に出る者がないと云われた数々のエピソードがある。或雨天、外に出る事が出来ない日例によって彼の周囲に集っていた時、たま／＼漁の話になったが、彼曰く「須崎の沖」(彼は須崎出身)では鯨が「尻」をヒッたら附近の魚が尻に酔

うて、全部浮いてしまう。それを漁師がかき集めるのでいつも大漁だ。これを「鯨の尻獲り」と云う。といったので、どっと大笑いして「おんしゃホラ吹くな」と皆でやっつけたものである。「おれのお通夜には賑やかに飲んでくれ」と息を引きとられたが、彼らしい往生ではあった、だが、もう少し生きたい欲しかったと思う事は愚痴であらうか。

K君は背が低くて丸々と太っていて非常に鉄棒が苦手であったので、太い尻をワッショイ〜皆で持上げて、ヤレお尻が上ったと安心した途端ポツタリと優に十八貫を越える短軀が頭上に落下し皆も一緒に尻餅つのが常であった。鉄棒は、彼に関する限りどうにもならず、採点は彼のみ五十点であつたらしいが今はどうしている事やら。

T君は勉強が余り好きな方ではなく嫌な時間には本を立ててさも読んでいるが如く眠つたものである。この点では確かに熟練工であつた。或日溝淵先生の西洋史であつたが、例の如くぐすり眠りこけていたが、先生がコツ〜教室を廻りながら講義を進めてT君の前でピタリと止まられたが、一向に目が覚めず、机の脇のT定規をはずして肩に担がせ丁度十字軍の処であつたから先生が「これはよい十字軍だね」と二度三度云われたが、それでも涎の糸を引いて目覚める様子もなく、こらえにこらえていた皆はたまりかねて吹出してしまつた。その声に驚いてやっ〜と気付き目をパチクリさせてキョロ〜見廻したので、余計おかしくてドツと大笑いになつた。彼は覚えているだらうか。

その他習字の時間には手をとつて教えて居られる先生の後から、ズボンのお尻に習字をする者や、目覚し時計を持たで時間中にジリ〜鳴らす者等、我青春の思い出は尽きない。故人になられたという噂を聞く事の多くなつた最近では、いとも身辺寂しさを感じる私ではあるが、卒業以来いつの間にか女房も「あんた」から「おとうちゃん」そして現在は「おじいちゃん」に変化して来ている。五十余年の才月は戦争という大きな転換がありながらも、どうにか切り抜けて来たが、矢張り学生時代の友人は私の大きな支えとなつた。明治に生れ、大正に育ち晩年を昭和に送る、私は特に工業校の伝統ある先輩、後輩の強い結び付きは、他に類をみないように思う。

老いて益々盛ん。命ある限り母校の発展をみつめてゆきたいと思うのである。

想い浮ぶまゝに

(大・9・機) 並川安幸

この春、母校の五十周年記念式典に列し、同窓会館に陳列された写真を見て、歴代校長、恩師、同窓生、校舎などが古いフィルムのように、と切れつゝも、生き生きと映る想いだつた。私の修学旅行記が載っている校友会誌(五号)を手にして、わがハイティーンの一こまをまざまざと見た。

私の母校の想い出は、北与力町時代につながる。

私は西門から出入したが古い石の門柱を入つた処に小さな築山があつて、むらがり咲くのうぜんかづらの花のかたまりが南国の夏の陽光に映えて燃えるように真赤に、粗いタッチで、理科教室のしとみ板に描かれていた画面は強い印象として残っている。

通路には頃合いの粒のそろつた浜砂がたつぷり敷かれ、焼丸太の杭に通したしゆる繩の囲いの中の芝生はよく育ち、所々程よく配置された松などの植木とともに手入れが行きとどいて、構内はちりをとどめずきれいであつた。いつも手甲をはめて芝を刈っていた宮繕係りのおじさんの陽にやけた顔も、しゃきつとした体つきもよく覚えていたが、名前が思い出せない。

生徒は校舎の中では靴を脱ぎ(上ばきははかなかつた)、掃除をていねいにやり、床はぞうきんで拭いた。

「私立である」狭くとも美しい学校をわれわれは誇りとした。

建物は古くからの新しいのとあつたが、私たち一年生の教室は平屋新校舎の西の端で隣は最上級の四年の機械科だつた。二つの教室は板戸で仕切られ時には取り外して、式場になつた。森沢菊吾先生の時間(代講?)に一同起立させられ、深呼吸をしたことがあつた。私は吸い込んだ息をじつと殺しているうちにフーンと気が遠くなつて、うしろざまに仕切戸に倒れかゝり、大

きな音を立て、両方の教室を驚かせた。早稲田大学の理工科を出て、母校の教諭、再度の校長と長く勤め、最近亡くなられた森岡さんは隣りの組におられたわけだ。

門を入ったすぐ左手に井戸があった。水位が高く、私の生れた鏡川に近い通町の深い井戸と比べると、水はよくなかった。井戸につづいて小使部屋、湯沸し場があった。

小使さんは、当時有名だったシ、オイの大頭には及びもせぬが、福祿寿のようでもいづれにこにこと笑みをたゝえていた。四時間目になると、湯を桶に入れ、二つ宛おうくで担って重そうに、えっちらおっちら各教室へ配っていた様子。今でも目に見えるようだ。

トンチン（渋谷先生）も頭が大きくて、体を左右に振りながら、調子をとって歩かれる姿を笑つたものだが、実に立派な方だった。

湯沸し場の軒先に時報の鐘がぶら下がっていて、同級の小柄でひょうきんなY君がこの鐘に頭をつつ込んだまゝならしたことがあった。後年、アインシュタインが来日して、つきならす大梵鐘の真下に立った話を聞いた時、両者がダブツて笑いがこみあげた。

二棟の実習場の、南のは鍛冶、鑄物、機械、製図で、島田比楽先生はこゝに机を置いて、頑張っておられた。北のは化学、電気、木型であった。眼鏡を鼻のさきにつけた浜田さんは、長い眉毛の奥にやさしい目を沈ませて、黙々と木型を作っていた。

実習は三年の本科になってからだったが私は予科の一年の時から、放課後機械工場の窓の外に箱を置いて、よくのぞいたものだ。やがて、邪魔にならぬ限り、工場に入ることを黙許され、青い実習服を買って貰って、機械工場へ入った時のよろこびは忘れられぬ。

道路をへだてた北側に細長い空地があつて川端にボートをつないでいた。校内製のエンジンを装備して、新聞社の後援で、四国一周を敢行し、大変な評判になり、若い胸は誇りに膨らんだ。

校長室、教員室のあつた古い棟の西の端、小使部屋に向かい会つた宿直室にはなつかしい思い出がある。

大正九年、私が卒業した時分には所謂実業学校から高等学校への途は開かれていなかった。七月に、三重県の津中学校で、その年の最後の高等学校入学資格試験を受け、やつとこのことで入学願書締切に間に合った。（高知高等学校が出来た時には、この壁はなくなっていて、多くの同窓が続々と優秀な成績で入学した。）これは私の生涯で最も苛酷な試験だった。一回で全科目の合格点を取らねばならない。七〇名を越えた受験者は連日、各科目毎に、つぎつぎと消えていった。英語は津中学も母校と同じ斎藤の赤リーダーだったから助かったが、東洋史、博物など教わらなかつた科目は、独学で、こたえた。一週間ぶつ続けの試験で、徹夜もしたので、最終日に体操までやらされた時にはふらふらであった。やつと四人だけ合格して、悲しいようなられしきだった。父に電報を打って、伊勢神宮に参拝した。（後に津中から来たのに聞いたら、体操の教師はオニと云うあだ名だった。）

体操と云えばゴリ（宮地先生）を想い出すが、ゴリ（ラ）は名に似ずやさしい親切な人柄で目尻にしわをよせて笑う、額の広くはげあがつた面輪には温情が溢れていた。祝祭日には陸軍の大礼服を着用され、異彩を放つた。お宅が鴨田であつたから、私の家の前を通られるので、折にふれ、何かとお氣をつけて下さつた。

靴のかゝとにゴムを打つことが、軟派と目される生徒の間に流行し、禁止された。私たち何名かは、わざと野球のスパイクを打ちつけ、コンクリートではガチャ／＼音をたて、土間には穴をあけて歩き廻わり、ゴリさんを苦笑させた。

昭和三年、東大を卒業して大学院に入り、帰省したら、宮地先生は、私が高校時代からサッカーをやつたのを知って、後輩に手ほどきしてくれと云われた。二階建校舎、実習工場、応用化学教室がU字型に囲んだ校庭でボールを蹴つた。あそこは、むかし、私たちが始めて野球をやつた処だ。（投手の山崎君、捕手の津野君とともに、すでに亡い。）私は宮地先生に、運動場が狭いから、バスケットやバレーをやるようにすゝめた。母校のバレーはいつから始まつたか知らないが、最近強いと聞いた。

回想は飛躍する。進みすぎた、もどそう。

母校今昔物語

(大・9・電) 小川 楠 水

第一回電気科の小川さんの跡を追って、あこがれの「一高」を受けて滑った。七月試験はこの年までで、翌年から三月になった。新設される松江高校を目標に、郷里で浪人生活を送り、受験勉強を続けた。山田直先生が英語をみてやろうと云って下さったので、放課後に登校して、宿直室の畳に坐って差し向かいで、特別講義を受けた。何回通ったか覚えはないが、フィフティフエイマスストーリーズをあげた。松江高校に入学して、まっ先に山田先生から「ラフカディオ ハーン」の愛した松江で勉学する君を祝福し、かつうらやむ」と激励のお手紙を頂いて、うれしかった。先生は後、一中に移られたが、ついにお目にかゝらないでしまったのは、何とも心残りである。

私はたまたま、小泉八雲の旧居の隣（現在記念館の建っている処）に下宿した。節子夫人を育てたおばあさんを知り、それらの縁で八雲会の行事を手伝ったり、東京へ出てからは、小泉八雲のついでのみかを度々訪ねたりした。

松江における高校生活はよき時代、よき風土に恵まれて、十分にたのしんだ。母校では五ヶ年間で、皆勤で小柳司氣太郎著「詳解和辞典」を賞に貰い、また金や銀のモールを帽子に巻かされて、ともかく一応は善良な生徒であったが、松高では第一回で、頭を抑えるものがなく、まさに鳥なき里のこうもり、存分に羽をのばした。

オトウ（吉崎初代校長）が黙って、県の育英資金を申請して下さったので私は毎月、校長室へ呼ばれて、直接二〇円宛を手渡された。父からも送金して来たので、不自由しなかつた処か、遊びすぎて二年をドツベツた。しかし奨学金はずつと続けて、三年間貰った。

オトウが母校をやめられてからのことだが、上京された際、当時に料理で繁昌した大森海岸の料亭にお招きして、桂工会が催され、出席者も多く盛会だった。私は酔って、すすめられるまゝに、三味線や太鼓の伴奏で賑やかな安来節に合わせて、どじょうすくいを踊った。オトウは昔ながらの血色のいゝ温顔をほころばせ、にこにこ笑っていられたが、出雲の松江で妙なものを勉強したもんだと、嘆かれたことであろう。

この晩が、オトウにお目にかゝった最後である。

高知工業の生立ちは遠い昔の明治四十五年であって、当時は北与力町にあった土佐郡の高等小学校の跡を買って、創立者竹内綱先生が校長となられ私立高知工業学校と云う標札を掲げて名乗りを挙げたのに始まる。この標札の文字は当時の海南学校の西森慎太郎先生の揮毫に依るもので其の後校室として残してあったが、惜しい事には戦災で焼失してしまつた。

創立当時は前述の高等小学校の一棟と小使室が残っていて第一回の入学生はあの古ぼけた校舎の二教室を使っていたらしいが、大正元年九月校舎一棟が新築落成し之れに附け足して校舎全部が大正三年三月に完成した。当時の金で壹万円が出来上つたそうである。後にこれを二階建にしてあったが、これ等の校舎及工場等の建物も取壊し又は戦災で焼失したので、今は全く昔を偲ぶすがもない。

当時の校舎の周りの空地は教頭をして居られた森沢菊吾先生の御配慮で体操場以外は殆んど芝生にし、桜や松その他の庭木を適当に配置して植え真中の通路は玉砂利を敷き、庭園や校庭の手入れをするために、専門の人が雇つてあったので、全く綺麗な感じであった。私共は休み時間に日当りのよい芝生の上に白い靴下の儘で降りて寝転びながら、機械科工場の南側の美しい葉雞頭を眺めたものである。玉砂利の通路と芝生の間は黒く焼いた杉丸太の尖った柵があつて緑色の芝生との対照が素晴らしい感じを与えていた。

創立当時の先生は校長（当時校長事務取扱）吉崎七次郎先生、教頭森沢菊吾先生、機械科島出比楽先生、体操佐竹弼三先生、会計岩松昌先生の七人の方々であつた。此等の先生方は皆故人となられたので今更らながら淋しく思う。

校名の変遷も明治四十五年創立より大正九年三月迄私立高知工業学校で工業伝統の家族主義とか竹内イズムなどは多く此の時代に培かれたものである。大正十二年三月迄高知工業学校と私立の二字を除いた私立学校で更に大

正十二年四月一日から高知県立高知工業学校と変り昭和二十二年四月一日には高知県立高知工業高等学校と頗る長くなったが高知工業の四文字はどこ迄も続いて残っているのは御同慶に堪えない。

高知工業の帽章の創案者に就いて私はずいぶんと旧先生方その他へ聞き合せて見たが遂に判らず今に至っている創立当時早大の中村康之助先生が竹内家と関係があつたため、早大かどこかの図案の先生の創案に依るものであろうとの事である。若し御存じの方があれば、御示教を賜りたい。他の高校では校名や帽章の変つた所もあるのに最初の私立高知工業時代の帽章がその儘残っているのは高知工業の四文字と共に嬉しい印象を与えるものである。

創立時の学年別とか修業年限等については竹内明太郎先生の構想が多分に影響している。最初竹内先生は欧米の工業教育を視察せられて小学校六年の卒業生を五年間教育すると云う所に重点を置いて居られた。しかし当時の文部省には先進国の工業教育など詳しく調べた人が居なかつたためか、工業学校は高等小学校二年卒業生を三年教育するという規程しなかつたので、その設立に関し三年制を主張し、竹内先生は原案を主張せられ折衝の結果それならば予科二年本科三年の五年制とすると言われ斯くて全国最初の五年制工業学校が誕生したのであった。その後文部省でも五年制の必要を認めて五年制の工業学校の法令を敷く様になつたのは当時の竹内先生の先見の明の豊かさを物語るものである。

又基礎科目の内に高等数学を採り入れる事を竹内先生は提唱して居られたのも先見の明を啓示するものであった。当時としては寔に破天荒の案とせられた時の第一高等学校長瀬戸虎記先生（高知県人）など工業学校に高等数学の必要はないと真向から反対したそうであつたが、当時の欧米の工業学校では既に高等数学の授業が行われて居り専門書も簡単な微積分が取入れてあつた。これも十年も経たない内に高知工業では数学教科の内に高数が這入つて来たのを見れば如何に当時の日本の工業教育が軽視？されていたかがよく判る。此等の二三の例を見ても竹内明太郎先生は偉大なる教育家であつた事が了解されよう。教壇に立つ人だけが必ずし教育家とは限らない。

次に第一回の入学生が予科から本科へ進学する時機械科と電気科との志望

者を分割するのに、電気科の方の志望者が多すぎて問題になつた事がある。竹内明太郎先生は卒業後の就職先の点から之れを心配せられ、電気科志望者を機械科へ転向させよう様指令されたので校長先生以下大いに説得につとめ、漸くの事で機械へ大分転向したがそれでも第一回卒業生に限り電気科卒業生が機械科のそれより多かつたのは一寸奇現象であつた。（當時は電気工業界は黎明期ともいふ様な時代であつた。）然し程なく大正三年第一次大戦の勃発で機械も電気も卒業生は引張り風となり全国各地からの採用申込に応じ切れず当制全国唯一の五年制の工業卒業生という点で就職率は一〇〇%その上採用申込を辞退するのに当時の先生方は苦勞されたのであつた。

入学試験の如きも小学校の卒業式が三月二十五日であるので二十六日に施行して他の中学校の二十八日施行より二日早くし二校併願者は先づ工業で吸収して不合格者が他の中等学校へ廻る様な訳で自然に優秀な人材が入学して来るから高知工業のプライドは高かつた様である。

当時の通学服も夏は霜降りの上下で肌着は白木綿のシャツ一枚、いくら暑くても決して上衣を脱がなかつたが冬は矢張り黒の小倉服の上下でシャツは白いメリヤス一枚と定められいくら寒くともジャケットやオーバなんか着なかつた。それでも別に大して寒いとも感じなかつたのは暑さや寒さに対する皮膚の感覚が必ずしも鈍感な為ではなかつた様である。服の価格も夏服は上下で二円冬服は上下で三円であつたから今の学生諸君の想像以上である。

教科書その他学用品はカーキ色の風呂敷で包んで小脇にかかえて始業時刻の午前八時迄に大部分の生徒は歩いて通学してしたが伊野後免等の遠方の生徒は電車通学であつた。風呂敷包みは内容に応じて外形が大きくもなり小さくもなつて又内容がなければ折畳んでポケットの中へも這入る寔に便利なものであつた。そのカーキ色もなつかしい思出の一つである。帽子は鉢巻の部分にカーキ色のモールを学年別に応じて一本から五本迄巻くので一見学校別と学年別とが帽章を見なくても判る様になつていた。しかし大正七年からモールを巻くのは廃止された。上服の襟には科別の漢字と学年を表す数字の襟章と襟文字が附けられており前記の何れを欠いても服装違反の取扱いをせられていた。

修学旅行の思出も又なつかしいものでありバスや汽車のなかった時代の唯一の交通機関としては後免伊野間と堀詰棧橋間を結ぶ支線の電車だけであった。それで例えば安芸方面へ旅行のときは沿岸通りの汽船に乗り端艇で安芸の浜に上陸し帰りは陸路後免迄徒歩で来て漸く電車に乗るといった様な調子又越知の横倉山へでも旅行の時は伊野から向うは往復とも全部歩いて苦しい中にも愉快な旅行を楽しんだものである。旅行は一切靴を履かず全部わらじばかりにゲートルを使用し靴ずれを警戒したのは当時の旅行が如何に強行軍であったかが想像される。今はそれだけ楽しい思出として残るわけである。

当時のスポーツは相撲だけであり第一卒業生の橋本亀一郎氏以来ずいぶん強い人が現れた。後後大浜で団体第三位（此の時は一位、二位、三位全部高知）や永吉一猪氏の横綱賞などを経て昭和二十五年二十六年の連続二回の優勝迄その活躍の歴史は輝かしいものである。最後に母校に関する思出として一番脳裡に鮮明なのは矢張り竹内明太郎先生の御功績である。

先生は私立工業時代の長岡乙次郎先生を米国の大学に留学させられた後小穴製作所に推薦されている等何等援助した人の自由を束縛しない。これは一寸常人の真似の出来ない点である。又DAT自動車御助力も大きかったがDATのTは竹内先生のイニシアルであるのを見ても御援助の功績に報いた現れが伺われる。

その他第一次世界大戦中高知県が県営第二発電所建設に当り新改村に逆サイフォンを設置するとき資材難で鉄管の使用が出来ず全く行詰りになった。このとき先生は外国に木管サイフオンの使用例のあるのを挙げて此れが採用を県へ提案されたので此の方法が実現し昭和八年現在の鉄管サイフオンに取換えられる迄十五年間も耐用された。

又土讃線鉄道の計画があったときもトンネルが多いため真先きにその電化すべきを熱心に説かれたのも先生であり世人は今頃になって判ってやっとな様な次第で先生の構想は十年も二十年も進んで居られた。斯の如く時代に魁けてその構想を実現して行くのが竹内イズムの神髄である。竹内イズムは永遠に母校のモットーであらねばならない。

母校の五十周年に寄せて

(大・10・3・機)

畠 中 福 泉

時は昭和三十七年五月早くも母校は創立後五十年、この長き歳月を経て愈々盛大に益々発展の途上にあり、恩師を始め現職員並に同窓生在校生と共に慶賀に堪へません。

茲に記念誌を刊行せられるに当り、思出の一端として敢て拙文を寄せる次第です。

先づ自己紹介ですが、私は大正十年第五回機械科の卒業で、同年五月より名古屋の新三菱重工に入社、爾来幾多の迂余曲折を経て去る三十一年十一月末、定年退職をし只今は中小企業に勤務中です。

私が新三菱で三十五年有余の、人生の約半ばにも及ぶ勤労生活を送っていた間に、高知の地に於ては母校より年々歳々優秀なる卒業生を実社会に送り出している。そしてその数や実に七千人を越え社会に貢献した度合も又甚だ大なりと言わねばなりません。先生方の御苦労御配慮の賜と感謝する所であります。

半世紀に亘る母校の歩みの中で特筆すべき事柄としては、学校所在地の移動と経営形態の変化だと思ふ。

学校は元高知市北与力町一丁目であり、その後順次発展に伴い地域的に広大な土地を求めて現在の棧橋通りに移転したものである。

旧校に学んだ者としては矢張りお城のひざ元の北与力町がなつかしい。当時学校名は私立高知工業学校であり、その後将来の発展を期するため施設その他の一切を挙げて県に無償移管し、茲に高知県立工業学校と改称されたものである。

創立当時よりの校長は吉崎七次郎氏であり、県立となってもずっと校長であられた。

今思い出す在校中の先生方とその受持は次の通りであった。

吉崎校長(修身)

森沢教頭(修身)

浜田先生(国語地理)

溝口先生(歴史) 山田先生(英語) 宮地先生(体操)

中村先生(化学) 島田先生(機械) 渋谷先生(数学幾何)

村井先生(英語) 島山先生(図画) 大本先生(電気)

(化学) (物理)

又、私等の入学当時は、科目が機械、電気、応用化学の三科で、別に中等学校卒業生を入学資格とする別科採鉱冶金科があった。

修学年限五ヶ年の内、初め二年間は全員同じ教育課程で予科と称し、後の三年間を各自希望する科名の専門教育を受ける本科とであった。

私は運動神経が鈍かったせいもか体操が不得手で、従ってよく体操を休むので、宮地先生のみこが悪く点数も良くなかった。このために平均点が下廻って損をしたものであった。

同じ組で機械体操の下手な者に渋谷一清君が居た。同君は秀才であったか既に他界されている。

私は幼少にして父を亡くしているが、学校に於て所謂教師としてでなく親父として近親感の持てた先生は浜田溝口両先生であった。

所が在校中に浜田安太郎先生が病死されてがっかりしたものであった。その後には島田比奈先生を亡くした。先生は大変ユーモアに富んだ明るい感じの良い人であった。

同期生でも追々と先立つ者が出て、今では果して何人残っているやらその消息を知るに由ない現状である。

本紙を借りて物故された先生方並に同窓生諸君の御冥福をお祈り致します。

終りに臨み、母校の弥栄を三唱し併せて校長を始め先生方の折角の御自愛御健闘を御願致します。

昭和三十七年九月十八日

創立五十周年を迎えて

(大・11・3・電) 大 倉 要

本年は母校の創立五十周年を迎え、目のあたりこの隆盛を見得ますことは誠に隔世の感がありまして只々お目出度いと申し上げる外ありません。私は大正十一年第六回出、するともう四十年を経たことになり、計算して初めて自分の「古さ」を知る反面、「ホンのこの間のこと」のようにも感じられるから妙です。この間、何等貢献も出来ず無能な人間として生きて来たことが実は恥かしく、友人や周囲の人々にお詫びせねばならないことが沢山あるように思われてなりません。

しかし私は母校を出ていて良かったと思うことが度々ありました。現在もそうであります。之は追憶というものが、古ければ古いほど楽しく良い面を表現するせいかも知れませんが、別の意味で母校には他に比類のない優れたものがあつたからではないでしょうか。

先づ私達は非常によい多くの先生を持つことが出来たことでした。私達の在学中は私立であつたが、校長以下稀に見る立派な先生の集りであつたと信じています。そして自分が年を寄せるに随つて益々その偉さとか良さが想い起され、更に校主竹内先生の、この重大な踏み出し第一歩に対する並々ならぬ意図が窺われ、感謝と敬愛の念に満たされます。

中には先生から大学教授に或は大学へと進まれた方も相当ありました。次に非常に優秀な生徒の集まりであつたことです。そのことは当時私達の一つの誇りでありました。例えば卒業後直ちに高工、高校(中には一高もあつた)へ、更に東大、早大、慶大へと進学し、中には半ばにして亡くなった気の毒な人もあつたが、多くは今日社会の相当高い層で活躍せられていることを見ても頷かれる所であります。特に寺尾参議等は異数の存在と言えましょう。又、進学しなかつた人々も、鍛えられた素養を生かして成功せられた多くの事実は何を物語るものでしょうか。

當時を顧みるに学校は相当きびしい入学試験で生徒を厳選し、之を訓育す

るに得難い良い先生を配して、実業校には珍らしく、普通学科を充分に修学させ、実習面を見事に生かしたことにあつたと思います。私立であつた関係かも知れないが、そこから生れた校風は健康な自由と明るさ、進取的というよりむしろ進歩的なものであつたと感じて居ります。特に若い先生達とは兄弟のような変な気持ちにさせられて、随分御迷惑をかけたものでした。

次には良い同窓会があるということです。この校風から生まれた同窓会だから、自ら相互の親愛を深め、先輩は後輩の面倒を見、又、後輩は先輩に頼るといふように、次第に強く広く結ばれたものと思ひます。所謂封建的な序列でなく校風から生まれた自然的な成行と言えましょう。私自身としても同窓だと聞くと即座に警戒心が解けるから不思議なものであります。

私達が卒業後数年ならずして県立となり、校舎も北門筋から潮江に移転され、更に第二次世界大戦には戦災を蒙り、一方生徒は多くなる、戦後の新しい時代風潮は大波の如く押し寄せる等幾多の大変革に遭遇したので、之等の影響には順応の已むなきものが多々あつたことであらう。然し同窓会としては過去五十年を更に未来を通じ一本の筋の通つて居る状態所謂揺がない伝統が望ましいのであります。

最後にどうしても忘れてならないことは、五十年前に母校を創立せられた校主竹内綱先生並に明太郎先生の偉大さであります。この日本のさいはてのような高知県に、郷里の故とはいへ、当時全国に例のない「私費を以て工業学校を創立した」ことであります。而も普通中学の何倍も費用のかかる、全然儲からない事業であります。之は何といつても先生達の郷土を、更に国を愛する已むなき深い心からだと思つたのであります。当時日本の教科書「修身」は忠孝が大本であり富国強兵を目標としたものでした。この国民思想が高調し過ぎ今次の敗戦の大苦杯となつたではないかと言わざるを得ません。この最中に於て先生達は「工業立国」という実に深遠な構想の下に、自ら先驅者となり、試練の矢面に立たれたのであります。その崇高な姿には自ら頭が下がる訳であります。斯の如く深い洞察から実行に移るには非凡の理知と勇氣が要る事でありまして、眼前の利に溺れ易い現代人に警鐘を打ち鳴らして見ると見るべきではないでしょうか。

日本は今やアジャ唯一の工業国となり、その発展には先進国も瞠目して居ると言われて居ります。然し吾国は敗戦のために非常に立ち遅れて居り、全面的に世界水準に追い付くには長い時と絶大の努力が積み重ねられねばならない苦難の道が横たわつて居るのであります。思いをここに致す時、吾々は今一度母校の歴史を振り返り心構えを新たにすべきではないでしょうか。時間のないまま面白い事も書けず、自然にこんな駄文になつたことをお詫びし併せて皆様の御健斗をお祈りして筆を擱く次第であります。

想　い　出

(大・12・3・技鑄)

加　藤　秀　季

創立五十周年と云う輝かしい記念日を迎え、此の意義ある日に落成した記念図書館、此の図書館の元の起りを考えた時、私の胸にグッとあるものがよみがへり初代校長故吉崎七次郎先生の面影が早馬燈の様に浮かんで今更ながら頭がさがります。

昭和三十七年度より長期計画で機械、工芸の実習工場及び校舎の改築が計画されている様で、これから段々と充実してゆく姿を考えると心から嬉しく永く務めておつた事の幸福をつくづく感じます。

そして静かに眼を閉じて四十年頃前を追想すると痛ましくもあれば、又、悲壮でもあつたいろいろな出来事が次から次へと脳裏に浮び出てうたた感慨無量な物がありますが、それを文にまとめる事の不得手なこの私です御察し下さい。

大正十一年十一月二十五日(風が強くすくく寒い日)今の天皇陛下が皇太子の折、本校に御出になり市内の女学校の生徒の体操及び本校の実習工場を御見学になられました。実はその当日迄の準備には係の者はとても忙しく、又いろいろ気を配る事が沢山ありました。

機械科の機械工場は工場通路の上を機械を廻すベルトが幾条も通つて居るのでもし皇太子が通行中ベルトが切れてはと心配しその方法に当時の科長

島田先生は幾晩も眠れない夜があった様です。

初めはもし切れても皇太子の御身体に触れない様ベルトの下全体に金綱を張ったらと云う話も出しましたが、結果は全部のベルトと継目の皮を取替える事にきまりました。

今はベルトを継ぐ金（アリゲーター）があり継ぐのに割合楽ですが当時は小さな靴（約巾十ミリ、厚さ五ミリ、長さ五十センチ）で継ぐので相当熟練した人でないと完全に継ぐ事が出来ません、それを全部新しく取替え、綿密に継ぎ合わせましたが、まだ心配でした。当日無事皇太子が御通過なされた時は私共でさえ、ホッとしたのですから、責任者の島田先生の心中はどのようであつたらうと思ひ、気の毒でした。当日は技術員養成所の生徒及び五年生の一部が実習している所を見て廻られました。今では陛下にほんの近くで御目に掛かれる事もありますが、今から四十年前では、とてもそんなことは想像もできませんでしたので、殿下に近くで御目にかかれた気持はとても嬉しく今でもその当時のことを考えると感激すら湧いて来ます。と共に時代の移り変りに驚きます。昔は機械科は技術員養成所の生徒を主体とし、中学三、四、五年の生徒の実習の折に手伝わせ、生産実習もやっておりました。主に焼玉エンジンや旋盤、艶出しロール等を製作しておりました。エンジンの種類は五、六、八、十、十二、十五馬力でどの機械も優秀で評判が良く相当の台数を作り、その内で八馬力は特に優秀で台湾迄進出しました。（三台）主な販売先は幡多郡清水や、宇佐、ミマセ等です。設計は故島田、森岡両先生で製作の方は池田、久保先生の優れた力があつたからだと言へながら、各先生方の偉大さに胸を打たれます。発動機を作る各馬力の木型も揃えてありましたが、昭和二十年七月四日の空襲で全部焼けてしまい、今だに残念でなりません。

終戦後の混乱が一応落ちついてから前の様な発動機でも作つたらとの声がポツ／＼ありましたが、予算の関係で六馬力だけ作る事になり、その木型を作りましたが、教科の都合と技術員養成所の廃止でその運びにならず、二、三の鑄造品と木型が鑄造工場の片側に、ありし歴史を物語る様にひろげられてあります。

旋盤も十二、三台、作つた様に思いますが、型が古くなつたり生徒の実習用には適しない様になり、現在六尺一台、八尺一台、十六尺一台がいます。昔の面影を残し、古いながらも、生徒達に愛され実習に使用されております。次々と新しい機械が購入されると、やがて姿を消す時もあるだろうと思えば時代の流れとはいえ淋しい気も致します。

然し機械工場にでんと坐り古い型ながらも堂々とした十六尺旋盤だけは、永久に残したいものだと思つています。

私立工業最後の卒業生

（大・12・3・化） 北 村 正

予科一年生として入学したのは大正七年だったので、丁度第二回の卒業生を出した直後であつた。在校生三百五十名背が低かつたので遠足の時などいつもピリを承つていた。紺の袴に白靴下見事靴ははいたが黒カバンを肩にした今想へば笑止な姿だ。それでも当時は工業勃興時代で入学率も三百六十名に九十名合格と四人に一人と云う難関だったので正帽をかぶつた時は嬉しくてたまらなかつた。

当時は機械、電気、化学の三科しかなく、数々の想出がある。年に一度全生徒の個人別学科別に成績表が印刷され配布された。現に友人の常石猛君が保存しているが面白い記録で今だったら生徒会の大問題になり兼ねない。先生の家庭訪問も必ずややつて来た。私は学校では茶目だったが、家庭では実に真面目だったので主任の先生に君は二重人格だといつもひやかされた。校庭が極度に狭かつたので総合の運動会と云うものはなかつたが五年生が県外旅行の間に一泊旅行があつた。当時は乗物がなかつたので草履やわらで越知、安芸、美良布など全部徒歩だった。七月になると水泳があつた。体操の一部で正科だったので柳原へ毎日連れて行かれた。夏休がすむと遠泳の大会が催された。全生徒が棧橋から巢山を廻つて東孕から棧橋に至る七十二町四時間が合格だった。舟には前合格者や先生が乗つていて一々落伍者を

拾い上げ記録を取り数日後学校の掲示板に発表されたが合格者はいつも一割に満たなかった。体操も本科生になると銃を持たされた。退役の将校が配属されて来て軍隊同様の訓練が施され、年に一度は発火演習と云って四、五年生が空砲二十発位貰って一日中高知市周辺の山野を走らされた。勿論下級生は見学と云ってそれについて行軍だった。又、柔道、剣道も、正科で学校には施設がなかったので武徳殿に通った。之も年に一度紅白試合があった。一年の時、剣道で五人抜いてタオルを数枚賞品に貰った事がある。相撲は伝統的に強かった。校内の運動設備として何一つなかったが土俵だけは立派なものがあった。野球は大正六年頃から同好者が集まつて練習していたが、大正八年初めて対校試合をした時に何十対零で一中に負けた。其の他に庭球部もあったが、いつも負けてばかりいた。

毎年五月四日には工場開放と云って男学生のバザーが行われ実習で作った火箸から石鹼などよく売れた。

予科本科を通じ最も記憶に残る事が二、三ある。その筆頭は三年の時、映画見物を許された事だ。恐らく四国でも早かったであろうが校長始め諸先生の英断には全校生徒が双手を挙げて喜んだ。其の後他校の羨望の的となって幾年も其の誇を持ち続けた。自由を尊んだ校長竹内綱、明太郎先生の残した校風が其の伝統を遺憾なく發揮した先見の明は今でもしみじみと味われる。

四年生の時島田比楽先生が洋行した。今でこそ簡単に外遊出来るが四十数年前私立学校の一先生を海外に視察に送った学校は実に偉いと思う、時間を守って良く学びよく遊べと帰朝早々の御土産話は実に愉快で今でも私は忠実に守っている。

第三には同窓親友の大石彦介君が大正十二年初めて出来た高知高校に一番で入学した事だ。当時其の成績は全国高校でも首位だった事をきかされて意を強くした事だったが不幸病を得てたおれたのは残念でたまらない。

こうして私は色々の想出を残して大正十二年三月第七回卒業生として実社会に巣立ったわけだがこの年四月県立になったので自分等は私立高知工業最後の卒業生と云う事になる。星霜疾に四十余年同窓の友も次第に少なくなっている。終戦後は非才をも顧り見ず同窓会副会長として及ばず乍ら学校にも親

しんで来たが気が付いて見ると最早とうに隠退の時季は来ていた。ここらで後進の方にバトンを渡そうと思っている。(昭・37・9・30)

犬はやっぱりワンワンと吠えた

(昭・2・機) 森 田 久 雄

——吉田茂先生訪問記——

数年前のことだが同窓会館建設の件で会長吉村重隆氏と寺尾豊先生(当時参議院副議長)それに戸梶校長と私の四人で大磯の吉田先生宅を訪問した事があった。

吉村会長は旧知の仲だし寺尾先生は政治家同志であり、それに都会ずれして居る私は別として只素朴篤実で鳴る戸梶校長だけはいささか緊張していた。

門を入ると海岸までつづく庭園が松林と共に視界に拡がって居り質素簡彩な家屋が左手に見える——と突然数匹の西洋犬が私達めがけて一せいに吠えた。勿論檻に入れられていて別に危害を加へられる恐れはないが、これからかつての大宰相吉田先生のお目通り願う間あいを縫っての出来事故、流石の私も瞬時慄然身のひきしまる思いがした。それに数犬が異口同音にあるじの紹介の労をとる如くワンマン・ワンマンと吠えたりするように聞えた。

来意を伝へると早速書齋兼応接間風の部屋に通されたが、そこには袴をきちんとつけられ例の白足袋、葉巻姿の先生が莞爾悠然と待っておられた。流石貫録充分である。

これから愈々この高名な国際的大政治家との対面が初められるわけだ。実はこんな文章を書くつもりなら室内の調度品など記憶しておくべきだったが、今は何も思いつかない。ただ外交官時代に蒐集されたと思われる珍逸重厚な品々が整然と並べられていたことだけを憶へている。

用談は十分間位で終り御挨拶して椅子から腰を上げかけると「君たちゆっくりしてゆきたまへ。次に約束した人があったが、あまり会いたくないの

で断わらせたから」という事で自ら立って今度は別室の食堂に案内してくれ
た。そして果物とケーキの饗応を受け乍ら、吉村さんとは懐旧談、寺尾先生
とは政治の話が取りかわされ、話ははづんだ。

吉村さんが「竹内明太郎先生にはよく馬鹿野郎といわれましたよ」という
とすかさず「人を馬鹿野郎というのは血統かナ」と先生。

寺尾先生「今の議会は野党が三十分質問すると大臣の答弁が四十分もかかる
という調子で議事の進行が仲々運ばない。閣下が総理のときは「そんな質問
にはお答え致しません」という具合で、五分間ですんで非常によかったー」
それ以上は言わせず「だから五次まで続いたんだらう」と茶かす。

葉巻は常に離さず終始ニコニコし乍ら不躰な質問にもつばをはづさず答へ
てくれる。正に座談の名匠である。

「カメラマンに水をぶつつけた話——あれは本当だよ。フランスのコティ
ー大統領にも褒められたよ。チャーチルは羨ましがって居た。

「俺だって新聞記者の無礼には我慢出来なくてステッキでぶん殴ってやる
うと思う事は度々あるがイギリスではそれが出来ないのだよ。君はよくやっ
たとネ。」と云ってネ……「しかしあんな事はもう一度やれといっても出来
ないネ。」といった調子。

「金梧楼がネ。テレビ対談の時だよ。総理と呼んでいいのか先生といへば
いいのか。どう呼べばいいかと聞くから、ナーニ茂公にしておけよと云って
やつたら、あいつすっかりあがっちゃって……」と云って苛々大笑する。

近づき難い貴族臭味もなければ傲岸不羈の片鱗などみぢんもない。寧ろ孫
を相手の好々爺という風格で幼児ならお祖父ちゃん／＼と馴ついで離れない
だらうという感じを受けた。いごっそうは悪と不正に対決するとき初めて爆
発するのではなかるうか。

すっかり先生のペースに捲き込まれ時の経つのも忘れたが、帰る時は、わ
ざ／＼玄関まで送って来て下さった。「背中がこそばかった」とは戸梶校長
の後日譚。それは玄関迄の廊下を歩いてゆく間戸梶校長が一番しんがりだっ
たからで、すぐうしろへ吉田先生がついて来られては誰しもそんな感覚を全
身に受ける事だらう。

会談は終わった。私は只一回の面接で吉田先生に惚れた。汲めども尽きぬ豊
かな人間的魅力に私はすっかり酔った。

今は心身共にすっかりほぐれて取っておきの特級酒に酔ったような陶然た
る格好で帰路につくと、また例の犬達が私達の後姿に吠えかけて来た。しか
しその声はもうワンマンとは聞えない。

犬はやっぱりワンワンと吠えて居た。(完)

記念誌発行に寄せて

(昭・五・機) 浜 田 勝 喜

開校五十周年記念式が、本年五月四日母校で盛大に行なわれたことをお喜
び申し上げます。在校当時を思うとき、しみじみと懐しい思い出が湧いてま
いります。昭和五年と云えば、軍事教練こそありましたが、のんびりした時
代を思い出します。吉崎校長先生の懇々とさとされる様な、独特の修身講義
の時間に戦争は絶対に無くならんですぞと云われた事が、三十年の年月を経
た今日深く印象に残っています。戦前の黄金時代から、戦時中の苦闘、苦難
に明け暮れた戦後の数年を体当りしてきた、同窓の皆様を思うとき、感慨
深いものがあります。また昭和五年と云う年は、就転難の年でもありまし
た。先生方が非常に心配して下さいましたものでした。校長先生は御自身で色々
配慮して下さいましたことが嬉しかったです。

後で解ったことですが、卒業生先輩の御活躍、御尽力の大きいことであり
ます。三十余年大禍無く勤め得つつあることは、名門高知工業の伝統に培わ
れたお陰と痛感致しています。有為の技術者たらん者、徳性の涵養は勿論な
がら、倦まざる着想とフアイトこそ肝要であると信じます。

私が勤務致しております住友軽金属工業株式会社には、安岡要先輩(昭・
四・機・卒)が居られます。御仕事の方では部長の転責であられ、スポー
ツでは毎年のこと、本年度は第十五回東海庭球選手権大会で、壮年の部シン
グルス優勝、更に第十七回岡山秋季国体に於て、庭球一般男子ダブルス(中

野安岡組)で優勝し、愛知県庭球総合優勝をもたらすなど、母校のためにも喜ばしいことでもあります。後輩には東正幸君(昭三一機卒)昨年西内君本年鎮西君と、皆元気に張切って勤務しております。

とりとめなく執筆いたしましたのが終りにのぞみ、母校の御発展と、母校並に同窓会の皆様の御健勝をお祈り致します。

陸上競技部の創生記

(昭4・3・電) 坂 本 龍 雄

昭和三年は、野球は県下大会で優勝するし、相撲は全国大会で横綱をとつてくるし、母校運動部の隆盛な時代であったが籠球部のできたのはその前年の昭和二年である。当時、五年生であった岩田、藤戸、伊藤、刈谷らの諸先輩が活躍せられた。

それを引継いだ井上、森木、笠井、岡本、村岡、坂本らが中心となり、昭和三年には、県内男子チームとして重きをなすにいたつた。そのため、宮地豊喜部長は秋の県下対校大会に、従来からの野球、庭球、相撲などの他にこの籠球をも採用するよう運動せられたがなにしる当時県下でバスケットボールをやっていたのは、師範、城北と母校の三校しかなかったため実現しなかつた。

そこで、宮地部長は母校に陸上競技部をつくることを決意せられ、森木、坂本らに相談せられた。両名たちもせつかくの籠球が対校試合に採用せられないとあつては残念至極であり、一つ県下陸上界のダークホースとなつて他校に泡をふかささんものと喜んで参加することになった。

しかし、それからが大変である。部員を集めようとしたが目ぼしい人は既に他の運動部で活躍中であり、野に遺賢をさがす類であつた。また練習期間がないので昔とつた杵柄式の人を集めた。それでも、コーチを受け少しでも応急の間に合せようと、これも宮地部長のはからいで東京農大の森氏(当時ハンマー投では全国ベストスリーの人)を招いて夏休み中練習をした。しかし

この森コーチのお得意がハンマー投であり、そのハンマー投が対抗試合の種目にはないというチクハグもあつた。また、第一練習をしようにも、当時の母校にはグラウンドがなかつた。夏休み中は小津の高知高校のグラウンドを借りたが、新学期とともにあの狭い北門の校庭に斜に直線トラックを画きスタートダッシュのみの練習をしたものである。

てんやわんやのうちに試合の日も迫り次の陣容をつくつた。

一〇〇米	5年	森木 丈夫(現東芝三重工場)
槍 投	3	森本 米稔(現関西電力)
円盤投	5	沢本 豊(現母校教諭)
	5	坂本 龍雄(現関西電力)
	4	橋田 雪夫(現東京電力)
砲丸投	5	坂本 龍雄
	4	竹崎 一(現別府観光協会)
棒高跳	4	橋田 雪夫
走巾跳	5	森木 丈夫
走高跳	5	森木 丈夫
	4	橋田 雪夫
四〇〇米リレー		森木、森本、沢本、坂本

そして、その結果、

棒高跳	一位	橋 田
円盤投	一位	坂 本
	二位	橋 田
砲丸投	二位	坂 本

計二十二点をかせぎ、団体三位で見事ダークホースの役目を果たしたものである。

その後、母校陸上競技部から団体選手が何人も輩出するという隆盛さを聞き喜んでいる一人である。

(なにしろ古いことであり、記憶ちがいのある点はご容赦下さい。)

平凡な思い出と五門会ごもんかい

(昭・五・化) 村 田 寅 次 郎

私はもう五十才の壁を破って孫の二人もあるおぢちゃんです。まだ童顔だった工業の学生時代三十五年も前の事です。我々応用化学の生徒は全員十四名でした。お互にすぐく仲良しで本校創立以来のチームワークの取れたクラスだったと思います。たしかに四年生の春でしたか初めてのクラス会を鷲尾山でやりました。当時はあまりクラス会など無かった様です。山頂では大いにはしゃぎ声あり、活弁あり、雄弁ありおまけに福引まであって一日を楽しく愉快に遊んだのは良かったが、偶然登り合わせた上級生に敬礼をしなかつたとか生意気なとかで、翌日五年生の教室へ全員呼び出されてキタワレたことも今は懐しい思い出の一つです。

それからも気候の良い季節の土曜日など芋会と称してクラス会を時々やりました。藤並神社入口の屋台の焼芋屋のオンチャんに、朝登校の時五十銭位の焼芋を頼んで置くと公園の三の丸まで正午過ぎには運んで呉れる、それを頬張り乍ら半日を楽しんだのも此の間の様です。卒業も近づいた頃たしか流行歌「摩天楼」の盛んに歌われた頃でした。サタンクラブと称して、戦災に焼け残って現在もある大川筋豊栄橋の北詰の駄菓子屋の二階を二部屋借りて各自が何か一つづつ娯楽品を持寄ることにした。碁盤あり、ギター、マンドリン、カルタ、トランプ等々当時の学生の娯楽は全部揃って居た。出勤簿まで作って学校から帰りには一応倶楽部に立寄ることにしていた。もし寄らなかつたら翌日学校でパンを買わされたものです。卒業してもこの会を続ける約束して十四会を発足年二回雑誌「軌道」を刊行することにきめました。去る者は月々にうとして、次第々に御互疎遠に成り勝ち第五輯まででストップに成った。戦災に会ったり外地引揚げの為め殆んどの会誌は紛失しました。が一昨年楠瀬君の遺品を整理中第三輯が発見されましたので、小生手元に保管していますがあの年令でこんな事が良く書けたと驚く様な論文、小説、随筆大した記念誌です。

戦争等の影響で故人が多くなり、この十四会員も現在八名に減り、北海道大阪、神戸、八幡各一名、県内四名の淋しいものですが、この内工学博士も一名出ました。もう停年の氣に成る年令に成り誕生日会を持寄りでやるうじやないかと云う話も出ています。

五門会と云うと一寸変な名ですが、昭和五年に北門筋の母校を卒業した全員の集りです。

終戦間もない二十一年七月中旬でした。十六年間散々に成っていた同窓が復員したり、引揚げたりして高知へ大分帰って来たので、一度集ってはとだれかの御世話で、鏡川畔の旅館幸楽で第一回をやりました。当時はまだ酒など仲々手に入りません、県庁や税務所に関係のある者は清酒を、我々は白やらスマンを持寄っての集りでした。あまりの懐しさと随分変わったお互の姿に一同感慨無量、お互に援け合って終戦後の苦しい生活から何とか立上ろうと励まし合いました。関頼次君を会長に推し以来十七年、毎年一回の親睦会を続けて来ましたが、会員相互の連絡を密にし現在住所不明は二名しかおりません。何かの時、母校との連絡にも非常に便利ですし、この会はこれからも尚一層有意義に続けて行きたいと思っております。

附記

記念誌に載せる程のことではなく、誠に恐縮しておりますが、昔の素朴な学生生活の一コマも、又何かの記念かと思ひ、又、五門会の様な会を卒業生全部のクラスが持てば、縦にも横にも同窓会としても学校にもどんなにかプラスであり、各自の事業面にも便利かと思ひまして拙筆を走らせ失礼致しました。

同窓会大阪支部長として

(昭・五・化) 安 岡 一 郎

このたび並川前支部長の後任として同窓会大阪支部長を引き受ける事と相

成りました。

大阪支部は初代支部長、現和光電気専務取締役松村幸兵衛氏が中心となり創設されまして、以来同氏の四十年にわたる御努力に依り運営され今日の大発展を遂げたものであります。同氏の大阪支部発展のため残された業績は実に高知工業高校同窓会史上不滅の光として永久に輝き続けるものと存じます。

時あたかも母校創立五十周年を迎えた記念すべき意義ある年に当り、はからずも不肖私が支部長の重責を受け継いでたして前二代の名支部長始め先輩諸兄の築きあげられた立派な仕事を運営出来得るものか否か、いささか危懼の念を抱いておりますが、幸い副支部長に新進気鋭の川島仁助氏北山知旨氏の適材を得ましたので、両氏の御支援助と幹事諸兄の御同情ある御協力に依りまして微力ではあります、任務を全う致し度いと存じております。

高知工業高校は郷土の生んだ大偉人竹内綱、同明太郎両先生に依り最も特色ある工業学校として創立され既に五十周年を迎え広い年令層と共に創立の精神を受ついで数多の人材を社会の各分野に送り、大阪支部も会員六百余名を擁する大支部に成長しておりますが、最近ややもすると、同窓会々合に出席者が少いように見受けられます。互に若き日に特色ある専門の教育を受けられた親近感で睦み合っておるこの会合に出来得る限り御出席下さるよう支部会員各位に御願ひ申し上げます。

なお同窓会は母校と一体となって発展すべきものと存じますので、今後この点に心がけて微力ではありますが、同窓会発展のため全力をつくし度いと思っておりますので、母校並に同窓会々員皆様の御援助を切に御願ひ致します。

秘 密

(昭・8・7・電)

宮 地 耕 作

家をたてた時は餅を投げることは今でも盛にやっているが戦前は俵投げも

よくやった。

今はあまり見かけなくなったので若い人は知らない人もあろうかと思うがこれは餅投げのあとで行なうのが普通。俵は外見は米俵とおなじだが中味はもみがらでその真中にお金や替え札が入っている。もみがらといっても一俵が二十キロ五貫以上もあるもので、餅投のときの女や子供らは場所をゆずって只遠くで眺めるだけ、元気な若者が数人組みを作つて力を合わせて自分の陣地迄引きずり込む。丁度運動会の棒倒しのように勇壮なもの。

各々の陣地に二俵三俵と積み重なっていくに従って競争意欲はますます上り俵ならぬ人間同志の引張り合いも見られるようになる。

これこそ土佐人気質丸出しの行事で大流行したのもうなずける。学校には必ず暴れん坊組がいる。私らはいつも隅に引込んでいる組だったので話題といっても全くない。話題を探すとすればこの暴れん坊たちの事しか出ない。

北門筋に校舎があつた頃、すぐ東側に高知市高等小学校が出来た。昭和六年頃だったと思う。例によって餅投げが盛大に行なわれた。校庭からすぐその有様がよく見えるので私等はじっと見ていたがじつとしていられないのがわれらのホープ暴れん坊たちだ。忽ち飛び込んで五、六俵を積み上げた。

これに味をしめて、昭和小学校の新築祝いにも大いに活躍、腕をみがき上げて、それからには到る所に遠征して自信をいよいよ深めていった。このことは学校外のことでもあるし先生方には全然気づかれてはいない。今度も大丈夫わかるまいと思つて行つたのが、土佐女学校だった。

帽子はかくしているで学校名はわからない筈だがどうして知つたのか「工業の生徒は頼母しいわね」と驚嘆の声を聞いてもう有頂点となり十二、三俵も積み上げて大いに面目をほどこした積りだったが「女学校へ立入るべからず」の禁制を破つた罰はおそろしい。翌日この事が訓育部へ早速知れてしまつた。

サー大変恐い恐い訓育部は宮地豊喜先生。似顔マンガの黒板ではいつも笑っているがあの目玉がギョロリと光つたら只ではすまぬ。呼ばれていったあの連中は……どうなつたらう関係のない私等が心配している内にようやく戻

されて来た。が一向に悲しそうな様子がない、かえってこちらの不審顔を不審そうに見ているばかり。これには私等もあせんとした。あとでゆつくり聞いた所によると「女学校へ入ったことは悪いと叱られたが、俵投げで得た金を全部慈善協会に寄付していたことは大変よろしいとほめられた」とのこと。

法を破った生徒か、善行の生徒か、丁度ヨットで不法出国した英雄の堀江青年と同じケースに学校も考えた末、これは功罪帳消しということの不問に付されたらしい、一般には公表されずに終わってしまった。

女学校立入りさえなくば表彰状ものだっただけにおいしいことでした。

思い出すまま秘密を公表する。

暴れん坊たちの氏名は発表しないが戦争で死んだ者もいるが大半は元気に活躍して母校の世話などよくしているの、知る人は知っているでしょう。

吉崎初代校長さんを偲んで

(昭8、土) 尾崎晴光

あのチンドン屋風の御帽子をかぶられた謹厳そのもの、先生の風格を偲び乍ら拙文を綴ります。

吉崎先生は昭和八年御勇退の筈ですから私達が最後の五年生として校長さん御みづからの修身科なるものの授業を受けた訳になります。

ある時「今日は一つ諸君の姓名判断をやりましょう」と云う事になって順次始められたが謹厳な先生のことだから夫々適当に賞め進んでいかれた。

偶々「次郎」さんが出て来たところ俄然先生は懇切丁寧に説明があり兎に角百点満点の名前であると云われた。

皆様御承知の通り先生の御名前は次郎の上に更に七が加わっているものだから限りなく秀れた御名前という次第……

ところが二三人おいて「一郎」さんが現れた。さっき次郎さんを賞め過ぎたので「一郎」さんが頗る影薄くなっていた直後だけにさあ謹厳な先生は

「オホン」と咳をされ困った御顔……
然しそこは流石落着いたもの……相手は頗る？純情な生徒諸君だったからさりげなく軽く次の番へ……
……大変つまらぬ事を披露して恐縮です。

開校五十年の歴史の内十分の一を過ぎた北門筋の懐しい風景
いかめしかった配属将校殿!!
既にして同級生の半数は戦歿や病歿して了った。

校友の諸兄よ、胸底深く收められた想出を五十年記念誌と共に引張り出してみようではありませんか。
最後に改めて吉崎先生の御冥福を祈り筆を擱きます。

きたえる

(昭9・機) 池上実

一学期の始業式が済んで間も無い或る日、「一年B組は五年生の教室へ集合」と云うお達しが有った。北与力町の旧校舍、南側一年生教室から北側五年二階教室へ、渡り廊下代りの簀の子板の上をのろのろ行く私達に「何をぐずぐずしちやる、早う来んか」と怒声がとんで来たが、それでも「ハイ」と呑気な返事をして「何ぞええ事が有るろうか」と後の方からのこのこ階段を上って行った私でしたが教室へ入ったとたん、ふるえあがった。「今度の一年はなっちらんぞ、これからうんときたえちやる」と級長らしい人からのお説教、まわりには竹刀を持った人が二、三人、机の上をたゝいて「おんしらあ、よう聞いちよけよ」と、どなられたのにはまさに驚きの一語でした。そして特に五年生に対する敬礼の厳正を諭されたものでした。

まだその時は最初だったので鉄拳の洗礼を受けた者はいなかったがそれ以来、休み時間に或日はA君、或る時はB君と云うように「五年〇〇科へ来い」と呼び出しを受け相違きたえられた者もぼつぼつ有ったように覚えてい

る。

その大部分の理由が「敬礼をしなかつた」「不良だ、女学生と遊んでいい」「煙草を吸いよつた」「映画にいちよつた」……(当時県下の中学校では日旺の昼以外は映画に行く事は禁じられていたが工業だけは特別な配慮のもとに土旺日も許されていたように思う)……と云つたようなものであつた。

どうやら私はお呼び出しも無く、一回もきたえられずに済んだものの或る日、禁を犯して映画、市内の鳳館で「紅屋の娘」をこっそり見に行った当時の四、五日間と云うものは、全くびくびくもんでした。その頃は教護連盟と云う先生方の目も光っていたので尚さらでした。「お父ちゃんの時分は」と高校生になった子供にこんな話をして、ぴんと来ないらしい。「野蛮人だナ」と云われるばかり……

それにしても最近の会社の「きたえ方」も変わったものです。私が当社に入社した頃は、部下に手を取って教えると言つたような親切な古参技術者はごくまれでした。古参者が昼食休憩中に自分の食事を大急ぎで済まし現場に行つて古参者の組んだ機械にゲージを入れて、いわゆる千分の何インチと云う「ゲージの固さ」を覚えたものですがそれが今はどうでしょう。

各工場毎に数名の「トレーナー」が居り曰くT・W・I「人の扱い方」「仕事の教え方」「改善の仕方」は勿論、本社へ訓練課の創設と相まって「部下が悪いのは上司が教えないからだ」と云うような考え方になってきています。私も当所に転ずる迄は工場にいて「トレーナー」の一人として監督者訓練や新入社員養成教育に携わっていた事が有りましたが、その昔、大きな何も云わずに唯、「スパナ取って来い」と云われて適当に大きさを判断して持つて行くと「まだ覚えとらんのか、こんなスパナが合うか」と叱られた事がなつかしく思い出されますが学校と云い、会社と云い「きたえ方」もいろ／＼変つたものだとつく／＼思います。

どちらが幸かは、昔の軍隊式の善、悪を論ずると同じ事になると思いますが、母校に学ぶ後輩の生徒諸君は、永久に先輩で有る私達の先輩になれないわけですから、偉そうに一言、云わして頂くとなると「高知工業の生徒なら

全員文句なしに採用」と云うように、よい生徒で有つて下さい。今年も就職は百パーセントでしょうが……私達の時は「工場へ行きよる」と言うはずい分女学生にも、もてたもんです。

ともあれ戦争のお陰で機械出の私が労務畑に変わり、二年程前から当所に勤務と云う事になったわけですが、工業入学の当時こんな仕事に携わるようになるとは夢にも思わなかつた事です。

職業柄、度々出張、訪問する高知県庁、並に県下各職業安定所の職員の中に、我が高知工業出身者が意外にも多いのには驚いています。所長、課長、係長として要職を占めている方が殆どで、大変な御協力を頂いて居り、求人難の昨今、大助かりしているのも母校のお陰と感謝して居ります。

高知へ出張の初、前に坐つている母校の「火頭、水身、両翼」の帽章をつけた学生を見る時、かつての三十年前の自分をみるようで、思わず「おんちゃんも工業ぢやつたぜよ」と話しかけ度くなる私です。

……母校の発展を祈りつゝ、

三七、九 終り

母校と旧師旧友の思い出

(昭・九・電) 山 本 虎 実

高知市北与力町の高知県立高知工業学校に入学したのは、昭和四年四月正に春爛漫の季節でした。

当時の学校の建物、校舎講堂、工場その他実習室等と、土手の生垣、東門の銀杏、南門の紅梅、正門北側小使室の南側に小さな築山があつて、蘇鉄を植えてあつたこと、その下に白地に黒字で、KEEP OFF THE GRASS と書いてあつた事などが思い出されます。

校長先生は名校長の吉崎先生でした。私達は「オトウ」と云つてお慕ひしておりました。オッホンと云ふ癖と朝礼の時、特徴のある敬礼の仕方が大変印象に残っています。

或る日の一時間目でした、勿論校長先生の修身の時間でした。朝礼の点呼

のときクラスで二人ばかり遅刻した生徒がありました。

先生は其の理由を聞かれました。一人は「ハイアノウ今朝自転車パンクしましたので遅れました」他の一人は「電車が故障しました証明をもらって来ています」と答えました。その時先生は「今後又卒業して社会人になっても、又色々の集会でも遅刻することは一番いけない、一番恥すべきことである、自転車のパンクも乗物の事故等も常に起り得る事であるから何時でもそれを計算に入れて、自転車途中でパンクしても、又乗物に事故があっても間に合ふ様に、常に時間の余裕をみて出かけなければならぬ」と申されました。此の御教訓はなんでも無いごく当り前の事ですが、大変味わいのあるお言葉だと思ひ自來三十年余立った今でも忘れる事が出来ません。

当時の下級生の英語の先生は村井（チャッチャ）先生でした。「リーダー」で「ジョージ」と云ふ少年が毎朝学校に必ず十分前に行くと言ふ所があつた時先生は「学校でも社会でも遅刻は勿論いかに余り馬鹿早く行くのも良くない、毎日きまつて十分前にきちん／＼と此の「ジョージ」少年の様に行かなくてはならない」と申されました。

これは前記校長先生の御教訓と共に意味深いものと記憶しております。国漢の先生に上島（ベク）といふ先生がおられました。大きな腹を突出して漢文を一節読み終つた後で教科書をパンと叩いて「ホラ漢文にはこんな良い事が書いてある。修身よりもずつと為になることが……」と云つたこと。岡林「キュウピン」先生が「みんなあ私の名前をキュウピンキュウピン云うが、キュウピンではない九敏の九は十に近いのでチカトシと云う……そんなことを云うといづれ……そうなるろう」

宮地豊喜（ゴリ）先生の「ユライ本校は竹内綱、明太郎両先生の……云々であるのである」等々は亡き先生方の思い出はつきません。四年生の初夏のある朝、うっかりしてシャツを着ずに上衣を着て登校し、朝礼後の体操の時上衣をぬぎかけて気がつき、あわてて釦を掛けて、風を引いていますからとことわつて体操をすませたまでは良かったが、先生の都合で一時間目が教練となり北村（ウナギ）先生が「おい皆上衣をとれ今朝は学校の周囲を走ることにする」どうも先生私のシャツを着ていないのを知っておるらしい。や

むなく今朝の手で「先生!!一寸風を引いておりますから上衣を着たままで走らせて下さい」と云うと「ウナギ」先生その手は桑名の焼蛤で「かまん走ったら治る」

結局私は級友の真白いシャツに交つて、唯一人骨体美を露出してテレ臭そうに走つたことでした。

五年生の冬四四聯隊で兵営宿泊した時、山本剛彦君（彼は今京都繊維大学の講師と大阪繊維工業高校の教諭でもあり、大変失礼かと思うが赦されよ）がどうも彼のベットの造り方が悪いのか毛布がずり落ちる。果てには彼も又落ちるそうしてついに私のベットにもぐりこみダブルで寝たまでは良かったが、その翌朝点呼に出るのに、たしかに整頓棚の下にかけてあつた帽子が無い、時間が無いので無帽で営庭に整列し点呼を受け、教官の前田大尉に叱られ広い営庭を一廻り走らされました。

内務班に帰り毛布を整頓したら、なんとさんざん探した帽子は毛布の下から出て来て、いやはやうらめしかつたこと。

昭和九年三月九日卒業式のと。証書を巻いて南門から出て、もう一度学校を振返つたとき、南門の西側の紅梅がチラホラ咲き始めていたのも印象的で又感激でした。

亡き友の想い出としては竹内隆君と山下功君が今尚彷彿として臉に浮んで来ます。

卒業後竹内君とあつたのは、昭和二十年の一月、所は「ビルマ」の首都「ラングーン」でした。卒業後十一年目始めてあつて、それが最後になるなんて神ならぬ身の知る由も無い事です。それは私がビルマ派遣軍第三十三軍の隷下の独立十五ヶ部隊のうち私の軍通信部隊と輜重部隊からそれぞれ一名下士官若しくは兵隊を遺骨宰領者として内地に出張させることになり当時上等兵の私は幸にも選ばれて中国雲南省の国境に近いシヤン高原の山中から「ラシオ」「マンダレー」「トングー」「ペグー」を経由して「ラングーン」にたどり着きました。毎日兵站司令部に通つて遺骨名簿や遺品整理をしていた時相棒の輜重の兵長には何時もサボられ一人で苦労をしていた時営兵勤務の竹内上等兵とパツタリ会つて、彼のお世話で遺骨係の六ヶ敷い軍曹殿、その日は上

気嫌で私の為に使役の兵隊二十名を動員し、〃本日遺骨整理の為立入禁止〃と張紙し、他部隊の将兵をシャットアウトして一日で今まで苦勞した書類が出来上ったのは、全く彼のおかげでした。

南「ベトナム」の首都「サイゴン」で内地に帰る船がなく、代表者が病院船で帰り私は陸軍病院の退院者と遺骨率領部隊のうち再び「ビルマ」に帰る者とで出来た部隊に配属され「メコン」河を逆上り「カンボチャ」の首都「プノンペン」に向う船中で又々偶然バッタリ会ったのが山下功君、彼とも卒業以来始めてでした。それから二ヶ月余「タイ」「ビルマ」と野に伏し山を行き常に彼と共に行動して友軍を追って旅行した思い出は忘れることが出来ません。

「ビルマ」の「モールメン」で竹内君の戦死を彼の戦友から聞き唯啞然としました。

その後、山下君と弾薬率領の決死隊に入り「ピリン」にたどり着き、英軍とのシタン合戦に参加しましたが、此処で又悲しいことに山下君は武運つたなく護国の花と散華していったことは返すくも残念でした。

五十周年記念誌の発刊に当り、駄文をつらねて大変失礼致しましたが、終りに諸先生方と同窓会員諸賢の御健勝と御多幸をお祈りすると共に、今は亡き恩師と同窓の方々の御冥福を心からお祈りします。

母校あればこそ

(昭・11・機) 井 上 正 一

母校五十周年記念行事の一環として記念誌発刊に際し寄稿の依頼を受け此の上もなき光栄と存じております。生来書くことは不得手何を書けばよいのかわかりませんが折角の御指名でもありますので、私の勤務しております日本鉱業KK白滝鉱業所の御紹介と同窓生の歩みについてのべる事に致しました。

当白滝は御承知の方もあるかと思いますが高知市の北方約百軒愛媛県境に接し、標高約八五〇米、従業員は約六〇〇で金、銀、銅、亜鉛、硫化鉄鉱を

産する県下では随一の鉱山です。入社当時は現在とは全く比べものにならない、都心に出るにも、二十軒以上歩かなくては乗物は何一つなく四国の「チベット」とも云われた程の山間僻地で、転勤者は昔の罪人が島流しにでも会ったと同様赴任の足どりは重く、又、就取者も途中でこれはひどいと途中からあとがえりしたと云う話も聞いております、かかる状態で世人には敬遠された山でした。かかる悪条件の山に入社した私はつとまるかどうか危惧されましたが、折角入社したからには母校のためにも、又社会の為にもと、あらゆる苦難にうち勝って今日まで頑張ってきました。その甲斐ありしか、今では山許までバスが運行し全くみちがえる様な立派な鉱山町となり、食生活においても高知市内の生活と大差はありません。それと昭和二十七年頃から同窓後輩諸君がぞくぞく入社し現在ではその数八人となり非常に心強く思っている次第です。

慾を云へば山なるが故に都会の如き楽しみ遊ぶ場のない事が残念です。然し時折都会に出てすべてを忘れて楽しい一時を過す開放感、又格別なものがあります。

同窓会を結成して四年位にしかありませんので特別な活動は致しておりませんが母校関係或は同窓生に何か事あれば全員相集い、色々と協議しその決定にもとづいて行動を共にしております。この外年二回の定例懇談会をもちお互に胸襟をひらいての談笑、宴高潮に達するやそれぞれ自慢のかくし芸をだし、最後に校歌合唱、母校の発展とお互の健康を祝し今後の団結融和を約し開散、全く楽しい限りです。

在山の同窓諸君はあらゆる分野で母校のためたゆまざる活躍を続けておりますのでせいぜい御指導御支援をお願い致します。

昔から土佐人は「ホラ」を吹くのが上手と申しますが、私もその一人、ここで一寸「ホラ」を吹くことに致しましょう。然しそれ程の「ホラ」でもありませんから御安心下さい。

当白滝は風光明媚で春夏秋冬都会では味うことの出来ない全くの別天地です。春は溪谷の清流一面のつっじ、筆舌につくし難い眺、夏はこれ又軽井沢を思わせる避暑地として此の上もない限り、秋はすみきった青空、見わたす

限り一面の紅葉、冬はこれ又見るからにすばらしい銀世界と樹氷、百聞は一見にしかず、諸先生方、同窓諸賢ともあれ一度御来山下さい。待つております。これで私が山男として根をおろし二六年有余、山で頑張っているかおわかりになった事と思えます。ろくでない事を記しまして失礼致しました。不悪御容赦下さいませ。

最後に母校の発展と諸先生並びに同窓諸賢の健康と御幸福を祈念致し私の駄文を終わります。

思い出の断片

(昭・9・3・化) 今 原 旭

私が母校に入学したのは昭和四年であった。当時の工業学校と云えば勿論北与力町の旧敷地のものであるが、高知の中等学校(現新制高校)の中でも一番むつかしい学校とされ表門や、玉砂利を敷きつめた正門通りは両側の繁茂せる樹木の間、両竹内先生の胸像も見え事実一種の気品があったように思う。

校長は初代の故吉崎七次郎先生、教頭は故中村惣太郎先生であった。工業学校に入学したのも多分に父の意見の影響で、当時を振り返って考えて見ても「我将来工業界に雄飛せん」との青雲の志があったかどうかは疑わしい。至極のんびりしたものだ。

別に裕福と云う程の家庭でなくとも、又世間が不景気と云われていても今ほどガツ／＼してなく、乏しくともすべてにまだゆとりのあった世相のせいかも知れない。

その点スペースと云うものがトコトン究明され価値判断される激しい生存競争下の今日に於ては、若い人達の物の見方、考え方もとかく現実的にならざるを得なく、いきおいゆとりとか夢が少くなるのではないか。毎年入社して来る新入社員に接する度に考えさせられる。

入学当時の在校生は六〇〇人程度昭和九年の卒業時で、たしか七五〇人位

であったと記憶している。ともかく今日の盛大さには比すべくもない。

三年生頃まではずいぶん成績が良すぎて？担任の先生方には学期末毎に御心配をかけ、特に深田先生には入学当時から大変御世話になったが、考えて見ると御礼も申し上げてなく誠に汗顔の至りである。

五年生になってやっと勉強のコツを覚え興味も湧き、又就職の二字に奮い起った次第である。

思い出せば当時の学校の何もかもがなつかしい。現存しないからよけいに思うかも知れない。せまい校庭も、緑の葉の繁った土手の生垣も、北校舎二階の陽あたりのよい五化の教室もみんな今も尚、我々の頭に生きています。

昭和何年であったか母校出身日大の杉本先輩がオリンピックより凱旋された時のことである。同先輩の歓迎レセプション？が校庭で催されたが朝礼台の上で吉崎校長が杉本先輩をまるでかかえるようにして挨拶されていた慈父の如き光景が今も尚記憶に残っている。

昭和八年の晩春の候であったと思うが火災で焼失した潮江天満宮の再建落成式の当日、俵投げ(正しい呼び名は知らないが、餅投げと共に行なわれるもの)があった。誰が主謀者であったかは知らないが柔道、角力部等の荒武者が中心となり放課後出かけたものである。

他校の出勤はなく日焼けした筋骨逞しい土方や仲仕の怖いおっさんに交って奮闘これ努めた結果三十二俵を獲得(実状は学生に花を持たしてやれとの怖いおっさん達の情が多かったが)戦果をどうするか鳩首会議の結果、軍に献納しようとする事に衆議一決した。

そこで観衆の中にいた在校生を総動員し、各人俵を一俵づつ担がして夕闇せまる市の繁華街を一行縦隊で三十二俵をつらね、意気揚々と見事なパレードを追手筋の聯隊区司令部まで続けたものである。

「どこの学生ぢやろ・工業の生徒ぞね！」との市民の讃辞を聞えぬふりしてまさに得意の絶頂であったが、翌日の高知新聞に早速デカ／＼と大きく掲載せられ「目的は良いが手段が悪い、諸氏はもっと大事な身体である」と吉崎校長先生に大目玉を戴いた。

おとなしい学年の我々が慈父の如き吉崎校長に心配かけた唯一つの武勇伝

ではなかっただろうか。今も尚、記憶に新たなる思い出となっている。

昭和八年五月我々が慈父の如く慕った吉崎校長先生が後進に道を譲るとかで突然御退職なされ、六月頃だったか高知駅頭に御見送りした事も忘れられない記憶の一つ、従って我々は在学中に二代目の校長故松本政良先生の時代となり、同先生の初めての卒業生となったわけである。

先般同窓会員名簿の御送付を戴き大変驚いたことはなつかしい恩師のほとんどの方が御他界されている事である。

我々昭和九年卒の化学科諸兄も十七名の人員からもはや十二名を数えるのみとなっている。

三十年に程近い歳月の流れ、又我が齢を思えば当然のことかも知れないがそれだけではすまされないものがある。

謹んで御冥福を祈る。

戦前十数名を数えた当社の同窓生も現在は戦前派は小生一人、三十三年頃からぼつ／＼新人が入社され現在総員八名来年には十名になる予定です。

最後に当社同窓生一同に代りて母校のためまぬ隆盛発展を祈り駄文を終り度いと思えます。

思いつくままに

(昭和11・3・化) 川 田 義 一

私は愛媛県の新居浜にいます。それは卒業以来ずっと離れずにいるというところではないが、軍隊関係が十三年から十七年迄の五年間であって、学校が創立五十年、私が社会に出て即ち、今の会社に入って二十五年、丁度半分になるわけで、今さら、すぎ去った年月を想い感一しお深いものがある。

私がそもそも工業学校に進んだのは、勿論親の考えだったが、当時家運も傾きかけていたので、すぐ働ける技術を身につけるために選んだということ、日本の将来の工業立国を見通したわけではなかったと思う。

入学は、田舎のことでもあるし、入学の時のハンディキャップもあったと

思うが、考えると冷や汗ものだった。第一、第二志望が駄目で、第三志望もやっと最後の危いところだった。発表は一人で見に行ったが、あまり愉快そうな顔もしていなかったと見えて、母子連の一组が「あの子も気の毒に、駄目だったらしいね」といつていた姿をハッキリと覚えていた。これが化学やになる運命の岐路だったわけだが、今では何でもやるといったところ。

これが大多数の人の姿ではないかと思うし、その為にも、基礎の教育、人間づくりの教育の重要であることが強調される。

卒業生としては、まことに申し訳ないが、学校や、後輩のためになることは何一つやっていない。場所がら高知と離れていると、親近感も薄くなるし何らかの機会をとらえて、結びつきを強めることが考えられたらよいと思う。

今般、五十周年記念事業として、記念会館を建設されるにあたって、当地へも、戸梶校長と久松先生が、お見えになり、卒業生一同が歓談する機会を得たことは喜ばしいことであった。また特輯号の発行にあたっての、原稿にしても、技術屋はどうもしゃべったり、書いたりすることが不得手とみえてこのブロックからも一人もないとなっても淋しいし、まあ沢山の寄稿があればボツにして貰うといふことで、内容のない拙文を弄した次第です。

この頃になって、故郷のことや、学校時代のこと、旧い友人のことなど、何かと想い出されることを考えると、やはり年のせいかと出う。学校も徴兵制度の様に、「卒業生は10年毎に必ず学校と定められた期日に出頭しなければならぬ」といったような制度が国家の強権によって定められたらどんなものだろうか！

卒業当時とは、人も物も変わってしまったてすっきり馴染はないけれど、同級生となればまさか、見誤ることもないであろう。

私は未だに若い人との交際が多いが、若い人は今も昔も大して変りはないと思う、昔は幾らか狭い枠の中に泳いでいたし、今は殆ど際限もなく広い空間にあって、枠がない。従って昔の人は、その狭い枠からはみ出さないように抑えていたのが脱されたことによる違いのように見受けられる。

土佐っぱはかざりがなくてよい反面、思慮が足りなくて直情径行のそしりをまぬがれぬものも多い、だから学校教育には伝統とか地域による特色とかがあるだろうが、その中には必ずといっていい位欠点もある。今から巣立つ後輩諸君が、この欠点をなくして、美点長所だけをもって社会に立てば、素晴らしい結果が生れることだろう。基礎教育を充分にやって欲しいものである。

かつて帰高のさい、元の工業学校の周辺を懐かしくて、さまよったことがあった。東の道路側に近く、梅檀の大きな木があった、入学の時から卒業迄の五年間の毎日の友だちであった。今では学校も移転したし、丁度休み中のことで人一人校庭には居なかつた。二十五年前の自分の姿を其処に画いてみると、まったくつい先日のことのように、ありありと眼の前に浮んできた。しばしは茫然としてたずんだことだった。

今迄は前ばかり見てくらししてきた。今からは何かにつけ、過去をふり返ることが多くなることだろう、このことは決して退歩ではないと信じている。からだを働かすことが少くなるほど頭の方の働きはいそがしくなるとも言えるだろう。考えたり追憶にふけるということは実に楽しい。今はどうしているか知れない、同級の諸君もまた同様なことを考えているに違いない。せめてこの五十周年の記念誌の中にでもその元気な姿を髣髴させてほしいものだと思う。

終りに母校諸先生の御健闘を祈り、益々発展されんことを願って筆をおくことに致します。

思い出

(大・13・機)

富 永 武 夫

開校五十年、母校の隆盛を心からお慶び申し上げます。卒業以来約四十年ささやかながらも、どうにか今日を迎えているのは、縁あって母校に学び教わった賜物であると感謝しています。

両親からいただいた肉体は、古い洋服のように、いつの間にか大分すりきれて参りましたが、在学中母校で思いきり磨いた頭Ⅱと言っても成績の方は御承知のように、いや知らない人が多いかと存じますが、とうてい自慢できる代物ではないがⅡの方はそう簡単にチビるものではないと生理学者が保証してくれているので甚だ心丈夫に思っております。

見よ、老兵は死なず、消え去る日までほうんとがんばって、あつと言はせてやろうと、けなげにも「いつまでも若く、いつまでも健康で」をモットーに第二の人生をはげみ、又エンジョイの方もおくれを取ってはならないとひそかに期する所があります。

在神四十年、今では一、二の旧友の消息を知るのみです。この機会に、かつての学友に久瀧の御挨拶をおくりまします。

落第坊主と英語

(昭・13・3・電)

みやけ・としお

開校五十周年と聞いていささか感銘を新たにす。私の額にもその半分に相当する幾条かの線が刻み込まれた訳だ。

私の社でも、かつて私が先輩呼ばわりした幾人かの方が去り何時の間にか先輩面が通用し始めた今、忘れかけた母校の先生方が社の門を叩く度に時代の錯覚やら、少年期のなつかしみがよみがえる。結婚で云えば銀婚式をやる程一会社の釜の飯を喰って見ると、何時とはなし愛着めいたものにとりつかれて墳墓の地も決まってしまう。

半生を過ぎた今では記憶に残る方も皆無と思われるが、かつて私がある課目のため落第寸前であった一年生の事が母校を想い出す唯一のエピソードである。寒村の名士としての父にはぐくまれ、優等生？として君臨出来た私は図らずも伝統に輝く高知工の門をくぐった。それは村の十大ニュースのトップだったかも知れない程、小学校創立以来の出来事だった。やがて一年後、終了式の日落第通知を待つ身のその少年は奇しくも及第してしまった。タ

は坂本先生（版畫の大家）を介して落第を申請したが故松本校長はそれを受理する事なく、五年後北与力町を巣立つ少年の群に東京を夢みる私があったのです。

先に述べたある課目即ち英語、マイナス先生ケチビ先生、モボ先生の教えを離れて既に二十五年、英語の落第生、英語の国へ、奇妙なタイトルの物語が生まれようとは……

オーバーをまとおうと云う日本、翌日は真夏のオーストラリヤ、羊毛とカシミアの国として余りにも有名な豪州の大都会シドニーに滞在二ヶ月、330R V送電用変圧器ICOM V A七台、MADE IN JAPANの偉觀を彼の地に打ち樹てた事が富国の礎ともなれば快哉である。元來日本の英語は読み書きの点欧米にひけをとらぬ位だと評価されている由だが、さてしゃべるとなると大学教授さえ難重の一つだそう。

まして落第坊主の情けなさ、どだいが無理からぬ事でもあった。兎に角商売は終わった。

私に教えてくれた二カ月の教訓、それはこうだ。会話は中学三年の英語で充分用が足せると云う事、つまりあとは心臓の方で解決してくれる訳である。又発音の難事、いわゆる片カナで表現出来ないのが英語である。

対手が大人なら意志は通じて、子供が相手だとまるっきり違った事は、如何にこの外国人にとって英語の発音が難しかったかを物語るに足るものがある。

これからの技術者は海外に行くチャンスも激増するものと思うが、英会話の必要性は言を待たない。在校生の諸君、限られた月謝の中で限られた英語の時間を有効に使い給え。

最も有効なものとする為、日本語抜き教室を持ちたいものである。乍老婆心。

本稿が五十年の歩みの一步に値するなら甚だ幸とするものである。

母校開校五十周年記念に憶う

(昭15・3土)

上久保

浩

(旧姓野島)

私達の母校も開校以来既に五十年の歴史を築いた。一人の人生に於ける五十年でもそれは幾多の苦難と喜怒哀楽の波乱に富んだものに違いないが、学校（公共団体）としての五十年の歴史は我々の想像も出来ない様な苦悩と努力の集積に他ならなかったであろう事は私共にも充分察せられる事であり、創立者の非凡と先見は今更申すまでもなく、当時の教職員の生みの努力と、其後五十年の長きに亘って時流に棹さしながら今日までの歴史の原動力として、そして此の間幾多の傑出した人材を養成し又これ等諸先輩が現に我國の實業界に多大の貢献をなしつつあるを考うる時私共は改めてこれ等諸先生方の御努力に対し深甚の敬意と感謝の念を捧げると共に偉大なる母校の歴史に大いなる誇りを感じる者の一人である。

さて、此度創立五十周年記念の特別会誌発行に際し、五十年の歩みに因んで何んでも良いから書け、との要請を戴いたが、私は前述の諸先生方の原動力により、ただ五ケ年の間秒の針を進め、そして何とか卒業さして戴いたに過ぎず五十年の歴史について何一つ書く資格を持たない者である。が然し折角御指名下さった御厚意に対し何か書いて其の責を果し度いと思う。それが五十年の母校の歩みに何の關係の無い事であろう共、平にお許しを戴き度い。

最近の世想を見るにと角世の中を頭の中だけで理解しようという人間が多くなったのではあるまいか。かつて「人生は不可解なり」との言葉を残して華嚴の滝に身を投げた藤村操は勿論私の言う意味とは違つた人生論を究明して居つたであろうが、私はもっと平凡に現実の人生を考えて見たいと思う。つまり「人生とは」生きる「事であり」日常の生活「即ち」人生だ」という事だ。

今日の如く科学が進歩し、スプートニクだのミサイルだの、やれ月への旅行だのと新聞紙上を賑わすといふ我々自身偉くなって、今にも自分が月に行

ける様な錯覚を持ち易いものである。然し現実を決してそんなものではない。幾ら世の中が進んだといっても、未だ皆ソビエートの子供がナイロンパンツを穿いて生まれたとは聞かないし、アメリカの子供が生まれ落ちたとたん量子力学の講義をしたとも聞いた事がない。若し今日、手足が退化し頭脳ばかり発達した子供が（我々の想像する火星人の様な）万一生まれたとしたら如何な科学の発達した国でも矢張り奇形児として扱うのではあるまいか、という事は日本が戦争に負けようが共産主義思想が世界を支配しようがとに角、人間の本来の姿には、そう急激な変化は無いという事だ。とすれば我々は今少しくお互い本来の姿に立ち帰って虚心に世の中の物事を眺めて見る必要がありはしないだろうか？先生は先生としての已れ本来の職務に、生徒は生徒としての已れの立場と目的を再確認する事により本当の教育の姿が出現するのではなからうか。私は教育の事については何一つ発言する資格も持たないが皆んなが理論に先走らずに、今一度最も平凡なる人間の生立を考えてもらい度いのである。

人生を機織に例えるならば学校教育は縦糸を細く事であり横糸が日々の生活に当る。学問を多く身につける事は、縦糸をより一層丈夫にし品質の向上を計る事であり、其後如何様の色彩で如何様な種類の糸で如何様な模様の布を織ろうともそれはその人、それその努力と勤勉によるもので、出来上つたものが錦の布になる者も或はガーゼになる者もあるだろう。その布が即ち人生なのである。錦は錦でガーゼはガーゼなりに尊いものであるが、結局その人生の価値は、より多く実社会に貢献する度合いに依つて決まる事も又布の場合と同様である。布の強さは縦糸の強弱に比例する。学校教育に於ける生活、縦糸を強い丈夫で継目のない、よりの良くかつた高品位なものにするか否かは、教職員の高度の技術と工場たる学校の設備内容並びに環境と原材料たる学生々徒の素直にして真摯な態度とによるのではなからうか？幸いにも母校は五十年間価値高く強く美しき糸を袖ぎ続けて来たのである。どうか此の輝く五十年の歴史を基に今後共教職員生徒一同、一心同体となり益々誇り高く良き縦糸の生産に努力せられん事を切に祈る次第である。

私も母校で紬がれた縦糸の立派さに劣らないだけの横糸と色彩で立派にし

て有用な布を織り上げる如く努力しなければならないと思う。

あ の 頃

(昭・16・3・電) 大 畠 正 賢

私の入学したあの頃、考えてみますともう二十六年昔のことです。私の子供が来年は中学校に入学するのだから丁度この子供の頃を思い出し、在学中の学校行事などを簡単に記してみます。

吉崎記念図書館落成式

名門高知工業学校生徒として、誇りをもつて入学したもの、北与力町の古い狭い校舎では肩身がせまく他校に入学した友達にも気がひけました。そんな環境の中にあつた時、学校の一角に小さいながらも木骨コンクリート二階建の白色のすばらしい図書館が完成し私達入学後間もなく落成式が行われたことが入学式以上に印象深く頭の中にやきついております。建設費五千元足らずだったとか。この図書館には随分お世話になり他校にも自慢出来る一つでありました。

グライダー製作

三年生の時だったと思います。世はまさに戦時下、中国大陸に我国航空隊の活躍が目ざましく、毎日のニュースの大半をしめ若い者は空への強い憧れをもっておりました。その時機械科と電気科の三年生実習としてグライダー製作がはじまりました。グライダー工場を建築工場の東側に新設して、プライマリーの製作に熱中したことはほんとに楽しく検査に合格し、充分実用に耐えるグライダーを自分等の手でつくるんだと、電気の実習以上にファイトを燃し興味がわきました。いよいよ完成し若い機械科の山田先生が塔乗して市立グラウンドで見事滑空した時の光景は忘れられません。

ニッポン号世界一周

大阪毎日新聞社機の世界一周大飛行の壮図が発表され、機名はニッポ

ン」と決定、七名の塔乗員の発表、その中に先輩の八百川長作氏があり、学校あげてよろこびの渦に巻き込まれたことは当時一生徒であった私の体にも感じとることが出来ました。出発は八月の夏休み中であつたが、全校生徒炎天下の校庭に集合し、成功祈願に山田町の八幡様へ行つたことを思い出します。其後十月無事大任を果たし、羽田空港に着陸するまでの間、途中のニュースに関心をもち図書館にて毎日新聞をうばい合い我事のように胸をおどらせたことでした。

集団作業

あの頃の夏休みは集団作業といつて炎天のもと全員で作業を一週間か十日位はやらなければなりません。その他に川内村の植林作業や一宮村の製炭作業も思い出します。集団作業で印象深いのは長年待望の校舎新築移転も決定し、当時の校舎の約三倍の敷地に鏡川原より砂利を車に積んで棧橋通りまで運搬したつらさ。しかし「学校も大きく立派になるんだ」と張り切り、市立グラウンドの草刈作業よりは身近かに感じ、学校の教室で泊り込みで頑張つたものです。卒業するまでその立派な校舎も見ることが出来ず、其後戦災で焼かれたとか、余程私達には校舎に恵まれていなかったと痛感します。香長平野二期作地帯の応召家族の農事手伝いで大津村に二、三日稲刈にも行きました。

その他に毎日の登校はゲートルを巻いて背のうを肩に、上級生に欠礼すると大変で街角は緊張の一瞬でした。教練も重要な必修科目で時には防火訓練そして毎月一日は興亜奉公日で全員梅干弁当の励行などあの頃の学校生活が浮かんで来ます。

現在の高校生は在学中の思い出と云えば楽しかった修学旅行、文化祭、体育祭が先ず浮かんでくるでしょうが私達にはその前に以上のような現在の高校生には想像出来ない学校生活の一コマがまず浮かんで来ます。やはり世の中が戦時中と云う不安な状況にあつたためでしょう。私達のあの頃は考へてみますとたしかに不幸でした。こんな殺気立つた学校生活の中で毎年五月二十七日の海軍記念日に市内の男女中学校連合体操会が開かれ、若人らしい真剣さと潑刺さで女学生と共に合同体操、そして女学生の前で跳び箱を真面目

な顔をしてとんだあの日は、ほのかに心温まる一日でした。

あれから二十年

(昭18・3・二電)

国 沢 秀 雄

昨年十月、一人の紳士が私の事務所を訪れた。「東京精電社、坂本竹生」名刺を出されて、あゝ「ビンタ」、あわてて後を息にのんだら、先生にやりと笑つて、「そうです」。

しばらくでしたと挨拶をかわしながら、今は昔、二十年の才月のへだたりを一時に感じて、深い想いとらわれた。

それにしても先生、年が若い。然し、昭和十六、七年高知工業学校の先徒をふるえあがらせたビンタこと海軍兵曹長、坂本竹生のトゲトゲしいタギッタような感じは全々なく、終戦以来生きぬいてこられた歴史の歩みが分の厚いものであつたであろう、しつとりとしたおちついた風ぼうが、一瞬私にビンタを想い出すことをとまどわせたであろう。

一通り思い出話に談笑し、現況をかたり合つた後、愛宕町で電気工事業を営んでおられる永野さん、一宮中学校の小松正利校長の当事の同僚に電話され、酒で旧交をあためられたようであるが、やむをえない所用でおつき合い出来なかつたのは残念である。先生もそのことを残念がつて、今では電々公社の下うけをやってまあまあ一人前にやっているので、上京の節にはぜひ連絡してほしいとくれぐれも念をおされたので、直後の上京の機会に、東京精電社に電話したが折悪しく出張、お目にかかれずそのままになっていた。

この八月総評大会で上京の折、五十周年記念誌の原稿を依頼されていたことを思い出し、坂本先生との会見記をものにししようと考へて、麻布六本木九番地後藤ビル、電四〇八の八二一五にダイヤルしたが、

「精電社さんはこの春新しい事務所に移転されました。ハイ、移転先は一すわかりかねます」。

心のこりのまま東京をたつた。

戦争の思い出

(昭和20・3・機) 大坪立男

工業学校がはじまって、はや五十年にもなりますか。そうでしょう。私が学校を出てから、はや二十年が近くなりましたからなあ。

私の学校時代を思い出せば、まさに戦争時代ばかりでした。支那事変、大平洋戦争中を過ごしたわけです。ゲートル巻いて、軍事教練ばかりを思い出してはいけません。五年間のうち、最後の学年はほとんど授業なしで、孕の電気製鋼所に勤労働員でした。石炭の車を引っぱったものです。そうそう動員中、機械科の則岡先生が技術中尉でしたが出征されたことを思い出します。肩へタスキをかけた堂々たるカップクの先生が「則岡は行ってくる」の一言で去って行かれた。現地へつかず、沖繩上陸寸前の輸送船で、全員沈み戦死の悲報が間もなく聞かされたことでした。

ワンパク少年たちも、このリベラリストであった心服おくあたわざる先生の死、私たちは一瞬からだがジンとしびれたことを思い出すことです。

太平洋戦争の開戦の日藤並神社の前を通りながら、「アメリカに勝つろるかねや」と話しながら登校したことです。その日、世の中が、街通りの風景までが、ガラリと変って見えたのは、多感な少年時代の思い出のひとつです。

分列行進が大はやりで、何かといえば「頭ア右」をやらされたことでした。宮地(ゴリさん)、勝(一ダースの子もち)先生、配属将校の野島(ブウ)、北村(マントク)先生、岡田(ダルニイ)先生は、今どうしておられるでしょうか。すでに亡くなられた先生もあると聞いておりますが、これらの先生の堂々(?)たる号令や、行進ぶりが、今もありありと眼に浮かぶようです。

現在のスポーツのはなやかさはどうでしょう。今の生徒たちは、ほんとうに幸だと思えます。当時は柔剣道、戦場運動などが全盛で、まったく殺バツでありました。柔道部に籍を置いていた私は、サボっては大川という上級生

にいつもビンタをとられたものでした。今、彼はどうしているだろうと思うと、人をナグッたりしなくてよかったと考えたりすることです。なにはともあれ、サボりながらも柔道でからだをきたえたことはよかったです。今まで大した病氣もせずに仕事ができるのは、この発育ざかりの時の鍛練のたまものだと思います。三十才代なかばの私たちの友人も、はやボツボツ死亡の声が聞かれるからです。

それにしても、もう一年早く生れていたら、戦争に行き、南海のモクズか大陸の土かになっていたにちがいない、運がよかったという思いが頭をかすめます。やっぱり、大君のためでなくても、死ぬのはイヤですすからなあ。

七月の十日でしたか、高知市の大空襲のあった日は……。私は丁度大阪にいたので知らないのですが、人に聞くと、今の工業学校にはシヨウイ弾のタバが落ちて、数百発が校庭などに針のように立っていたそうですね。なつかしい母校も灰じんに帰したわけです。ゴシンエイだけは当直の先生が、命ながら無事に持ち出したと聞いております。

今は技術革新時代、ウオストーク三号、四号が世界のトップニュースになっている時代、工業学校卒業生が羽根がはえて飛ぶように売れている時代です。今の生徒たちの思い出が、再びいまわしい戦争の思い出になってはならないと思うことです。本校の発展を祈ってやみません。

工業の奇型児

(昭21・3・電) 長尾英二郎

最近よく人から「君が工業の電気科を出ているとはどうしても思えない」といわれることがある。その言葉の裏には、だんだん私にも職業政治家又は職業労働運動家としての体臭がでてきたということと、もっとも電気知識のちあわせがなく工業出らしい合理さや緻密さがみられないということも含まれているらしい。母校の名誉を傷つけることおびただしと自戒して、

大いに勉強をせねばならないと思っているのだが、科学技術の発達の方がめざましすぎて、ますますこのこされていきそうである。

自然科学、宇宙科学分野のめざましい発達にひきくらべると、政治や労働運動の方は昔からちっとも進歩のあとが見えない。原子力は人類のすばらしい発見であるが、それを武力にしようと考えたり、自分とてころの核武装だけが正義のためのものなどと本気で考えねばならない政治の世界はこっけいというよりしようがない。労働運動もいつまでも搾取するものとされるものという枠の中だけでものを考えずに、国というものを一つの経済単位にしてどういうふうにするれば一番国が繁栄し、民衆がしあわせになれるかを具体的に考えていかねばならない。独占資本を倒すには「マルクスの資本論」から入らずに「三国誌」あたりから出なおした方がよさそうである。

ともあれ昭和二十一年三月、高知工業電気科四年卒業という組には、電気であろうめしを喰わずに、やむを得ず方向転換をしたものがわりあい多い。私もその一人であるが、帯屋町に幾つかの店を経営しほかにもいろいろ事業に手を出している原政君などは私より上手である。彼は昭和二十一年に私と一緒に宇治電に入社し、私は八カ月務めたが彼は三週間でやめ、昭和二十二年には関東配電へ、これも私と一緒に入社したが、私が七年ほどつとめたのに彼はわずか一週間でやめた。一人とも電気は何にもしらんし、これから勉強して優秀な技術者になろうという心構えも全然できていなかった。私は電気を知らなくて上役に叱られ同僚に笑われても他に収入の道がいっさいないのだから、何がなんでも職場にしがみついているよりはかにどうしようもなかった。それで関東配電ではデスコンの操作を最後まで一人でようせずに、四年間工務員から技手補に昇進しないという不名誉な記録をつくってしまった。とにかく私はそこに務めながら、原君はお父さんのやっていた古着屋が順調になったのでそこから仕送りを受けながら二人は明治大学の予科から法学部に学んだ。私はなんとか卒業したが原君は学生運動と恋に熱中して私よりも、ずっとあとまで学校に通ったが、とうとう法学士にはならずじまいだった。そして二人ともせっかく学んだ法律でもまためしをよう喰わずに、私は社会主義運動に原君は事業に今精魂をかたむけている。

これは私たち二人だけが突然変異で工業の奇型児になったのではなくて、大なり小なりわが同級生には似たようなものが多い。工業在学中の四年間がちようど大平洋戦争のはじめから終りに行きあたったから私たちは奇型児になっただと思う。すなわち、小学三年のときに日支事変がおこり、工業の給仕になった年の暮に太平洋戦争がはじまり、私たちは入学早々から教練でしぼられ、二年からは日章の飛行場の建設でモッコをかつがされ、三年から終戦までは学徒動員でずっと宇治電に通動したのである。おやじはとうから死んでいたし、家は貧乏のどん底で、やみ米なんてめったに買えなかったし、年がら年中腹をすかして空襲におびえていたみじめな少年時代だった。工業四年のときの目方がたったの十貫五百であった。今は中年肥りで十七貫ほどあるが、骨格がひとより極端に小さいのはその時代に喰うものをろくに喰ってないからだと思っている。

その時代にもった夢といえは早く戦争が終ればよい、ということと早く大人になりたいということだった。

そして戦争が終ったときは「もう死ななくていいんだ」と思ってむしろ嬉しかった。私の幼少年時代は飢えすぎた。私が電気の技術者になれないのもそのせいだと思っている。三つ児の魂百まで」という諺があるが、私も死ぬるまで観念論ではない。「平和」と「貧乏人の生活」から離れることができそうにない。高知工業五十年の歩みの中に日支事変と太平洋戦争があったのは事実だし、その中で私のような奇型児が育ったことは、工業の汚点には違いないが、やむを得ないこととしてお認め願えないだろうか。

思 い 出

(昭31・3・電) 北 村 邦 雄

在学中誰しも喜怒哀楽何かにつけて必ず思い出があるものですが、以下に僕の数ある思い出の中からいくつか拾いあげて拙文を綴ってみたいと思いま

す。

僕が高知工業高校に入学したのは昭和二十八年の四月であった。

入学式当日はどんな学校だろうかかと心はずませて学校へ行ったのであったが、校門を入ってまずがっかりした。当時は今のようなりっぱな講堂や工業図書館もなく、終戦後数年たったいたにも拘らず、敷地内のところどころにまだ戦災の跡形が見受けられる外見のおそまつな学校で学ぶのかと思うとやや期待外れのものがあつた。

入学式のあとで級分けが発表されたので、決められた教室に入って待つていると担任の先生が入ってこられた。目玉の大きな睨みのききそうな貫ろく十分な先生であつた。沢本先生であつた。

沢本先生は数学を担当されていた。入学当初の一、二ヶ月間は、僕なんか環境が変わったせいがあるいは緊張をしすぎたせいか授業時間中によくねむりをしたものであつたが、不思議と数学の時間だけは目が開いていたように思う。別に叱られたわけでもないが、やはり先生か恐かつたのかも知れない。

二年生のときは中司先生が僕達のクラスの担任であつた。担任のご挨拶の中で、『このクラスを「むぼう」のクラスにしようではないか』といわれた。この「むぼう」というのは「ぼうぼう」がない、すなわち頭髪はいつも短かく刈つておこうではないかという意味だつた。二年の二期を迎える頃にはたいいていの学生が学校内のもろもろの事情に精通し、たいがいのことに対して要領がよくなるものであるが、またこの頃は色気もちょっぴり出してみたい年頃でもある。僕達のクラスにもそうゆうのが何人かいた。ある日、連中の一人が、床屋へ行って「すそ刈り」とやらをやってきて悦に入っていたのが先生に見つかり、『散髪代をやるから上の方も刈つてこい』といわれあげしよりにしたということがあつた。

三年になるとそろそろ卒業後のことが気になるものだが、当時は「なべ底景気」といわれて求職難であつた。そのためか就職ということに対して皆んなが相当気を配っていたようであつた。二期も終りに近づいたある日、僕も就職試験受験のため上京することになった。高知駅で同行の者二、三人と

汽車に乗って発車するのを待っていると、駅の階段を駆け降りてくるトレイング姿の一団が目についた。クラスメート達であつた。きけば体育の時間が自習になったので、次の英語の時間をサボって僕達を見送るためわざわざ駅まで駆けつけてきたとのことであつた。汽車がホームをすべり出したとき、彼達は校歌を合唱して僕達を見送ってくれた。汽車に同乗の他の客達が僕達の方を見ていたので、内心嬉しかったものもちよつとてれくさかつた。

就職先も内定してよいよ卒業式の当日を迎えることとなつた。僕達の卒業式も例年のように商業高校の講堂を借りて行なわれた。何んだか妙な気がしたものであつた。

思い出すまゝに

(昭32・3・機) 大 西 明 治

可もなく不可もない学生生活というのが正直に云つて自分の在学中の生活態度であつた様に思う。だからこうして卒業後五年たつていざ何が一番記憶に残っているかと考えてみても特別にこれと云つてあげるものがないのが残念である。もう少し徹底して勉強しておくか、遊んでおくか、もしくはもつと暴れておけば、他の同窓生の人達と同じ様に後で色々思い出話も出来たであらうに、運動会、文化祭、修学旅行等の楽しい諸行事もあつたが、諸氏諸兄も一応経験された事と思うので、この度は私自身物心ついて以来高知工業に関して記憶にあることをつらつら記してみたいと思う。

私が初めて高知工業の名前を知つたのは、昭和十八年に次兄が電気科に入學した時だつた。その頃自分は二葉保育園へ行つたので朝はいつも一緒に通つた。学校の南側に家の田んぼがあつて父や兄達が耕しに行つたので自分もおやつのおかし芋を持ってお使いに行つたが一度そのお使いの途中学校の前を通つている時丁度マラソンか何かの練習中の学生がいきなり門から多勢走り出して来てつきとばされて鼻の頭を擦りむくやら折角のお芋をめちゃ／＼にされるやらでひどい目にあつた事があつた。その頃の記憶による

と今の学校の敷地とは少し違っていた様に思う。現在学校の西南に製材所があるがあの一角から東へ棧橋通り四丁目の方角に今の運動場の東南端までと北へ電車通りまで真直ぐに煉瓦塀があった。電車通りと製材所の間あたりは先程述べた学生との衝突事件のあった門があった様に思う。運動場のすぐ西に戸梶校長のお宅があったが、そこは戦後三四年までは芋畑であった。丁度その前の校庭にどういものか住宅が二棟あって、その一棟で娘が感電死して幽れいが出ると云ううわさがあって戦災で焼けるまで何となくその前かが通り難い事を感じている。高知市が大空襲にあった日、昭和二十年七月四日だったと思う。その頃自分の家は高知市土居町にあったので、兄弟達と布団を被って高知商業の東の方まで避難して来た。家を出る時父母と工業学校の南側の畑で落合う約束で先に子供だけで走り出したのだが、焼夷弾に当たって死んだ人や、焼け落ちる家の間をやっと帯田あたりの電車通りまで来たときはもう電車通りは火の海となっていたし工業学校の校舎も火が上っていたが、商業学校の方はまだ安全な様に見えたので商業学校の東側へ出てしまった。泥田の中や溝や川の中を花火の様に落ちてくる焼夷弾を避けて逃げ回った。その途中学校の校舎が大きな火だるまになって焼け落ちるのを見た。その時は別に学校の焼けるのを見てもどうと云う感じもなかった。ただ真赤に燃えている校舎が何となく大きくきれいに見えた。

火が消えてから学校の南へ行った。運動場は土の面が見えない位焼夷弾のからが落ちていたがそのすぐ南側に二階建の家が三軒無疵で残っていたので当時不思議に思った。

戦後しばらくしてバラックの校舎が建ち、学校が始まったけれど、校庭は我々近所のがき共のいい遊び場だった。今、製材所のあるあたりの塀の内側にそって防空壕があり、すぐ近くにせんだんの木が三本と砂場もあったし、年中何かしら遊びの材料には事欠かなかった。その頃は使用目的を知らなかったのだが、近所の若者達が使ったらしき例のラバー製品を壕の跡で時々見つけて風船替りに遊んだ事だったが今思えば苦笑を禁じ得ない。知らぬ事とは云え大人達を困らせた事だろう。放課後に塀の外へ生徒が来て煙草をいづもすっていた。先輩諸兄の中には身に覚えの方もおありの事と思う。今

は西森製材所になっている様だが、最初は武田製材と云って、今の所よりも少し北の方に小さな工場であったのが、今の所まで南下してせんだんの木やなつかしの防空壕を占領してしまった。昭和二十五年に三番目の兄が機械科に入学した頃はまだ校舎もほとんどバラックだった。機械科の職員室と製図室のあった棟は元の敷地よりも少し西へ張り出して建てられた様に思う。確かな記憶は無くなったが、戦後しばらくは学校の北西部、今県交のあるあたりから本間寺の前一带は田んぼだった様に思う。次々に様子が変わったので近くに居ながら良くは憶えていない。自分が入学した二十九年頃は実習工場、鋳物工場木型室等はまだバラックだった。卒業間際に鋳物工場などが改築される様になったのだが。出来上ったのはまだ見ていない。体育館も出来たそうだが、まだ一見にあづかっていたいので今度高知へ行く機会があれば隅から隅まで目にして来たいものと楽しみにしている。又もつと昔の様子なども現地へ行つて詳しく思い出してみたいと思う。もつと詳しい学校の変遷についてご存知の方がおいででしたらお話でもおうかがいたしたいものと念願して乱文をとじることにする。

関東大震災を回顧して

(大正・機) 大 畑 忠 顕

母校開校五十周年記念事業の一つとして会誌を発行するに当り、投稿の榮に浴することが出来得たことを衷心より感謝すると同時に、母校の今後の御発展を御祈り申し上げます。

さて、私は大正十一年三月機械科を卒業いたしましたして、東京芝浦製作所に就任することになりました。卒業直前に会社より内藤人事課長がわざわざ本校に出張せられ、吉崎校長先生並びに、島田先生の御推薦により人物試験身元調査をせられました。幸か不幸か採用せられることになりました。

人事課長も海路初めて来県せられ、阪神航路の荒波に揺られ大変お疲の模様で一度懲りだと話されて居りました。当時は勿論、汽車の便はなく船便で

来県の外はなかったのです。今思えばお気の毒千万でした。

さて卒業後いよいよ上京し社会人の第一歩を踏出すことになりましたが、全国より採用になった新卒業生は約百名ばかりで、最初は現場服に人頭番号入の帽子を冠って一応各工場を回り実習をやったのです。其の後約半ケ年で製図係勤務となりました。

高知県と云えば未知の人が多く四国猿かと云う位で未開地の感を与えて居りました。しかし一方純情で正直なことを買われて居たようでした。

かくして約一年半過ぎ、時恰も大正十二年九月一日午前十一時五十八分あの関東大震災に遭遇いたしました。私は階上製図室で作業して居り丁度昼食前のことで皆がそろそろ準備に取りかかって居りました。朝の内は曇りでしたが、地震前には急に晴れ一点の雲のない空模様になり頗る好天気でしたが最初強い突風の様な感じを受けましたがたちどころに激震動揺を感じ、テーブル上の旋風機は床上に転落、建物はゲチゲチと物凄い音響を立て、今にも倒壊せんとする状態となり我々は皆無意識に机の下にもぐり込みました。

屋根瓦は落ち、壁は大亀裂を生じ一瞬にして修羅の巷と化したのであります。其の後は波状的に震動があり、気味悪く何れにしても永くは居られぬので危険を冒して必死となり漸く芝公園迄避難しました。

屋内に居るのは至極危険で其の夜は公園で野宿いたしました。当時は東京には不逞鮮人が居て此の機を利用して悪事を働く者があつた様で、直ちに市内に、戒厳令が布かれ、交叉点では着剣の武装兵が居て通行人を一々調べて居りました。又騎馬憲兵が抜剣のままあちこち駈廻りさながら戦場の感がありました。又、流言飛語を飛ばし人心を錯乱さす者もあり警戒は嚴重でも仲々物騒な事が多かったのです。尚、困った事には断水はするなり、食糧はなくなり交通機関は全部麻痺状態となり、何所へも徒歩以外には行かれなくなりました。勿論通信機関も全部不通で故郷への音信も出来なくなりました。夜は照明が一つもなく月が出て各所に火災が発生したので黒煙のため天を覆われ、暗黒面となるのです。火災の大きい所は本所深川の被服廠跡で、これに市民が避難をして居りましたが、殆ど全焼せられ焼死したのですが此

の場合救助の手出しは出来なかったのです。其の他、各所の被害は枚挙に暇がない状態でした。未だ九月初めで炎暑も酷く食糧不足のため身心が著しく消耗せられ、殆んど乞食同様の生活を続けたのです。

此の様な状態で旬日我慢いたしました。が芝浦から南米航路のシカゴ丸（八〇〇噸）が神戸に向け出帆することが警察署より連絡がありましたので、これに便乗させて貰い約二日間の航海で神戸迄帰る事が出来ました。神戸高知間は平常通りに運航されて居たので、無事帰郷することが出来ました。

而し音信不通のため家族には連絡が出来なかつたので、一同が安否を氣遣い、幽霊が帰つたのではないかとからかわれた事を記憶して居ります。一方会社は震災火災のため一時閉鎖の止むなきにいたり、休業いたしました。が、応急対策で数ヶ月後漸く作業開始となり、待機命令も解除されることになり再び上京することになりました。

而して流石は東京で帝都復興は急ピッチに進展し、彼方此方にバラック建築が再建せられ、槌音が絶え間なく高く響き、帝都復興節が歌われるようになり、漸く衣食住にも満足は出来ないが間に合う程度の状態にはなりました。此の機を逸せず我々には新しきスタートを作り、所謂禍を転じて福となす人生の尊い試練を生かし、一層の奮励努力をなし再建に尽すべき覚悟を決めたわけであります。

震災のため尊い生命財産を失い路頭に迷つた人も数知れなかつたと思ひますが、誠に御気の毒千万なことでした。

古言の如く世界で恐しいものには地震、雷、火事、親父と申しますが就中地震は最も人心に恐怖を抱かせるものと思ひます。

ここに関東大震災を回顧して、九死に一生を得た体験を披瀝したわけで、大東亜戦に比すれば成る程小さいものではあります。が、当時罹災者に取つては一大打撃を受けた次第で、其の被害は甚大でありました。

本文は震災の一部の概況に過ぎませんが、尚筆舌に尽くし難い災害のあったことは、各位の御想像にお委せいたし度いと存じます。

各課程の生い立ちと今日

機械科五十年のあゆみ

(昭・13・機卒) 塩田一郎

五十周年を機会に今迄のあゆみをふりかえってみるのも無益なことではないだろうと思う。

明治四五年四月…第一回生が入学した。機械科は創立と同時に設置せられた。

大正元年九月 鑄造工場、鍛造工場が落成した。

大正六年三月 第一回生二一名が卒業した。

大正六年四月 技術員養成所が増設せられた。実習用工作機械は技術員養成所の生徒が主になって本校で製作したもので、当時の旋盤は現在も活躍している。

在も活躍している。

大正九年八月 機械科で製作したエンジンをつけたモーターボートが四

国を一周した。又機械科で製作した六、八、一〇、一二、一五馬力の漁船用焼玉機関は非常に好評で遠く室戸、幡多、台湾方面からも注文があった。

註文があった。

大正十一年一月 時の皇太子が実習工場を御覧になった。

大正十二年三月 技術員養成所第一回生が卒業した。その後昭和二四年三月廃止になる迄一〇〇名の卒業生をおくった。

大正十二年四月 私立から県立になった。本県唯一の工業学校として

特に機械科の生産実習は地域産業界のために多大の貢献をした。当時、工場開放(現在の文化祭)は評判で機械科では鑄造の実演をしたり、ロボットを動かしたりした。又ポンプで大量の水をあげて

ナイヤガラ瀑布を作って見物人の眼をみはらせた事もある。動物園を作って模型の犬を藪から飛出させる様にした処、ほんものの犬が

とびかかって来て大格闘をしたのもこのごろのことである。

昭和九年四月 実務学校(夜間二年制)が増設せられ昭和十三年三月

月廃止になる迄つづいた。

昭和十二年一月 第二部が増設せられ昭和一六年三月廃止になる迄六八名の卒業生をおくった。

昭和十五年四月 第二本科が増設せられ昭和二十一年三月廃止になる迄一七八名の卒業生をおくった。

昭和十七年四月 北与力町より現在地に移転した。

昭和十九年頃 戦争がすすむにつれて機械科の各工場は昼夜の別なく軍需品の生産に動員され活動した。生徒も学徒動員をうけて、工場に分れて働らくようになり授業は事実上できなくなった。

昭和二十年七月 空襲にあい全焼した。戦後、やけた機械を修理してそのまま使用している。

昭和二十年九月 戦後、事務所を県の工業試験場におき各科分散教育をすることになり、機械科は高知県造船株式会社葛島工場で実習を行った。

昭和二十三年四月 高知県立高知工業高等学校となった。

昭和二十四年三月 定時制に機械科が増設せられた。

昭和二十五年九月 バラックであった機械工場を大修理した。

昭和二十七年四月 材料試験室、製図室、精密測定室、聒員室、が新築落成した。

昭和三十三年四月 鑄造工場が新築落成した。

昭和三十四年二月 木型工場が新築落成した。これで実習実験のための施設として木型工場、機械工場、仕上工場、鑄造工場、溶接板金工場、鍛造工場、工具室、精密測定室、材料試験室、原動機実験室、製図室、暗室、自動車庫、が整った。そのうちで機械工場、仕上工場、溶接板金工場、鍛造工場、工具室、原動機実験室を一棟の鉄筋コンクリートに改築工事中である。

現在機械科の卒業生は本科二四九九名、技術員養成所、第二本科を併せて二八八名にのぼる。時代のうつりかわりに応じて開校当時に比べると教育内容もずい分変わった。開校当時の教育課程をみると実に今昔の感にたえない。今では技術革新の時代に応ずるために、自動制御、工業計測が教育課

程に取り入れられようとしており、実習も実験的実習の比重がぐんと増しつ
つある。

これからも新しい技術を身につけた若人が無限に巣立ってゆくことである
う。
(機械科・職員)

電気科の今と昔

(昭16・機卒) 奥 田 稔

古い会誌などを見ますと本校は明治四十五年四月八日私立高知工業学校と
して始めて機械科、電気科の授業が開始されたそうです。私はずっと下って
昭和十一年から五年間機械科生徒として籍を置いて居りましたが当時の電気
科は実習場の建物も今から考えると割合粗末なもので配線が天井から下って
何だか恐ろしい様な気がしていたことを記憶して居ります。

当時電気科には松本校長先生の外に城野、宮地、本山、永瀬と云った先生
方が居られ電気一般について講義して下さったのが何とも理解に苦しんで弱
ったことでした。棧橋通りに移転してからのことは御無沙汰して知りませ
んが空襲で焼けたものを整理して再建に努力された方々の御苦心は大変なもの
であつたと思われます。

今日までの電気科卒業生総数は全日制定時制合せて約二一〇〇名に達し全
国に亘って活躍されて居りますことはまことに御同慶に堪へないことであり
ます。現在電気科は全日制四十五名づつ二クラス。定時制一クラスの者が年
々入学して伝統ある本校で勉強して居ります。

施設、設備につきましても最近の計表技術の急速な発達に伴い工業高校に
於てもその概会取扱等の大要を教授することが社会の要請するところとなり
本校に於ても数年に亘る研究の結果昭和三十六年度より電気科の教科課程に
新に「自動制御」一単位が設けられました、更に昭和三十六年度産業教育振
興法特別設備費として三〇〇万円計上の決定を見て強電実験室北側の四十平
方米に温度、液位、流量を主体とする自動制御実験装置が完成されました、
これは技術の性質上電気科と最も関係が深いところから電気科実習室に設置

されたものであります。又学校全体を纏める変電室が計画され第二号舎東側
に約四十平方メートルのコンクリートブロックのスマートな建物が完成しました。
其他一〇万ボルトの高圧試験設備電気動力計、水銀整流器整流子電動機、又
弱電関係でも陰極線オシログラフを初め各種発振器類等が備へられました。
尚先輩方の居られる各職場からは色々と御援助を預いて居ります。特に四国
電力の方々からは格別の御世話になって来ました。

此の様に漸次整備されつゝありますけれども電気技術の進歩が驚威的に速
く又止る所を知らぬ程に広範囲に発展して居りますので未だくその一部を
備え得たと云う状態であります。書物で学んだことを実験実習によって基礎
的な自信を身につけさせること、これが要諦と考えられます。私共は工業技
術教育の重要性を認識し今後一層の努力を致し度いと思ひます。電気科の現
況報告と共に今後一段の御支援を賜りますようお願い致します。
(電気科職員)

今昔工業化学科

田 所 胤 雄

本校の前身である高知工業学校が高知市北与力町にあつた時代の応用化学
科の設備、内容については、詳しくはわからないので、歴史的なものと、現状
について説明します。

本校の前身は明治四五年五月、私立高知工業学校として発足。現在の工業
化学科の前身である応用化学科が設置されたのは大正六年四月であります。
第一回卒業生は大正九年三月、一七名が卒業している。(本科三年制度)
大正一二年四月一日 経営を県に移管し、高知県立高知工業高等学
校となる。

昭和一四年四月一日 第二本科(入学資格高小卒、修業年限二ケ年)が
増設され、応用化学科が設置される。

昭和一七年四月八日 校地狹隘のため高知市北与力町より現在の高知市

棧橋通り二丁目移転する。応用化学科実験室（約一五〇坪）移転改築する。（石鹼製造工場、セメント試験室、一般実験室、薬品室、器具室、天秤室、取員室）

昭和二〇年七月四日 第二次大戦による空襲のため全校舎、工場を全焼。化学科実験室焼跡には焼けた鉄製スタンド等しか残っていなかった。終戦後すぐに他校舎等を借りて分散授業を開始する。

昭和二一年四月八日 高知市立高知商業学校に併設されていた、採鉱冶金科が本校応用化学科に吸収合併される。

昭和二一年三月 第二本科が廃止される。

昭和二六年三月 応用化学科第一回卒業より、この間六回の卒業生を送り出し、合計一九五名になっている。

昭和二二年九月 バラック校舎が焼跡に建築され、全生徒と一緒に授業することができるようになった。化学科実験室もバラック建、準備室、一般実験室、取員室（一六四坪）にて建築されたが、化学実験室と名付けることの出来ない程、設備、内容がおそまつなものであった。（一例、化学天秤一台、水道設備なし、熱源はコンロで木炭を使用、ガス、電熱器具なし）

昭和二三年四月一日 学制改革により、高知県立高知工業高等学校となり、応用化学科は工業化学科と変り、在校生は編入される。

旧制度による。応用化学科の卒業生は大正九年三月の第一回より昭和二四年三月の第三〇回卒業に至るまで、合計六九八名の卒業生を出している。この間第二三、二四、二五回は三ヶ月繰上げ一二月卒業、第二七回は四年制度で卒業第三〇回は採鉱冶金科と合併、化学科の歴史の中で唯一度の二クラスとなるなど、戦争の影響をいろいろのかたちで受けている。

昭和二四より本校舎がつきつぎと建築されていった。

昭和二四年四月より定時制課程に工業化学科が設置される。

昭和二四年九月 工業化学科実験室が旧バラック建（四教室一六四坪）が移転改築（定性分析室、定量分析室、天秤室、薬品室、器具室、薬

品倉庫、暗室、ガス発生室、取員室一三九坪）される。

昭和三七年三月 工業化学科実験室（天秤室、物理化学室、合成化学室、化学工学室、準備室一〇〇坪）が増設される。

この増設によつて一応工業化学科実験室の形を整えることは出来たが製造工場の不足、定性、定量実験室の老朽などあつて十分な設備とはいえない状態である。

実験設備は昭和二七年度、三一年度の産振法の補助によつて強化されたが設備基準の三〇%余である。

新制度による工業化学科の卒業生は、全日制で昭和二四年三月の第一回より、三七年三月の第一四回卒業まで合計五四一名の卒業生を出している。定時制では昭和二九年三月の第一回より三七年三月の第九回卒業まで合計九三名の卒業生を出している。

就取については、終戦当時の一時期はよくなかったが、卒業生、諸先生達の努力によつて、現在では全員就取（化学工業の全分野、鉄鋼、造船、電気関係）できている。（工業化学科・職員）

土木科とその昔

（昭14・士卒） 村 山 保

昭和三年四月、土木分科として呱呱の声をあげた。当時は二〇名の定員であつて建築科と同じ教室で勉強した。土木専門の教科の時間だけは別の教室に移った。当時の教育方針は普通科に重点をおいたので専門教科の時間は随分少なかったように思う。先生も勝先生と深谷先生の二人だけであつた。実習と云つたら測量実習だけで、ゲートルをはいて小津神社のあたりをよく測量したものであつた。

昭和十三年秋に深谷先生が鉄道大臣官房研究所へ御栄転なされ、高知駅頭で涙を流して別れたことであつた。深谷先生の後任に西本新次先生が営林局の勅任技師を退職されて見えた。

やがて戦争も酷となった昭和十七年四月棧橋通二丁目へ移転し、つゞいて昭和二十年七月四日空襲の為灰燼と帰した。その頃は高知商業学校が廃校の懸念ができて、土木、建築、採鉱、の三科はお隣の商業学校に移り名前も商工学校と改めていた。やがて終戦と共に昭和二十一年四月七日、土木、建築、採鉱の三科は設備もろとも高知工業学校へと帰ってきた。当時の土木の先生は西村志澄先生、松村進一先生、村山保、であった、やがて石川貴泉先生、森親泰先生が見えた。

昭和二十三年六月一日定時制土木課程が昼間におかれた、当時の生徒の中には中学校を卒業したのも相当居た。即ち二つの中等学校を卒業したわけである。やがて定時制は夜間部へと移っていった。昭和三十六年三月森先生は退職され田村象太郎先生が定時制より見えた。又昭和三十七年四月には金沢工業高校より宮田隆弘先生が見えて益々陣容は充実した。

定時制には松村進一、北岡健一、鎌倉隆三の三先生が居られる。設備も次第に充実し、コンクリート実験室、水理実験室、土質実験室もできて、堂々たる偉容を示している。卒業生も一流の会社へどんく合格し、卒業生は至るところで活躍し、名実共に日本的高知工業高校土木科として発展しているのである。(土木科職員)

建築科の沿革

(昭15・建卒) 坂本 聰 平

昭和三年四月定員二〇名で高知工業学校に建築分科として発足し、土木科と同一教室で普通科目を同時に、専門のみ別々に学んで、卒業した第一回生は、わずか十二名であった以後八年二十五名定員になるまでは一七名を最高として誠に小人数であった、昭和十三年初めて、二十四名の多数の卒業生を出した。

先生も昭和四年森本長太郎先生、同六年平岡盛数先生の二方で、実習設備も少なく、参考書も無きに等しく、製図室のみ土木科共同とはいえ、広さも

又眺望も申分なく、資料の少なきを嘆きながらも、眼下のイチョウの大木を眺めながら、張り切って設計に励んだことであった。資料も、昭和十二年同窓会の寄付により、当時としては文化的で理想ともいえた吉崎記念図書館の設立により、徐々に充実され、途上の戦災、混乱を経て再び今回の同窓会館工業図書館の再建となったのである。

県下にもその類のない形で寄付され、鉄筋コンクリート二階約一二〇坪の建築は形態のみでなく、出発からの精神に於て又、それ以後の監理に於て、県下はおろか全国にも誇り得るものであろう。わが建築科も戦前においては日本全国に満州の地に雄飛し、定員も増加し第二本科の設置等により多数の人員を養成し校舎の焼失により商工学校として市商で学ぶなど数多くの苦難は経てはきたが、二十八年、三十年度の産振法による実習設備の充実、校舎(製図室、準備室、実験実習室)等の充実につれて、内容も又発展して居る。戦前卒業の方々が、吉崎図書館が当時異彩を放ったのにも似て活躍されたように、現工業図書館が全国有数であることに恥じない活躍ができる様努力し、全国各地に就職している先輩の名を汚さぬ様在学习中から頑張っております。卒業生も毎年四十名前後県内外各種各様の分野で、各々の本分を尽しております。(建築科職員)

工芸課程

渡 辺 満 稔

昭和二十四年学制の改訂に伴って市立工芸高等学校が改訂の基準その他に適合せず結果的に県立工業高等学校に合併県に移管せられ、同年九月県立工業高校の木材工芸課程として発足したのである。

以来市立時代の脱皮につとめ教科の内容充実にも全員努力して来たのであるが、近時産業(特に木工芸関係)の生産性の合理化産業内容の研究等戦後目覚ましい伸展に伴い工芸課程の内容も当然前進を要求され、昭和三十八年度より教科の内容にデザイン装備計画工力学等を取り入れ名称も工芸科と改称

して内容も更に充実すると共にその特殊性を生かすべく努力している。
 工業高校の伝統は尊いものであるが、工芸と言ふ両面にまたがる科の独自性を将来如何に課程に生かし更に又卒業生が生産社会にどの様に伸び得るか工芸の社会部門に於ける分野は非常に多岐なのでこれ等の事柄を考慮して三ヶ年間にこの独自性を生かすべく科の職員一同頑張っております。

設備機械類

(工芸科職員)

組立実習工場	丸鋸盤	丸鋸昇降盤	帯鋸	ダブルマシ	鳩尾型柄取機	角のみ機	手押ドリル	円筒式サンダー機	超鉋仕上盤	自動送鉋盤	手押式鉋盤	自動目立機	グラインダ	動力ミシン	足踏ミシン	彫刻挽物工場	丸鋸昇降盤	帯鋸	手押鉋機	旋盤	材料試験室	ブルネル硬度機
.....
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	五	一	一	一	一	一	一	一

木材万能試験機	赤外線乾燥器	高周波乾燥器	アクメ式乾燥器	塗膜試験機	マイクロトーン	塗装実習室	コンプレッサー機
.....
一	一	一	一	一	一	一	一式

右の主要機器類その他が現在設備されておる内容である。

なつかしの応援歌

中山卯月

北門筋にわが工業学校が生れた頃の日本は、スポーツが大きく伸びはじめた時代であった。新しい学園づくりにこのスポーツが貢献したことはいうまでもない。

大正七年七月高知県最初の野球試合に活躍したのは工業健児であった。

テクニカルのジャイアント
 六八州に雄飛せる 我が工業の野球団
 見よや我等の鉄腕に
 ラ工業 ラ工業 工業 工業フレ
 天馬の空を行くがごと 我が北門の健男児
 我等が選手ふるいなば 見よや敵の胆寒し
 見よや科学の洗礼うけし
 工業ナインが攻めゆかば
 防ぎもあえず敵塁くだる
 見よや我等の鉄腕

相撲や庭球の試合もさかんに開かれるようになった。この時代の応援はとも熱があり、若人はその血をわかせた。相手をやじることなど何とも思っていないかったものである。

商業 商業といわんすけれど

諸行(商業)無情と消えていく

チャカホイ チャカホイ

一中 一中といわんすけれど

敗けるが日本で一中ぢや

チャカホイ チャカホイ

二中 二中といわんすけれど

敗けたら日中(二中)にや帰れない

チャカホイ チャカホイ

師範 師範といわんすけれど

工業とやるのは思案(師範)顔

チャカホイ チャカホイ

新しい校風は若人のたくましい力によって建設されて行った。日一日と。

仰げば高き高坂城 理想は高き自由と正義

われ等地上の覇者なるぞ

行手に高き勝鬨の声 進め工業

× × ×

妖星落ちて嵐まい 小津原頭に風をよぶ

積る恨みを晴さんと 立ちし王者その名工業

高坂風の朝風に なびく我等の旗印

せつさたくまの腕はなる

ほゆる獅子王その名工業

× × ×

思い起すは去年の秋 泣いて誓いし春この日
会稽の恥すすがんと 立ちし王者その名工業

雌伏一年血をのんで 待ちに待ちたる決勝の

その日はついに来たりけり 我に刃向う敵いづこ

× × ×

山は、山はアルプス

流れは ナイル

人は高知の華とよぶ

工業、高知工業の

ヤレ、コレ 選手さん

勝ってくれ シヤ、シヤ

シャンと 勝ってくれ……

× × ×

大会に選手たちを送る時みんなが校庭で選手をかこんで

やよわが選手心せよ すぎにし年の戦に

我等が武運拙くて 破れし時のくやしきよ

敗惨の身に言葉なく 唯泣く泣くに来るべき

雪辱の日は待ちわびる 多年の雌伏今ここに

流血燃ゆるわが選手 兄等の任務軽からず

積るわれらのこの恨 晴らせや諸君の鉄腕に

更に選手たちを鞭うって

唯に血を盛る瓶なれば 五尺の男児用なきも

高打つ胸の陣太鼓 たまのひゞきを伝えつつ

不滅の真理先頭に 進めと鳴るを如何にせん

嵐狂えば雪降れば いまや燃え立つ意気の火に

血はさかまきてあふれきて

陣鼓ひびかん北門の 健児髀肉を歎ぜしが

遂に決勝の秋来る

平和はいづれ偷安の 暫しの夢にあこがるる

痴人初めてよく解かん 益荒猛男が今日の春

花よりもなお花やかに 輝く功をたてんかな

× × ×

若人は更に次のようなのも愛唱した。

鯨鯢吠ゆる常夏の 南海健児集いて五百

我等地上の覇者なるぞ 行手に立つは勝利の栄冠

偉人を生みし土佐の国 自由の焰にもゆる若き血

我等地上の覇者なるぞ 行手に待つは勝利の光

(体育科教官)

